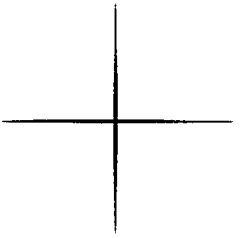
Remember your Creator in the days of your youth

若い日に創造者を覚えよ



青柳 惇

技術経済研究所

若い日に創造者を覚えよ◉目次

若い日に創造者を覚えよ 7
主の恵み——腎移植手術を終えて 27
天国への階段 47
聖書に学ぶ子育て 65
運命と神と 83
光の中を歩め 103
生と死——先に逝った友へ 123
ふたりの主人 145

生きるにしても、死ぬにしても 169
神のやしない 187
エレミヤの信仰 209
初めの愛へ 227
霊とまことによって 239
キリスト者の戦い 257
終わりの日に 275
LIFE and DEATH—To My Late Friend Y i
あとがき 299

表紙デザイン　石黒郁彦

若い日に創造者を覚えよ

若い日に創造者を覚えよ

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。　（伝道者の書　12・1）

「頑張らなくっていいんだよ」

私は、今から約三年前この「キリスト集会」に導かれました。それまでの私は「聖書」というものを手にとったことすらありませんでした。

この集会に導かれて驚いたのは、ここにはそれまで自分が生きてきた世界には無かったことを色々発見したことです。それらは私にとって新鮮な発見であると同時に、ある意味では大きなカルチャーショックでもありました。今その一つ二つをあげてみますと……。

一つは、この「キリスト集会」という集会そのものでした。それは、ここに集まる人々がとても明るくて温かくて自由でそしてさりげなかった、言い換えると、押し付けがましさがなかった、ということでした。

また、組織論的にみましても、通常人間が複数集まると、必ずと言ってよいほど力の作用が働き、一種のヒエラルキーと言いますかピラミッド型の階層社会が形成され、その結果ボスとそれを取り巻く子分が誕生する。それは組織というものの安定化のためには、ある程度は不可避であると思い込んでおりましたので、そのようなことが一切見られない当集会は驚きでありかつ新鮮でした。

見かけによらず私は人見知りをする質で、初対面の人の中に入っていくには、通常相当な努力を必要とします。ところがどうでしょう。ここではその努力はまったく必要ではありません。ありのまま

の自分をそのままさらけ出して、それで安心していられるのです。温かさとくつろぎと自由がここにはあります。

どちらかと言えば私は、神様とのお付き合いは二の次にして、むしろこうした人々との素晴らしい交際に魅かれて、集会に足繁く通い出した面が大きいように思うのです。

驚いたことのもう一つは、「頑張らなくっていいんだよ」ということでした。これには驚きました。と言いますのも、それまで私は自分にはもちろん人に対しても、事あるごとに「頑張れ！　頑張れ！」と言い続けた人生を送ってきたからです。

人間、せっかくこの世に生を享けた以上、その人生をできるだけ有意義に送らなければならない。そのためには、自分の目標をしっかり持って、それの達成に向かって最大限努力しなければならない。と、そのように考えてきたからです。ところが当集会では、「頑張らなくっていい」「努力なんかいらないんだ」という雰囲気が何となくある。

信仰を持つには努力はいらない、ただ赤子のような素直な心で、ありのままの姿でイエスさまのところに来ればよい。信仰を持つために、善い人になり良い行いをしようと頑張らなくっていいんだよ――元来はこういうコンテクストで用いられてきたのだと思うのですが、「言葉が一人歩きする」とでも言いますか、別のニュアンスをも持つようになってきた。すなわち、

この世は言わば仮の世界、天国に入るまでの準備期間だ。自分たちの国籍は天国にある。だからこの世ではあくせく頑張らなくていいんだ。それでなくても短い人生、いや、それにいつイエスさまの

再臨があるかしれない。だから神様に全てを委ね、ひたすら祈っていればよい、と。

これには実は弱りました。百歩譲って、私のように年を取って余生がそう残されていない者にはまあ仕方ないにしても、これから人生の本番を迎えようという世の若者たちが、一様にこのような考え方を持つとしたら、世の中は一体どういうことになるのだろう。この世は「若年寄」で満ち溢れるのではないか。

人間として向上しようという一種の衝動は青年の成長にとって自然なもの、いや必要なものであります。若い人々が心に理想を求める精神を持ち、それに少しでも近づこうとする生活が、言うならば「生き甲斐のある生活」というのではないのでしょうか。

だから私は思いました、こういう考え方は若い人たちには伝えられないなと。私どもには三人の息子がおります。案の定、その一人からこんな反発が返ってきました。

「お父さんなんかはもう人生を沢山やってきたのだからいいよ。しかもやりたいことを充分やってきたのだからもういいでしょう。僕なんかはこれからなんだ。いろんなことに挑戦もしたいし、自分の足で立って自分の人生をつくっていきたい。どこまでやれるか知れないがやれるところまでやって、自分の力の限界も見極めたい。だから今神様のことを考える気持ちになんかなれないの」。

豊かさを求めて

この息子の考え方の是非についての吟味は少し後回しにして、ここで自分自身の若かった時を振り返って見たいと思います。

私が小学校に入学した年の八月に第二次世界大戦が終わりました。敗戦の日本、そこには住む家は焼かれて無く、着るものも乏しく、それに極端な食糧難がありました。食うや食わずのどん底の暮らしの中で、人々は豊かな生活を夢見ました。そしてそのお手本がすぐ身近にありました。それは戦後どっと入ってきたハリウッド産のアメリカ映画でした。広くて清潔な家、溢れるばかりの各種の電化製品、大きなクルマ、それに思わず唾をのみこむような豊かな食卓。

日本を物質的にもっと豊かな国にしよう！　経済立国だ、貿易立国だ。そのためには、日本は天然資源に乏しいのだから、その分余計に働かなければならない。それが当時の多くの日本人の共通の思いだったように思います。

そんな中で少年時代を送った私は、大学を卒業するとなんの躊躇いもなく実業の世界に身を投じました。東京銀行、いまはもうそのままの姿ではなくなりましたが、当時は我が国唯一の外国為替専門銀行。海外雄飛（この言葉ももう随分古びてしまいましたが）を夢見ていた私は、勇躍してこの銀行組織の一員となりました。

入社して数年、海外研修生として私は初めてアメリカを目のあたりにしました。サンフランシスコ空港を一歩出たとき私の口をついて出た言葉は「すごい！　外車ばっかりだ」でありました。縦横に行き交うハイウエイをすいすいと音も無く走る大きな外車。それと泥んこ道をよたよた走り、よくエンコする国産車との対比は、今では想像もできないほど大きなものでした。時は一九六〇年代の後半、

当時の為替相場は一ドル三六〇円の固定相場でした。

三年弱の滞在の後、東京に戻りました。東京では主として本店での勤務でしたが、約十年後再び北米勤務となり、ニューヨークにまいりました。

この十年間の日本の経済成長は、特に対外貿易の面で目覚ましいものがありました。一例をあげますと、前回の滞在の時は日本のクルマは性能が悪くて、アメリカのハイウエイを米国車に伍して、長時間ハイスピードで走り続けられるかどうか疑問視されていました。事実日本車を見ることも少なく、たまに見かけると、「あっトヨタだ、ニッサン（ダットサンといっていましたが）だ」といって指差して喜んだものです。

ところがどうでしょう。今回は、間に二次に亘るオイルショックがあったこともあり、効率の良い日本車が引っ張りだこでなかなか手に入らない。発注してから入手まで六ヶ月もかかると言われて、何とかならないかとアメリカの友人から泣き付かれたこともありました。外国為替は円高方向への一途でした。したがって海外進出する日本企業はあれよあれよと言う間に急増しました。

金融面からそのお手伝いをするわれわれの仕事も勢い忙しくなりました。日夜をわかたず、休日も返上するなどはザラで、それは大変でしたが、日本経済発展の一翼を担っているんだという自負が、まだ若かった当時の私たちには疲れなどを厭わせませんでした。

東京銀行という会社は、横浜正金銀行といっていた戦前から割合自由闊達な気風がありました。頭取から昨日入ったばかりの新入行員までお互いをサン付けで呼び合い、いわゆる学閥や派閥といった

ものが比較的少なく、下の者が上司にずけずけ言いたいことを言っても、それを許す。いやそれがよいと思えば積極的に採りあげてくれる、といったところがありました。おかげで生意気盛りの私でも、多少ならぬわがままにも目をつぶってくれ、思う存分やりたいことをやらせてもらいました。

心の暗やみ

そんな私でしたが、それでは毎日が楽しいばっかりで何の悩みも無かったのか、というと必ずしもそうとばかりは言えません。夜一人のときなど、心の中にしのびよる暗い感情はどうしようもありませんでした。それは「不安・恐れ・孤独」といったような気持ちでした。

銀行の仕事の主なものの一つは、信用を供与する、平たく言えば相手を信用して金を貸す、ということがあります。金は貸したが貸した金が返ってこない、というリスクに常につきまとわれます。また外国為替や株式あるいは金利といったいわゆる「相場商品」を扱います。それらの取引をする市場は、地球の回転にあわせて二十四時間開いています。ですから、こちらが寝ている間にも、どんどん相場が上下する危険に常に曝されます。心の休まる暇がありません。

同時にそこは厳しい競争社会でもあります。競争に自分だけ取り残されるのではないか、という不安と焦り。競争者に対する闘争心とねたみ、払拭しきれない疑心暗鬼と孤独感。自信過剰と極端な自信喪失の繰り返し。

それは慢心と意気消沈との間にたえず動揺する毎日でした。あの時少しでも神様の方に顔を向けて

いたら、と今となってはそう思うのですが、当時の私は神様のことなど思いもよらず、心の片隅にも思い浮かべることはありませんでした。それでいて常に何かに怯えていたように思うのです。

「天職」ということ

さて　ここで先ほどのテーマに戻って少し考えてみましょう。勤労すなわち職業労働について聖書はどのように言っているのでしょうか。

あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。（詩篇一二八・二）

なまけ者は欲を起こしても心に何もない。しかし勤勉な者の心は満たされる。（箴言十三・四）

私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるなと命じました。ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締まりのない歩み方をしている人たちがあると聞いています。こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンをたべなさい。

（テサロニケ人への手紙　第二　三・一〇～一二）

このように聖書は、われわれに勤勉に仕事にいそしむことを教えています。殊に最後の箇所は、イエス・キリストの再臨が近いという信仰が熱狂的に高まり、毎日仕事もせずぶらぶら暮らしていたテサロニケの信徒たちを諫めた、パウロの言葉といわれています。

この世にあるかぎり、人は熱心に働くべきことを聖書は勧めています。したがってわれわれは毎日の仕事に「頑張らなくては」ならないのは確かであります。

では、「頑張る」のはいいといたしまして、次に、一体どんなことに「頑張れば」いいのか、何のために「頑張る」のか、誰のために「頑張る」のかということについて少し考えてみたいと思います。憲法のもと、職業選択の自由などとうたってあり、われわれは自分で自由勝手に自分の仕事を選んでいるように見えますが、果たしてそうなのでしょうか。カール・ヒルティは「幸福論」の中で言っています。

《青春の夢は軽んじてはならない。それは大抵、その人のまだ自覚しない素質に応じたものであり、したがってまた、その人の使命とも一致することが多い。つまり、人の使命も、最初はただ空想的な未来像として現れてくるものなのである》（草間平作訳）と。若い日に将来を夢見て、これに自分の生涯をかけたいと願うこと、これは実は神様から自分に授けられた使命なのだ、ということです。

職業を意味するドイツ語はBeruf、英語ではcallingですが、このいずれにも明らかに神から与えられた使命という観念が含まれているそうです。日本語では「天職」と訳しているようです。問題は自分の仕事を、これが神様から授かった自分の使命だと自覚するかどうかにあるのではないでしょうか。

内村鑑三が「天職発見の途」と題して次のように言っていますので、ご紹介しておきます。

《あなたの全力を注いであなたが今日従事している仕事に当たりなさい。そうすれば遠からずしてあなたはあなたの天職に到達することができます。あなたの天職は天からの声でもってあなたに示されず、またあなたが思考をいかに凝らしてもこれを発見することはできません。あなたの天職はあなたが今日従事している職業によってあなたに示されます。あなたは今やあなたの天職に達せんとしてその途中にあるのです。さあ勇気を鼓舞して進みなさい。なにゆえ惰想に耽って天職発見の時期を遅滞させているのですか》（原文は文語体）と。現在の職業に全身全霊を投入してみなさい、そうすればそれが自分の天職であることがわかると、内村鑑三は言っています。

また聖書は、それが神の御意思であることを次のように明らかにしています。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。（ピリピ人への手紙　二・十三～十四）

「神」の存在

さてここで、先ほどの私どもの息子の一人が言ったことについて考えてみたいと思います。

信仰は、あの世すなわち死後の世界での安楽を願うものであって、この世での人間の生き方にはか

かわるものではない、と誤解している面はありますが、人生をそれなりに前向きに受け止め、一生懸命に取り組んでいこうという姿勢は評価できます。ただ問題は、それを自分だけで、自分の力だけに頼んでやろうとしている、自分しか見えていないところにあります。

厚く雲が垂れ込めた世界を想像してみてください。大きな高い山の山裾に自分は棲んでいて、高嶺から流れ来る清水で自分の命を保っているのですが、厚い雲に遮られてその高い山が見えません。したがって雲の下の狭い空間だけが全世界と思い込み、その中でなんとか自分だけを頼りに自立しようと、暗闇にあがいている一人の人間像が現れてこないでしょうか。

主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渇きをいやします。そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています。主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわざの実によって満ち足りています。

（詩篇　一〇四・一〇～十三）

別の一人の息子はこんなことを言いました。

「僕は、人間を超える何か大きな存在というものが存在することって、有り得るような気が何となくするよ。しかしそれは僕たち人間の意志や希望や願いとは関係なく、それ自体の意思でわれわれ人間を支配するもの、人間の力ではどうしようもないもの。運命とでも言ったらいいのかな……」。

先ほどの景色を思い浮かべて下さい。厚い雲が頭上にあることはあって、上が見えないことには変

わりないのですが、先ほどと違うのは、雲の上に高い山の頂きがポッカリ浮かんでいることです。まさに「頭を雲の上に出し」た富士のような高嶺が、雲の下に棲む人間にも遥か遠くに見晴るかすことができるのです。見えることは見えるのですが、しかしその山頂は自分とは無関係の存在であり、それと自分が結びついている事実を認めようとはしない。

本当は、山頂から流れ出る神の愛という、神の恵みという清水の恩恵を受けて、自分の命を保っているのにもかかわらず、そのことに気がつかない。神様が私個人に、個人的に、限りない愛を注いでくださっているのに、そのことに気がつかない。

主は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。

（詩篇　三三・十三～十四）

このように神様は、天から私たち人間一人ひとりに目を注いでくださっているのに、しかし残念なことに、地上の人間はこの神様のまなざしに気がついていない。したがって神様との対話もない。この息子がおかれている状態はこのようなものではないかと思われます。しかしこれは他人事ではありません。これは息子どもだけでなく、私自身が辿ってきた道でもあります。

しかしながら、ある時目の前を覆っていた霧のような雲が少しずつ薄れて、眼前に突如として姿を現したあの偉大な山容を見た時の驚き、この大きな豊かな山（やまよところ）懐に自分は抱かれていたのだと気がついた時のあの安心感と喜び、それにおそれに似た畏敬の気持ち、これは私にとって忘れることのでき

ない経験です。

今、雨雲の中に輝いている光を見ることはできない。しかし、風が吹き去るとこれをきよめる。北から黄金の輝きが現われ、神の回りには恐るべき尊厳がある。（ヨブ記　三七・二一～二二）

若い日に創造者を覚えよ

しかし本当のところは雲なんて初めから無かったのです。雲があったのは自分の目の中、自分の心の中だったのです。したがってこの経験を私は、私どもの息子たちを含む若い人たちに、私のように年齢を重ねた後ではなくて、もっと若いときに是非体験してもらいたいと、心から切に願うのであります。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。太陽と光、月と星が暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。（伝道者の書　十二・一～二）

伝道者の書は言います。人生は空だ、すべてがむなしい、風を追うようなものだ、と。

ビジネスや学問あるいは政治の道を志し力を尽くしても、人間結局は死ぬ。そのことを思えば人生は空の空だ、と言うのです。

一見、徹底した虚無主義（ニヒリズム）の思想を語ります。しかし、あなたの若い日にあなたの創造者を覚えておけば、人生は虚無だけではない。人生が空の空とならないためにはただ一つのこと、創造者を覚えることが必要だ、と強調するのです。人生のすべては結局神を知るということに帰するのだ。そして神を知れば、人生ことごとく善である。善であることは幸福である。

この伝道者の書は、人生のすべてのことをことごとく否定してきて、すべて空の空なるかな、みな空だとして、最後に、しかし否定できないもの、それは創造者、神の愛だと言います。この神の愛を知れば、人生はことごとく肯定される。一度否定したものがみな肯定されるのです。

人間は本来自主的なものではなくて、神様によって造られたものである。神によって造られ、神によって遣わされ、神から用事を言いつけられているものである、という立場にあると自覚することによって、初めて人生は肯定されてくるのでありましょう。

「人事を尽くして天命を待つ」という言葉があります。

私はこれまでこの言葉が好きでした。自分としてやるだけのことはやった、あとはなるようになるしかない。努力を尽くした後の一種の爽快な満足感と、あとは何ものかにすっきりと身をゆだねる潔さ、といったものがこの言葉から感じ取られるからです。しかしながら一方では、これでは来るべき天命が何であるか分からないから、心中不安があることもまた事実です。

矢内原忠雄先生が、そうじゃないんだ、「人事を尽くして天命を待つ」んじゃないんだ。正しいのは、「天命を信じて人事を尽くす」ということだ、とお書きになっているのを読み、その通りだと思いました。遅まきながら私が神様を知ったあとのことでした。もしこのことをもっと早くに知っていたなら、若い日に抱いたあの暗い感情、「不安」「恐れ」「孤独」という気持ちを徒らに持つことなく、もっと落ち着いた堅実な生活が送れたのではないかと、今になってはそう思うのです。

そういう訳でありますから、私がここで若い人たちに繰り返し伝えさせていただきたいことは、神様と自分との関係の正しい自覚の上に立って、人生の目的に向かって、若者らしく雄々しくつき進んでもらいたいということであります。

老いをむかえて

じゃあ、若者はそれでよいとして、お前自身は一体どうなんだ？　という声がどこからか聞こえてくるようであります。

老年……それは、ずっとずっと先のことだと思っておりましたのに、そうでもなくなりました。あと二ヶ月もすれば、私は六十歳の誕生日を迎えます。もう立派な老人です。先ほど挙げたカール・ヒルティは同じく「幸福論」の中で、老人の生き方を三種類に分けて述べています。

すなわち、第一は生活享楽派であります。品のよしあしの差こそあれ、余生をできるかぎり享楽しようとして、時には老年のあさましい姿をさらけ出す。

第二は悠々自適派であります。別荘や隠居所で尊敬をうけながら、晩年を上品な無為のうちに過ごす。

第三は、より高い命への前進派であります。決して後ろを振り返らず、来世へ向かって進む生活である、と言っています。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ、私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

（ピリピ人への手紙　三・十二～十四）

当集会の松島兄姉のお父上であります故松島省三先生は、この第三の生き方に関して次のように要約なさいました。また同時に先生御自身も自らそのように生きられた、とうかがっております。すなわち、

「老年期の生活目標は実を結ぶことであって、休息することではない。すでになし終えたことを無価値だと見なすべきである。常に新しいことを学び、何ごとかに興味を持ち、たえず前途の計画を立てていることである」と。

むすび

できることなら私も、この第三のカテゴリーの老人のように、新しいことに向かって、残されたこれからの人生を送れればいいな、送りたいなと思います。

青少年時代に抱いた望みどおり、日本は物質的にはある程度豊かな国になりました。しかしその結果どういうことになったのでしょうか。それは皆さんも毎日見聞きされるような、ご覧のような惨状とも言うべき今日の日本の状況です。

人間の欲望は、さらに新しい欲望を生み出す。そしてその欲望をつらぬくためには手段を選ばない。自分さえよければよい、他人の犠牲などかまっていられない。

このことは財産とか物質的な繁栄というものが、人の生きるための目的そのものにはなり得ないことを明らかにしています。財産とか物質的繁栄は、人生の目的を達するための役に立つ器であり手段ではありえても、それ自体が人生の最後の目的たりえない。否むしろ、用い方によっては、あるいは用いる人の意図いかんによっては害毒となり、大きな弊害をもたらすものであると。

同様に、この世における名誉や権力あるいは肉体の健康でさえ、それ自体が人生の目的とはなり得ないと思われます。それらは物質的なものと同様、「得るのに限りあり、望むのに限りない」からです。

それでは人生の真の目的は何か、真に人を幸福にするものは何か、ということになりますが、それは、再びヒルティの言葉を借りれば、「神のそば近くにあって完全に正しい生活をいとなむこと」であります。

しかしそれは口で言うには易く行うに難しであることは間違いなく、またそれが今後の私の人生において具体的にどのような形で示されるのか、まだ私にははっきりとは見えてきません。見えてきませんが、神のみこころを常に探り求めて、指し示されることに対し、それが何であれ、それに向かって自分のこれからの人生を捧げて歩んでいきたいな、と考えている次第であります。

ただ嬉しいことにこれから歩もうとする道は、険しいかもしれないが、しかしあの若い日に辿った道のような「不安と恐怖と孤独」の道でないことは確かであります。それは以前は一人で歩いた道ですが、今はイエスさまがともに歩んでくださるからです。そのことを私は確信したのです。

冒頭に、この集会の兄弟姉妹方が明るく輝いておられることを申しましたが、その理由が分かりました。それはイエスさまが皆さんとともにおられるからです。イエスさまは言っておられます。

《ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです》（マタイの福音書　十八・二〇）と。

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。

（詩篇　三四・五）

このように、当集会の兄弟姉妹方は、鏡のようにイエスさまの栄光を反映させながら、明るく輝いておられるのだと思い当たったのです。皆さんと共にイエスさまがおられる、そしてその群れの中に入れていただいた私自身もイエスさまと共にあるという発見は、私の心をしみじみとした喜びと希望で満たしました。

そういう訳ですから、これからもイエスさまに守られながら、指し示される目標に向かって、兄弟姉妹方と共に、一心に歩ませていただきたいと思っています。

しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。（コリント人への手紙　第二　三・十六～十八）

（一九九八年九月）

主の恵み ―腎移植手術を終えて

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。　（ヨシュア記　1・9）

はじめに

私は約三週間前、私の腎臓の一つを息子に移植する、いわゆる生体腎移植手術を行って頂きました。幸い術後の経過は順調で、私は手術後一週間で一足先に退院し、目下自宅療養中であります。息子はまだ病院に留まっておりますが、マイナーな問題点はいろいろあるにせよ、全体としては快方に向かっております。

この間、多くの兄弟姉妹方に祈って頂き、またみことばをもって励まして頂き、本当にありがとうございました。今回の一連のことを振り返ってみますと、その一つひとつが主によって備えられ、主によって守られていることを覚えますので本当に感謝であります。

今日は、私どもが今回のことを通して体験した主の素晴らしいみわざと、私どもに示されました主のご栄光について、少しお証しさせて頂きたいと存じます。

息子の発病

私が当「キリスト集会」に導かれましたのは、家内に遅れること約半年、今からちょうど三年前の一九九六年元旦礼拝からでありました。集会に集い出して半年もする頃より、それまで何ひとつ問題なく、平和で堅固だと信じておりました我が家に、次々と問題が起こってきました。その一つがこれ

だったのです。

結婚して広島で銀行員生活を送っていた長男からの連絡で、会社の定期健康診断の結果、腎臓に異常があるようなので大学病院で調べてもらうよう言われたというのです。診断の結果判明したのは、嚢胞腎ではないかということでした。嚢胞腎という病気は、腎臓の中に液体を入れた袋（これを嚢胞というのですが）が多数でき、これらが段々と大きくなり、腎臓を押し広げると同時に本来の腎臓の実質を圧迫して、腎機能が低下し、やがては尿毒症、腎不全へと進んでいく恐ろしい病気だということでした。

若干痩せ気味ではありましたが小さい時から特に健康に問題があるわけではなく、マラソンや山登りが大好きな元気な子供でしたので、それが三十歳になったばかりでこのような病魔におかされるとは、と一時は暗澹たる思いに陥りました。その後は、薬を服用する傍ら、食事制限・激しい運動の禁止等いろいろの生活指導が行われました。

双子の誕生

その年も暮れ近くになって、息子夫婦は転勤で東京に戻ってまいりました。新しい職場は彼の健康状態を配慮して決めて頂いたときいております。しかし近くに帰ってきたからといって、私どもがしてやれることはごく限られており、私どもにできることは、症状がこれ以上悪化進行しないようにと祈ることぐらいでした。

この病気は、本人には自覚症状といったものがあまりなく、病状の進行も割合ゆっくりしたものでしたから、外見では健常人とさほど変わりはなく、普通の生活ができているようでした。しかしその実、病気は密かに進行している模様で、検査のたびに与えられるデータは少しずつ確実に悪化していきました。

ただ一方では喜びもあり、その年の秋、結婚後四年ぶりに待望の赤ん坊が与えられ、それも双子の男の子ということで、おりしも「スイス喜びのつどい」に参加中の私ども夫婦に、嬉しい国際電話のニュースがもたらされました。そしてその翌年春には、私どもとさほど遠くない所に新居も与えられ、親子四人の生活が始まりました。このままでいけば何といいことかと無事を祈りましたが、主はそれをお許しにはなりませんでした。

その年の春、つまり去年の春の検診ではデータの悪化は一段と進み、このままでいくと遠からずして人工透析のお世話にならなくてはならない、とお医者さまから申し渡されました。

「ああ、その手があったか」

それからほどなくしてのことでした。息子から、親子間の生体腎移植ということがあるが一度相談に乗ってもらえないか、という電話が遠慮がちにありました。

心臓や肝臓あるいは腎臓といった内臓の移植手術が行われていることは、それまでにも私は知識としては知っていました。しかしそれは外国での話、日本では何故か制約があり行き渡らず、したがっ

て何か遠くでの話と思っておりましたのが、にわかに現実味を帯びた話として耳に入ってきました。「ああ、その手があったか、なぜそれに今まで気がつかなかったのか！」という思いで私は息子の話に聞き入りました。その上で私は「ああ　いいよ」といって電話を切りました。あまりのあっ気ない私の返事にかえって息子は途惑ったようでした。後で聞く所によると、「おやじは本当にわかって言っているのか」と心配したようでした。

五月十八日朝一番、私と息子は、ひとりはドナー（提供者）、他はレシピエント（受け取り者）としての可能性の検査に、初めて東京女子医大病院へ出向きました。あらかたの説明を聞いた後、それぞれの検査が行われました。この日は息子の方が早く終わり正午頃先に帰りましたが、私の方は二リットルの水をすきっ腹に一気に飲まされ、それから何時間おきにか、お小水と血液を取るという検査で、終わったのはもう午後四時を過ぎていました。

そのまま帰宅しますと家内は留守で、テーブルの上に次のような置き手紙がありました。

「y（長男）が済んだ時点でお礼と報告の電話をして来ました。今日は長時間の検査御苦労様でした。（中略）今後のことも総てを主の御手におゆだねし、全き信頼をもって歩んでいきたいと思います。福音がyに伝わることを祈りつつ。　午後一時十五分、k子」

「まだなにも頼まれていないぜ」

このメッセージには若干背景があります。それは次のようなことです。

息子から腎移植について話があったのは、先ほどの電話の時一回きりで、その後顔を合わせても特にそのことには触れずじまいでいるうちに、いきなり五月十八日の病院アポイントメントを持ち出されたので、私としては内心いささか面白くない思いでおりましたことは事実です。

いやしくも、痛くも何ともないこの身体にメスをいれて、内臓の一部をくれてやろうというのに、あれで挨拶したつもりなのか。いくら親子の間柄とはいえ、もう少しまともな挨拶があってもいいのではないか！　とまあそんな思いがありましたので、それを私は家内につぶやいたようです。そればかりかその思いは、さらに、その日病院の待合室で息子にストレートに一言、私の口をついて言わせてしまいました。「オレはまだ君からなにも頼まれてはいないんだぜ」と。

一方家内の方は、これがどういうことなのかは息子が一番よく分かっている。分かっているはず、親にとはいえ、どんなに大変なお願いをしているのか、自分でよくよく分かっている。分かっているからこそ余計、容易には口に出して言うことができないのではないか。それも理解してやらないで息子を責めるなんて、一体うちの亭主はなんていう人だろう、とつい最近に至るまで、内心裁いていたというのです。

この日の息子から家内への電話で、おやじには直接にはなかなか言えなかったけれど、今度のことではいろいろと……ということで、本人のすまないという気持ちと感謝を率直に伝えた上で、よろしく協力して欲しいとの願いがあったそうです。そんなことがあって、先ほどの書き置きメッセージとなったのですが、そこには家内のそんな複雑な気持ちが込められています。

この二人の気持ちのスレ違いは後になって、私自身は、あたかも自分がひとに何か施しを与えるかのような、勿体ぶった恩着せがましい思い上がった気持ちがあったこと。またこれが何かの美談でで

もあるかのように、ひとからの感謝と賞賛をひそかに期待していた自分の心の卑しさにも気がつかされ、悔い改めに導かれました。

一方家内の方も、あれは愚かな亭主の単なる愚痴ではなくて、それによって、息子が言うべきことを言い易くなるように配慮された、イエスさまのみわざであった。それに気がつかず、亭主を裁いていた自分を大いに反省したようでした。

みこころをたずねる

その第一回目の検査の結果は基本的には「GO」と出、双方の日程調整をした上で、手術はほぼ半年後、年が明けて早々にということに決まりました。

そのように事の運びは決まったのはいいのですがこの頃、自分の気持ちの中で何かしら一寸ひっかかるようなものを感じていました。いろいろ考えてみて、こうするのが一番良いと思えるのだけれど、ただ果たしてこれが「みこころ」に沿っているのか、ということでした。

私の体も、息子の体も全て神様がお造りになったもの。その神様のお造りになったものを人間が勝手に手を加えてよいものか、という疑念でした。近代医学の発達は人間が入り込む領域を大幅に広げ、例えばクローン人間を作り出す可能性まで、現実の問題として提起されてきました。どこまでが人間に許され、どこからが人間が立ち入ることを許されない神の領域なのか、という疑問でした。

このことは、医学者であるS兄弟のご本を読んだり、後には直接お目にかかってお話をうかがった

り、また他の兄弟姉妹方を通しても主のみこころを尋ねました。秋に御代田の「喜びのつどい」でお目にかかったベック兄の笑顔で、これは神様のご祝福を受けていることが最終的に確信できました。

戦友

夏になって、いよいよ息子の人工透析が始まりました。週に三回、一回が三時間でした。来るものが来た、という思いでした。と同時に、早く手術の日が来ればよい、そうすれば、こんな煩わしい透析から息子は解放されるのだから。とその日を待ち望む気持ちが、日増しに強くなってきました。

その頃の私は、手術が行われるのはもう既定事実で、そして手術が実施されさえすれば、直ちに息子も私も健常人の生活に戻れる、と物事を単純に考えていました。その時は、その後行われることになる、気が遠くなるほど多くの事前検査、しかもそのいずれの一つでもパスしなければ手術は実施できない。またたとい手術が成功しても、息子にとっては、それは全行程のまだ三〇%程度を通過したにすぎない、などということは知る由もありませんでした。

十一月になって病院から呼び出しがあり、示された検査項目は、血液検査にはじまり、レントゲンやCTスキャンと、その数は何十とありました。これらを手術予定日の一ヶ月前までに終え、その結果を総合して手術を実施するかどうかを決定する、と告げられました。それからの病院通いが始まりました。息子は息子で検査を受けている模様で、時々病院で顔を合わせると「よう!」といったぐあ

いで、なにか共通の敵に挑む戦友ででもあるかのようなヤル気と連帯感が湧いてきました。

しかし一方では、こんなに沢山の検査のすべてをクリヤーするなんて、それは不可能なことではないか、という弱気ももたげてきました。しかし主は一つひとつ全てを整えて下さいました。

主のご計画

こんなこともありました。私は過去二十年ぐらい定期検診の度に、血糖値が高いことを指摘され続けてきました。このままでいくといずれ糖尿病になる危険がありますよ、だから少し体重を減らしなさい、さもなければ後で後悔しても知りませんよ、とそのたびに脅かされました。しかし過去からのデータを見ると、私の血糖値はやや高目ではあるけれども二十年来その数値は変わらず安定しておりますので、これが私の平常値なのだと自分勝手に決め、お医者さんの忠告には従いませんでした。

ところが一昨年の夏の衣更えの頃、穿こうとしたズボンの腰回りがいつもより窮屈なことに気付いたことがキッカケとなり、一念発起してダイエットを始めました。二ヶ月の間で約五キロほど減らしましたので、もうここらでよかろうと、その後はその水準を維持するにとどめました。

その秋の定期検診には期待をもって臨みましたが、結果は血糖値はむしろ平年より高めと出てガッカリし、お医者さんの言うこともあまりあてにはならないなと思ったことでした。ところがそれから一年後の今回の検査では、ギリギリのところではありましたが、私の血糖値は平常値の範囲に入っていました。ダイエットの効果はすぐには現れず、すこし時間を経てジワジワと効いてくるものなのだ

なと分かりました。しかし平常値とはいえギリギリのところなので、お医者さんは迷われたようでしたが、最終的には術後もフォローアップのための定期検診を受けることを条件に、「OK」の所見を出してくださいました。

自分では何の気なしに、ヒョンなことがきっかけで二十年来の重い腰を上げて、自分でダイエットしたつもりでおりました。しかしもしこのことがなく、私の血糖値がその前年並みでありましたら、今回の手術が果たして実施されたかどうかわかりません。このことを思うと、私たちが思い付きもしなかった以前から、主はこのときをご計画下さり、あらかじめ備えさせてくださったことが分かります。本当に感謝です。

すべての検査が終わり、最終的に予定通り手術実施の結論を頂いたのは、年の暮れも押しつまった十二月二八日、御用納めの日の午後でした。

「頑張ってくださいね」

新しい年が明けると、手術はもう日一日と近づいてきました。この頃になると、「祈り会」などを通じてこのことを知って頂いた兄弟姉妹方や、あるいは会社関係の人たち、また友人知人のなかに今回のことを知って、いろいろお声をかけて頂く方が増えてきました。皆さん一様におっしゃって下さることは、「大変な試練ですね」あるいは「よく決心されましたね」ということでした。ところが頭みて自分の心を正直に覗いてみても、そのいずれもがどうもピンとこないのです。

このことを「試練」と見るよりも、自分の心の中は、むしろ主がご用意下さった明るい世界に至る門をくぐるといった、先に明るさと希望をのぞんで、待ち遠しいような期待感で一杯でした。また「決心」もなにも、このことは自分で決断した意識はさらになく、全く自然に、何か大きなみ手に導かれるまま、それに従っていくという感じで、本当に心は平安で、期待と希望で満たされていました。「主が傍に居てくださる」、本当にそのことが実感できる毎日でした。

余談ですが、この時面白いことに気がつきました。皆さんそれぞれに激励の言葉をかけてくださるのですが、兄弟姉妹方と未信者の方との間では、はっきりと違いがあるのです。兄弟姉妹方は「祈っていますよ」と言ってくださいます。未信者の方がみな一様におっしゃるのは「頑張ってくださいね」でした。どちらかというと、前者の方が私の気持ちにはピッタリくるようでした。

そんなこともあって手術の日の朝、さあこれから手術室へと、ストレッチャーに乗せられ、私の方が息子より一足先に病室を出ようとした時、「お父さん、頑張ってくださいね」と嫁に言われて咄嗟に、「お父さんが頑張っても仕方がないよ、お医者さんに頑張ってもらわなきゃ」と笑いながら憎まれ口をたたいたのも、すこし照れくささもあってそんな冗談でまぎらわした、ということもあるのでしょうが、本当のところはそういった下地があって、つい本音を洩らしたといったところでしょうか。

しかし今思うと、せっかく心配して言ってくれているのに、そのようにはぐらかしてしまって、嫁には少し気の毒をしたなと、一寸反省もしています。

手術室にて

「ちょっと後学のために見せてもらってもいいですか」

手術室に入る前、患者の気持ちをおもんばかってか、タオルのようなもので目隠しをされたのですが、そうお願いすると「あ　どうぞどうぞ」と快くそれをはずしてくれたので、手術室に入っても物珍しそうにあちこちキョロキョロしていたらしく、「どうです、テレビのようでしょう」「いやテレビより迫力ありそう」などと看護婦さんと冗談をいっている内に、隣に息子が運ばれてくるのが見えました。そうこうするうちに、「青柳さん　すこし眠くなってきましたか」と尋かれ、「いーえ　ぜんぜん」と答えたような気もするのですが、私の記憶はそこまででした。

「青柳さーん……」。自分の名前がどこかで呼ばれているようで、ああそうだ、自分はいま手術中なんだ、しかし今ごろ何の用だろう、まだ始まったばかりなのに。何か手違いでもあったのか（まあ最近手術の手違いなどということも時々あるそうですから……）そんな思いでいると、「青柳さん、終わりましたよ、分かりますか。手を握ってください」。

私はまだ半信半疑で、尋き直そうとしましたが、声がよく出ません。手術中、人工呼吸のため喉にパイプを入れていたのと、麻酔のせいか、思うように声が出ません。それでもなんとか、「はい、無事終わりましたよ」「はい、息子さんも頑張っています、順調にいってますよ」「今午後一時五分です」と、これら三つの答えだけは引き出しました。

えっ午後一時？　手術室に入ったのが、朝八時、手術室の時計を最後に見たのが八時四五分。とすると手術室には五時間も居たことになる。しかしこちらの感覚ではせいぜい二〇分そこそこの感じ。へえー楽なもんだな、というのがその時の正直な感想でした。

ガラガラと音をたてる担架のキャスター、ブラブラ揺れる点滴ボトルや袋。それとともに真うしろに走り過ぎる白い天井の壁。廊下・エレベータまた廊下、時々覗き込む通りすがりの人の顔・顔。そのうちに見覚えのある景色に変わると、そこには知った顔、家族の顔、駆けつけて下さった姉妹方の顔がアッという間に通り過ぎ、やがて止まり、一瞬空中に浮いたと思ったら、元のベッドに収まっていました。

後は大勢のお医者さんや看護婦さんが、入れ替わり立ち代わり出入りされていましたが、そのうち「息子さんもかえってきました、うまくいきましたよ」と誰かに告げられ、「ああイエスさまありがとう」と思わず云って、その人と握手したのを覚えています。

それからは深い深い眠りでした。息子は私より約二時間後に無事戻ってきたそうです。

感謝

こんな訳で、手術を受けた本人は、進歩した麻酔技術のおかげで、痛みもなく、それこそアッという間に乗り越えたわけですが、他方これに立ち会う方は大変だったと思います。

自分たちは直接何も手出しできず、ただひたすらに待つだけ。つい湧き起こってくる疑心暗鬼にも、ただじっと耐えるだけ。随分と長い苦痛の時間だったろう、と想像されるのです。が、あとできいてみるとそんなことはなく、付き添って頂いた姉妹方とともに、みことばと祈りをもって、その間実に平安に待つことができたそうです。このことも本当に感謝でした。

感謝といえば今一つは、今回の家内と嫁の大活躍でした。一歳になったばかりの双子と、入院患者二人を抱えて、一人が子供たちを見ている間にもう一人は病院に駆けつけ、患者の世話をし洗濯物を持ち帰る、といった綱渡りのような連携プレーで凌いでくれました。幸いなことにそんな中でも二人は風邪ひとつひかず、また幼い子供たちも健康をまもられ、機嫌良くしてくれていたのは大きな恵みでした。それに、どうしても二人では手が回らないという事態になると、ちゃんと助け手が備えられ、うまく切り抜けられたことでした。

「護られているな」と、本当にそのことが実感されたことでした。

病院で思ったこと

私にとって、本格的な入院生活というのは今回が初めてでしたが、この経験を通して、いろいろ考えさせられることがありました。多少余談となりますが、その二三をあげてみますと……。

一つは、若いドクターや看護婦さんの献身ぶりでした。自分に与えられた使命感に燃え、それに己自身を捧げきる姿は、感動的でさえありました。報酬の対価として労働力を単に提供しているだけの

無気力人間も、マニュアルどおりにはやるけれどそれ以上はやらないといったロボット人間も、そこには存在しませんでした。そこには本来の意味での、ホスピタリティの精神が躍動していたように思います。ちかごろの若い者もなかなか見捨てたものではない、というのが率直な感想でした。

それにしても彼等彼女らのあの忙しさは、もう少しなんとかならないものかと、過酷とも言える職場環境にいささかならぬ同情も覚えました。もし今少し余裕があったらあの人たちは、患者のために、自分が本当はしてやりたいと思っていてもできていないことを、もっとしてやれる喜びを持つのではないか、そんなことを思いました。

二つ目は、病院の食事の不味さです。最近少しは改善されたとはいわれますが、まだまだ、給食は生存を維持していくために必要な栄養源の供給、という昔ながらの考え方が残っているようです。食事は楽しむものです。ましてや入院患者にとっては、数少ない楽しみのひとつでしょう。楽しみのない食事に、いわゆる食文化は生まれません。

この度、はからずも利用者側の経験をしてみて、この業界に身を置く者の一人として改めて責任を痛感し、今後の改善への努力を心に期したことでした。

健康と幸福

最後に、「健康と幸福」ということについてです。

私はこれまで、健康というのは、人間にとっての幸福そのものではないにしても、人間が幸福であるためには欠かすことができないもの、すなわち健康は、幸福であるための必要な条件と考えていました。しかし必ずしもそうでないことに今回気がつかされました。

私の居た病室は、大部屋で八人の患者さんが同居していました。その半数以上が癌をはじめとする重病患者さんたちで、入院経験も二度目、三度目という方たちでした。しかしその人たちがみんな病魔に打ちひしがれているかといえば、そうではなく意外と明るいのです。自分の病気の現状を正確に把握し、それを正直にお互いに話し合っているのですが、それがカラッと明るいのです。再び社会復帰できることを信じて疑っていない様子ですし、そうなればああしたい、こうしたいとお互い夢を語りあっています。決して強がりやせ我慢ではなしに、真実そう思い、希望をもっているようでした。私などの駆け出しの患者、しかも回復はほぼ見えていてごく短期間で退院してしまう身には、そんな人たちの中でなんとなく肩身の狭さがあったのですが、彼等はそんなことお構いなしで、術後の経過を心配してくれ、何かと気を配ってくれました。

その人たちみんながみんな幸福だとはいえませんが、それでは全員が不幸かというと、決してそうは言いきれないものを感じました。人は希望を抱いている時は幸福なのだな、と思うと同時に、しかし希望は時には絶望に変わる。絶望に変わらない希望をもつためには、やはり信仰しかないのではないか——そんなことを思ったことでした。

主の導き

三年前信仰に導かれて、それから半年も経たないうちにこれらの災難に見舞われた頃、ある兄弟にそのことをこぼしたことがありました。それまで何の問題もなかった平和な家庭に、信仰を持ったばかりにこんな厄災が来てしまった。こんなことなら信仰など持つのではなかった。言外にそんな雰囲気を感じ取られたのでしょう。その兄弟はその時は何もおっしゃらず、じっと私の方を見てから、「そうですか、それは困りましたね」とおっしゃっただけでした。

同じ兄弟がこのたび病院に見舞って下さり、その時に三年前のことを覚えておられ、しみじみと私ども夫婦におっしゃったのは、「やはり今度のことは、お二人の信仰を深めるために主がご用意になったのですね」でした。本当にその通りだと、私どもは深い思いでその言葉を受け止めました。

しかし、考えてみるとそれ以上だったかもしれません。そもそも、特にこれといった決定的な理由にも気付かされないまま、私たち夫婦が信仰に導かれたのは、やがてこの事があるからではなかったか、と思われてきたのです。

確かに今回のような出来事は、もしわれわれが信仰を持っていなかったら、果たしてこれに耐えることができたか。いや、仮に頑張って耐え得たにしても、われわれが今回経験したように、「主は最善をなして下さる」という絶対の確信のもと、あのような平安と希望と感謝をもって、このことに向かうことが果たしてできたろうか。そう考えてみるとき、主のはかり知れないご計画と大きなご愛に、圧倒されるような思いがするのです。

息子たちの救い

それにつけても、思いやられることは息子たち夫婦のことです。

今回の発病以来今日までを振り返りますと、息子は、われわれの目から見ると、きわめて平静に事態を受け止め、愚痴ひとつ言うでもなく、ひとに当たるでもなく、無表情といってよいくらい冷静に事に対処してきたように思われます。それだけに、ひとには言えない心の思い、それは挫折感であり、失望であり、無念さであり、家族や周りのひとたちに対するすまなさであり、自分の苦しさや先への不安であったのでしょう。それらを一身に自分の中に背負い込んでいるためか、時々ハッとするぐらい硬い表情を見せることがありました。

「イエスさまに頼んで、全部引きとってもらったら随分楽になるだろうにね」とよく家内と話し合うことです。

話は変わりますが、聖書には「腎臓」がよく出てくるようです。たとえば詩篇十六篇七節に、「私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。」この「心」という箇所の下の注釈をみますと、「直訳　『腎臓』」となっています。

同じく詩篇の二六篇二節にも、「主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。」とありますが、この「思い」というのは、腎臓のことだそうです。文語訳聖書では腎臓の腎の字を当てて「むらと」と読ませています。これら聖書の中における「腎臓」は心の深み、

とか潜在意識という意味があるそうです。

ということは、私は単に私の肉体の一部を息子に提供しただけではなく、私の心の一部をも今回息子と共有することになったようであります。

「なんだ、おやじはこんなくだらないことを考えていたのか」などと私の心の中を見透かされて言われると困りますが、反面、たとい小さくとも私の持っている信仰の気持ちを、今回のことで息子と共有することがもしできれば、こんなに嬉しいことはありません。

ベック兄に、息子夫婦の救いを願っていることをお話すると、「人間は何もできないが、イエスさまにはおできにならないことはないから、イエスさまに委かせて、黙って何も言わず、ただ祈っていればいいよ」とおっしゃいます。

そうすることにします。

むすび

今回のことでは、沢山の兄弟姉妹方から「みことば」をお寄せ頂き、おかげで私どもは大いに力づけられたのでありますが、最後にその中からいくつかを記させて頂きたいと思います。

もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たち

は真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。

（テモテへの手紙　第二　二・十一～十三）

ああ、私は床に上であなたを思い出し、夜ふけて私はあなたを思います。あなたは私の助けでした。御翼の陰で、私は喜び歌います。私のたましいは、あなたにすがり、あなたの右の手は、私をささえてくださいます。

（詩篇　六三・六～八）

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（ペテロの手紙　第一　五・一〇）

わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。

（ヨハネの福音書　一〇・一〇）

（一九九九年二月）

天国への階段

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（コリント人への手紙　第2　4・16～18）

はじめに

私は昨年秋六十歳の誕生日を迎えました。六十歳のことを日本では還暦といいますが、還暦というのは本卦帰り（ほんけがえ）といって振り出しにもどることですから、いわゆる第一ラウンドはこれで終わったということになります。すこし以前までは、「人生五十年」といって平均寿命がそれぐらいだったようで、六十歳まで生きると「賀の祝い」として、特別に長寿を祝ったということですから、すこし昔ならもうこの世にはいなかったかもしれません。

今は平均寿命も伸びてそれほど大騒ぎはしませんが、それでも還暦というと、いつもの誕生日とはいささか異なる感慨を持つようであります。それに加えて、今年は早々に入院生活を味わい、人間の生と死というものに、割合近い距離で向き合う体験をいたしました。

そんな訳で、この世を生きるということはどういうことか、この世とは一体何か。この世をどう生きるべきか。生とは何か、死とは何か。といった事柄について、改めて考える機会を与えられたのは幸せでした。

人生に向かう態度

私の勤務している会社は、その社是のひとつに「Progress」ということを挙げています。プログレ

ス――それは「前進、進歩あるいは発展」という意味があるのですが、当社ではこれに「改善と向上」という日本語を充てています。

現状に満足せず、常に問題意識を持って、問題点を発見すれば積極的に改善を提案し、すぐに取り組みやり遂げる。反省なくして改善なし、実行なくして向上なし。だから、昨日より今日、今日より明日へと一歩ずつでもよい、積極的にこの世に働きかけ、常に改善と向上をはかっていこう……。そのような意味を込めているようです。

他方、これと対極的な考え方として次のようなものがあります。すなわち、

「世の中の事は自分の思い通りになる、ということは望んではならない。むしろこの世に起こる事は、その起こるままに起これ、と願うのがよい。そうすればあなたは幸福になれる。」

これは古代ギリシャ哲学で、いわゆる「ストアの諦念」とよばれる、運命論的な世界観に代表される考え方であります。人の世は思い通りにならないものである。じたばたしたところで、なるようにしかなるものでしかない。したがって一切の事を成り行きにまかせて、いちいち心配することはしない。そうすることによって自分自身の心の平安を保つ、というのであります。

前者は、人間の持つ可能性を認め、よりよい生活を目指して、積極的にこの世を生き抜こう、努力次第で自分の人生はなんとでもなる、という考え方です。

人生は、人間の力によって対処可能なものであると捉え、積極的に生活を肯定し、自らの力で運営

していこうというのであります。ただ注意しなければならないのは、何のために、何を目指して生きていくのか。言い換えれば、人生の目的は何か、ということがこのままでは明確ではありませんので、この点をはっきりしておかないと、意欲と行動はいくらよくても、空回りに終始してしまう危険はあります。

他方後者の考え方は、人間の持つ力の限界、無力感といったものを直視しています。いくら人間が努力しても、人生は空だ、すべてがむなしい、風を追うようなものだ。ビジネス・学問・芸術・政治……どんなことに力を向けても、結局自分の満足は得られない。そんなことなら初めから、物事はその成り行きにまかせて、自分はそれに従うだけだ。そうなるとクヨクヨ心配することは何もない。

この考え方は、夢と理想に燃えている若い世代には、なかなか受け容れがたいように思われます。しかしある程度歳をとって、すこし人生の経験や知識が増し加わると、そして真面目に人生を考えれば考えるほど、人の世に対する失望と悲しみの念は、避け難いものとなることも事実であります。したがって、世の中の苦難や悲しみには目をそむけ、なるべく見ないようにして、ひとり自分の心の平安を求める。

人の世の競争から逃避し、自らの心の中に閉じこもるといった生き方、若干消極的に過ぎるきらいはありますが、これはこれで充分同情を持ってみることのできる考え方であるとも思われます。

人生の目的——幸福の追求

自分の人生をどのように生きるか。これは人さまざまで、人は自分の人生をどう生きるか自らの自由意志で決めることができます。神様はわれわれ人間を「自由意志をもつもの」としてお造りになりました。神様は人間に自由意志を与えられ、自らの自由意志で、自らの責任において、自分の人生を生きよ、と定められているのです。

しかしどのような生き方を選択するにせよ、人が常に求めるものは「幸福」ということではないでしょうか。人間は古今東西、誰もが幸福を求めてきました。今も求めています。そして、人に幸福を与えるもの、それを追求することが、その人にとっての人生の目的、ということになるのでしょう。

それでは、人を幸福にするものは一体何なのでしょうか、これについて、改めて少し考えてみたいと思います

幸福の条件

人が幸福になるために必要なもの、これについてはいろいろのものが挙げられると思います。例えば富や財産、名誉、地位や権力、仕事や事業、健康、家庭、娯楽、芸術や文化等々、数え上げればきりがありません。

まず富や財産について考えてみましょう。

第二次世界大戦のさなかに生まれ、敗戦の混乱の内に少年時代を送った私は、物質的な豊かさこそが人を幸福にするものだと、信じて疑いませんでした。敗戦国と戦勝国、具体的には日本と米国、これら二つの国民生活水準の対比は圧倒的でした。こちらがみじめなだけ余計にそう思ったのでしょうが、あちらの人たちの生活が、なんと幸せに見えたことでしょう。そして多くの日本人は、彼等の幸福をいつか自分たちのものとできる日を夢見ました。

それから五十年あまり、現在の日本は、たしかに物質的には豊かな国になりました。敗戦時の日本人が想像もできなかったような、贅沢で便利な生活を送っています。とくにバブル経済とよばれた時代、多くの日本人は、物質的により高度な生活を求めて、狂気のようにお金を消費しました。しかし果たしてその時、そして今、日本人は満足し、幸福感に浸ったのでしょうか。その逆ではないかと思います。

人間の欲望は、さらに新しい欲望を生み出す。したがってどこまで行ってもゴールはなく、人は満足感を持つどころか、絶えず苛立たしい焦りに追いかけられ、心の休まる暇がありません。そしてその結果、その欲望をつらぬくためには手段を選ばない。自分さえよければよい、他人の犠牲などかまってはいられない、という風潮がこの国を侵し、今や毎日のように見聞きされるごとき、惨状とも言うべき今日の日本をもたらしました。

このことは、富や財産、すなわち物質的な繁栄というものが、必ずしも人を幸福にするものではな

い。言い換えれば、これら物質的繁栄というものが、人の生きるための目的そのものにはなりえないことを明らかにしています。富とか財産は、人生の目的を達するための役に立つ手段または条件ではありえても、それ自体が人生の最後の目的たりえない。否むしろ、用い方によっては、あるいは用いる人の意図いかんによっては害毒となり、大きな弊害をもたらすものであると。

同様にこの世における名誉や地位や権力、あるいは肉体の健康でさえ、それ自体が人生の目的とはなりえないと思われます。何故ならそれらは物質的なものと同様「得るのに限りあり、望むのに限りない」からです。

しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。

（テモテへの手紙　第一　六・六～九）

では次に「仕事」と「享楽」についてはどうでしょうか。

世の中には仕事が生き甲斐だという人がいます。反対に、仕事嫌いのいわゆる「遊び人」がいます。たしかに、休日の朝など、目一杯朝寝坊して、目覚めてうんと身を伸ばし、今日は一日中、しなければならないような予定がとくにない、そんな時に感じるあの解放感。日ごろ仕事に追われ続けている身には、誰も覚えのあることではないでしょうか。こんな時、「ああ毎日がこんなだったらどんなに

良いだろう」と、毎日ブラブラしている人が羨ましくなります。

私も今回の入院の際には、これで久し振りにゆっくり休養がとれると、心の片隅ではややホクホクするようなものがあったのは事実です。しかし手術が無事済み、なされるべき処置があらかた完了し、体力も回復してきたあとは、じっと寝ているのがだんだん苦痛になり、また何もしないことに心の落ち着きを失ってきました。健康な人ならなおさらそうでしょう。

人間の本性は、本来決して享楽に向くようにはできていない。むしろ常に働くようにできている、と言われます。享楽というのは、たとえそれが最良のものであっても、働きのあいまにただ少量だけ用いる薬味であり、気分転換であるべきで、これを過度に用いる者はみな結局ひどい目に会う、と古人は警告しています。

事実人間は、空腹を満たし、着るものを着、住むべき住まいを与えられて生存を確保しただけでは、どうしても満足できないのです。何かしら安んじえないのです。それは人間として生きる使命をまだ果たしていないことを、何となく感じているからではないでしょうか。

仕事ないし勤労は、たしかに人間の心に、ある種の充実感ないし達成感を与えます。これは人間が幸福であるための、一つの大きな要素であります。ただ、だからといって仕事はそのまま幸福であるか、というといかがでしょうか。仕事や勤労そのものから幸福感が湧いてくる、言い換えると「仕事イコール幸福」かというと、それはまずありえないのではないでしょうか。「仕事」というものは、本来何かしら義務感を伴ってなされているもので、人間にとって、それはやはりある種の「負担」と

いえるのではないでしょうか。

真の幸福

それでは、人にとって真の幸福とは何でしょうか。

私は、それは「希望」ではないかと思います。人は、自分の今ある状態が、何らかの意味でさらに向上して、今よりもよりよい状態に達することを願い、その願いが叶うという希望を持っている時、幸福なのではないか、と思うのです。そんなことを思ったのは、最近の入院中のことでした。

私の居た病室は、いわゆる大部屋で八人の患者さんが同居していました。その半数以上が癌をはじめとする重病患者さんたちで、入院経験も二度目、三度目という方たちでした。しかしその人たちがみんな病魔に打ちひしがれているかといえば、そうではなく意外と明るいのです。自分の病気の現状を正確に把握し、それを正直にお互いに話し合っているのですが、それがカラッと明るいのです。再び社会復帰できることを信じて疑っていない様子ですし、そうなればああしたいこうしたいと、お互い夢を語り合っています。決して強がりや、やせ我慢ではなしに、真実そう思い希望をもっているようでした。私などの駆け出しの患者、しかも回復はほぼ見えていて、ごく短期間で退院してしまう身には、そんな人たちの中で、なんとなく肩身の狭さがあったのですが、彼等はそんなことお構いなしで、こちらの術後の経過を心配してくれ、何かと気を配ってくれました。

その人たちみんながみんな幸福だとは言えませんが、それでは全員が不幸かというと決してそうは

言いきれないものを感じました。人は希望を抱いている時は幸福なのだなと思いました。

しかし、人間の抱く希望は、すべて必ず成就するとは限りません。希望は、えてして失望に変わります。その時人は、一八〇度対極の不幸のどん底に落ち沈むことになります。今まで幸福感に満たされていただけに、その落差は大きいのです。

病院で会ったあの人たち、あの明るかった人たちが仮に、自分はすでに不治の病に冒されていて、もう社会復帰するのは不可能な状況下におかれており、そしてその事実を知った場合、一体どのような気分に落ち込むのか、想像するだに辛いことです。そのようなことのないように、彼等のために祈ったことでした。

このように人間の抱く希望は、しばしば儚くなってしまいがちですが、しかしたった一つ、失望に変わらない希望があります。それは神様から与えられる希望です。神様は、人が神様を呼び求め、心を尽くして捜し求めるなら、希望を与えるとお約束して下さっています。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ書　二九・一一）

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んで

も生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

（ヨハネの福音書　一一・二五～二六）

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりでなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ人への手紙　五・一～五）

イエス・キリストをわが救い主と信ずる信仰によって、神の一方的なご愛と恵みで、私たちは義とせられ、そして永遠のいのちの希望を与えられるのです。しかも、この希望は失望に終わることはないと、神様がお約束してくださっているのです。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその

義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイの福音書　六・三一～三三）

言い換えれば、人間の幸福は、富や名誉や権力などで決して獲得できるものではない。だからそんなものを求めて心を砕くことをやめなさい。必要なものは必要な時にちゃんと備えられます。本当の幸福というのは、人間が自分の力のみによっては獲得しうるものではなく、神様の助けと恵みによって、はじめて手にしうるものであることが分かります。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。（ペテロの手紙　第一　一・三）

そのために人間ができることは、そして人間にとって大切なのは、ただ意志だけである。幸福を得るために人間が差し出しうる、いや差し出さなければならない唯一のものは、神を信じ神のご意志に従っていこうとする自らの意志である。このことを改めて覚えるのであります。

永遠のいのち

人が、永遠に継続するいのちへの道を、自分に約束されたことを知る時、その人の人生観は大きく変わるのではないでしょうか。この地上の生活と死は、あらゆる生命の終わりではなく、さらにそれに続く永遠の世界があることを知る時、この地上の生活の意味、この世に生きることの意味が、改めて大きく迫ってきます。「これは、いい加減には生きられないぞ」と。

この世では、人は完成して死にいたることはない。すなわち人間は「不完成」を持ち越して死を迎えるのが普通です。それはこの世で持ち越した不完成を、次の世で完成させるためなのではないでしょうか。

人間には、さまざまの素質や能力が与えられているのに、それらを充分に伸ばすには、人間の一生はあまりにも短かすぎる。だから、それらの素質や能力が、死後さらに発揮されるのでなければ、それらは目的のないものになりはしないか。

この地上の生活は単なる通過点にすぎず、その先に、さらなるいのちの継続がある——この望みを抱くとき、人のこの世に生きる態度は、自ずから真剣味を帯びてくるのではないでしょうか。

アウグスチヌスは、地の国すなわちこの世は、神の国すなわちあの世のための道場である、と位置づけることによって初めて、この世の意義を肯定することができたといいます。地上現世の人間生活は、それ自体として意義を持つものではない。地を超え現世を超える生命が存在し、それへの備えとして、この世の人間生活は、初めて意義づけられるのである、と考えました。

内村鑑三も次のように言っています。

《この生涯はわれわれが未来に往く階段である。ちょうど大学校にはいる前の予備校である。もしわれわれの生涯がわずかこの五十年で消えてしまうものならば実につまらないものである。私は未来永遠に私を準備するためにこの世の中に来て、私の流すところの涙も、私の心を喜ばしむるところの喜びも、喜怒哀楽のこの変化というものは、私の霊魂をだんだんと作り上げて、ついに私は死なない人間となってこの世を去ってから、もっと尊い生涯をいつまでも送らんとするは、私の持っている確信であります》と。

天国への階段

この世が神の国、すなわち天国への階段であるとすると、その階段を登る一歩一歩は、そう悟らなかった今までとは違った意味を持ってきます。それは、自己の意志を完全に神に委ねること、神様のご意志に従って生きるということに他ならないといえます。神と利己心とはともに住むことはできません。人間の利己心を捨てて、自分の全てを神に委ねることであります。

ただし、ここで誤解があってはいけないことは、神に自分の全てを委ねるということは、自分はその後何もしなくてよいということでは決してない、ということです。これは、自分の意志を神のご意志に委ねることであって、神様のご意志に沿って、言い換えれば神様が自分に与えて下さった使命に対し、最大限の努力をしなければならないのは当然のことであります。

このように考えてくると、この世は憂き世、すなわち辛い悲しいことのみ多いので、できればできるだけ早々に見捨てて、一日も早くあの世に向かいたい。そこにはとこしえの休息と安楽がある、という考えは的外れといえるのではないでしょうか。むしろこの世は、あの世でさらに前進する生となるために、備えなければならない、われわれにとって大切な一時期であります。この世での生き方そのものが、あの世に続く永遠の生となるのか、単なる死で終わるのかの決め手になると考えるべきではないでしょうか。

わたしに向かって、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。（マタイの福音書　七・二一）

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。（ミカ書　六・八）

人生の最高の宝は、神のそば近くにあること、神とともに歩むこと。これが永遠のいのちに繋がる道であり、そしてこれが人間にとっての最大の幸福、と言えるのではないでしょうか。

死後の生命存続を信じるようになると、全存在の一部にすぎないこの現世の生活、この短い期間中に経験する楽しみや苦しみが、ほんのちょっぴり多かろうと少なかろうと、そんなことはどうでもよ

くなってきます。と同時に、この現世の生活が死後にも永遠の生に繋がっていることを考えると、たとえどんなに短い期間であろうとこの世の人生を、あだやおろそかには過ごすことはできない。天国に至る、この現世の階段を登る一歩一歩を大切にし、神のご意志に沿って、神様から与えられた使命に向かって、絶えず前進をはからなければならない、と言えるのではないでしょうか。

ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。

（コリント人への手紙　第一　一五・五八）

むすび

冒頭に、この世を生きる二つの生き方を挙げました。

すなわち一つは、わが社の社是にもある「プログレス」を念頭に、この世に積極的に働きかけていく生き方。もう一つは、この世はなるようにしかならない、だからそれを傍観しているしかないという生き方。これら二つの生き方のいずれかを選択するとすれば、やはり前者に旗を揚げざるをえません。

ただし、繰り返しになりますが、積極的に働きかけ、常に前進するのも、これは自分の思いでする

のではなく、飽くまでも神のご意志に沿って、神様の与えられた使命に向かって、神様に助けられながら前進するのである、ということです。

私などは、ともすると自分の思いで勝手に一人歩きをして、その結果壁にぶち当たって沈み込んでしまう、というのが常です。しかしこれからは「神様に従って歩む」という、この一事を忘れずに、救われた喜びと感謝を胸に、たとえゆっくりとであっても、この「天国への階段」を一段一段と登っていくことができれば、本当に幸せだと思っております

それでは最後に、リンデ嬢の次の言葉をもって終わりにしたいと思います。

《まもなく私たちはキリスト者として、すべての悩み苦しみがなくなり、すべての涙がぬぐいとられることを経験するでしょう。私たちが生きているこの世界は涙の谷です。しかし、この世は過ぎゆきます。将来には新しい天と地が与えられます。(中略)私たちの人生は、死によって終わりになるのではありません。私たちは栄光に満ちた世界に向かって急いでいる者です。》(「実を結ぶ命」より LINDTRAUD BECK)

(一九九九年四月)

聖書に学ぶ子育て

見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。若い時の子らはまさに勇士の手にある矢のようだ。幸いなことよ。矢筒をその矢で満たしている人は。彼らは、門で敵と語る時にも、恥を見ることがない。

（詩篇　127・3～5）

ちかごろ目に余ること

今、日本は世界で最も無作法な若者を抱えている、とされています。また、倫理観や社会意識の極端に希薄な少年少女を抱えている国である、と言われています。

たとえば、毎日の通勤通学風景を思い起こして下さい。満員電車で脚を広げて二人分の座席を占領し、ヘッドホーンから騒音をまきちらして平気な青年、円陣を組んで大声でバカ笑いする女学生、あるいは所構わず床にしゃがみこんで、飲み食いをする少年少女たち……日頃われわれがよく目にし、かつ目に余る光景です。

しかし少しよく観察すると、彼ら彼女らから、他人を困らせてやろうとか迷惑をかけてやろうという、意識的な悪意は感じ取れないことが普通です。問題は、他人に迷惑をかけているという意識が、彼らに欠けていることです。さらに言うならば、彼らは、自分あるいは自分たちだけの世界に溺れこんでしまっていて、他人がそこに居ることすら忘れてしまっているようです。すなわち、彼らの目には自分しか見えず、他人の存在が見えていないようであります。

当然の結果として、そこには他人のことを慮（おもんぱか）る気持ち、言いかえれば他人への思いやりというものが、発生する余地はありません。したがって彼らは、自分の世界に他人を受け容れることが苦手なようです。他人が自分の世界に入りこんできて、その他人との接触を余儀なくされると、それがスム

ーズにはこなせず、そこから逃げ出すか、あるいは攻撃的に暴力をふるうしか対処の方法が分からない、というケースが多いのではないでしょうか。

最近、学校に行かないいわゆる「不登校小・中学生」に関する報道がありました。それによると、不登校小・中学生の数は、全国で十二万八千人あり、これは前年と比較すると二〇%以上の増加であり、とくに中学生では、なんと四三人に一人が学校に行っていないそうです。大体一クラスに一人の割合です。

また一方では、何かあるとすぐに「ムカツキ」そして「キレ」てしまって、暴力をふるう少年少女たちの報道もなんと多いことでしょうか。

親の責任

これらはきわめて憂慮すべき事態ですが、このようなことは一体どのようにして起こってきたのでしょうか。

もちろんその原因はいろいろ多岐にわたり、またそのいくつかが複合してよってきたるものでありましょう。そのへんの詳しい分析は専門家の手にゆだねるとしても、一素人として、またひとりの親として、そして聖書のみことばを信ずる者として、あえて誤解を恐れず断言させて頂くならば、この原因は彼ら彼女らの幼時の教育にあり、その責任は親にある、ということであります。

この世には、自分と異なる他人の存在があり、この世はひとりで生きて行くことはできない。した

がってこの世で生きて行くためには、自分と異なる存在である他人との間に、正しい関係、すなわち正しい人間関係を持つ必要がある。そして他人と正しい人間関係を持つためには、守らなければならない最低限のルールがある。このことを人はその幼時に学ばなければならないし、それを教える責任は親にある、ということです。

ところで、ここで幼時というのは、普通二歳ぐらいから四、五歳ぐらいまでの期間で、この時期、子供は良きにつけ悪しきにつけ、保護者の影響を非常に受けやすいものです。この時期にもった習慣や考え方は、かなり永久的なものとなります。この時期のチャンスを逃すと、敏感な感受性はなくなって、もう戻ることはありません。この時期における子供の教育の良し悪しが、十年後の彼または彼女を決定づける、と言っても過言ではないでしょう。

現在の日本に、人間関係をうまく保てない若者が多いということは、彼らが幼いとき、一番必要なときに、そのような教育も訓練をもきちんと受けていないということであります。それは彼らの親、すなわちそれは私たちなのですが、親たちがなすべき重大な任務を怠ったことにほかなりません。

そこで今日は、ひとりの親としての反省もこめて、五つの側面から、正しい子育てについて聖書から少し学んでみたいと思います。

第一の原則「正しい人間関係は、正しい親子関係から始まる」

この世に生を享けて子供が最初に接する他人は、母親であり父親であります。すなわち自分と親との関係が、その後、他のすべての人に対する態度の基礎となるために、親子の関係がどのように始まり、どのように保たれるかが、最も重要となります。親子関係は、子供が持つ最初の、そして最も重要な社会的関係であり、それに何らかのひずみが生じると、その後の人間関係に悪影響があることは、しばしば見受けられるところです。

たとえば、キャンデーを欲しがっているのに、母親に拒まれた子供を想像してください。彼は拒まれたので、床に倒れて大声をあげて、頭をカーペットに激しく打ち付けます。お母さんはこの激しい誇示に仰天して、「○○ちゃん、ほら、ひとつだけですよ。さあ、泣きやみなさい」と言って、キャンデーをやります。日常よく見られる光景です。

しかしこのことでお母さんは、子供が感情的に反応すると、得をするようにしてしまいました。彼の泣き声はおいしい配当を受けました。彼は親の権威に挑戦して、それを崩すことに成功したのです。もしこのお母さんがその後も、彼の抗議に対して同じような取り組み方を続けるのなら、可愛い○○ちゃんはだんだん大きくなって、他の誰に対してでも自分の母親のように、彼の要求が許されることを期待する、手のつけられないわがままな悪ガキへと、間違いなく変身していくことでしょう。

そして思いがけずも、自分の要求が聞き入れられない場面に遭遇すると、激しい混乱と衝突が起こることは間違いありません。

子供は幼い時に、自分よりエラいもの、自分の力ではなんとも動かしようのないもの、言い換えれ

ば、権威といったものを知ることが必要です。自分が王様なのではなく、自分には従わなければならないものがある、ということを認識しなければなりません。それは第一には親です。

自分よりも大きな存在としての親、畏れ（これは恐がる意味ではなく、おそれ敬う意味でのおそれなのですが）の対象としての親。と同時に、この親は自分を限りなく愛してくれるもの、愛を自分に無限にそそいでくれる保護者である。こういう親というものの正しい認識を、幼い時に持つことができることほど大切なことはないのではないでしょうか。

親は言ってみれば壁である。「悪」と「善」の間に一線を隔する壁。「悪」の世界に向かって突き破ろうとしても、押しても叩いても頑としてビクともしない鉄壁であると同時に、外敵から自分を安全に守ってくれる愛の壁である。このことが実感できれば、子供心は大きな安心感に満たされるのではないでしょうか。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。（エペソ人への手紙　六・一～三）

第二の原則「守るべきルールは、子供に充分明確であること」

子供に守らせるルールは、当の子供が充分明確に理解できるものでなければなりません。そのためには第一に、それらのルールは、確立した一定のものであることが大切です。

この前は叱られなかったのに今日は叱られた、というように親のその時の気分次第で変更されたり、お母さんは叱るけどお父さんは叱らない、というようにそこに一貫性がないと、子供は混乱します。そしてやがてそのルール自体もあいまいになってしまう危険があります。

次に、それらのルールは何故守らなければならないのか、子供によく説明して、納得させることが肝腎です。何故自分は叱られているのか分からない子供ほど、哀れなものはありません。そしてその叱りは、何の効用もないものとなります。

第三に、ルールはあまり数多くないこと、そして内容ができるだけ簡単明瞭である方が、その意図を徹底するのに良いように思われます。私どもの家庭では、ルールは三つだけでした。それは「ひとに迷惑をかけない。うそをつかない。危険なことをしない。」の三つでした。

子どもらよ。父の訓戒に聞き従い、悟りを得るように心がけよ。私は良い教訓をあなたがたに授けるからだ。私のおしえを捨ててはならない。私が、私の父には、子であり、私の母にとっては、おとなしいひとり子であったとき、父は私を教えて言った。「私のことばを心に留め、私の命令を守って、生きよ。知恵を得よ。悟りを得よ。忘れてはならない。私の口の授けたことばからそれてはならない。」

（箴言　四・一～五）

第三の原則「懲らしめと愛は相反するものではなく、子育て車の両輪である」

それでは次に、これらのルールを子供が破った時には、親はどう対処すべきでしょうか。それは当然子供を懲らしめるべきです。

ところで、「子供はどう育てるべきか」というテーマについては、過去何世紀にもわたって、その方法と哲学について激しい論争を巻き起こし、意見が分かれてきました。一方の端には、厳しい高圧的な躾を信奉するグループがあり、もう一方の極端派は無計画な自由放任を主張し、子育て理論の振り子はこの二つの間を揺れ動いてきました。

しかし戦後、そして最近にいたるまで比較的有力で支配的であったのは、「自由放任の民主主義」と呼ばれるおめでたい学説でした。その主張するところは、「子供を育てるのには愛だけで充分である」というのです。立派な親とは、次の二つの義務を果たす親である。すなわち、

（1）子供は純粋な愛情の雰囲気のうちに育てる。

（2）親は子供の物質的、肉体的必要を満足させる。

ということです。そしてあらゆる形の罰は、子供にとって、有害であり不当であると教えました。

その結果、親たちはこの世代の子供たちを、放任と甘やかし過ぎと、息もつけないような愛情、という祭壇の上に犠牲として捧げてしまいました。そしてそれは正しくない歪んだ親子関係、無秩序な

家庭環境をもたらし、同時に、不安定な若者を世に送り出す結果となってしまいました。

愛は確かに、人間生活にとって根本的なものですが、親は子供に愛を与えるだけでは充分ではなく、親の責任はそれよりもはるかに範囲の広いものです。親は子供に対し限りない愛を与えると同時に、適切な訓練と指導を与える義務があります。指導の欠けた愛からは、規律正しく自制心のある、そして人を尊敬することのできる子供は育ってこないでしょう。

それでは、守るべきルールを破った場合の子供の懲らしめについて話を戻しましょう。苛酷で、厳しく、気まぐれで、冷たい、あるいは移り気な罰を使うことによって、親は子供を全くだめにしてしまうことがあります。したがって罰の与え方は慎重でなければなりません。しかしルールを破ったことを子供自身が後悔し、もう二度と同じルール違反をやりたくない、と心から思わせるに充分なだけの、しっかりした罰を与えることを、親は恐れてはなりません。私どもでは子供のお尻を叩きました。子供が泣き出すほど強く叩きましたが、それ以上のことはしませんでした。それで充分だったからです。

ただ、心して行ったことは、この罰を与える前に何故こうしなければならないのか、もう一度その理由をよく説明するように、それもできるだけ物静かに言うように努めました。

躾ないし懲らしめと愛とは、決して相反するものではありません。相反するどころか、この二つは正しい子育てには欠かすことのできない、いわば子育ての車の両輪であります。罰とは、子供のため

に（子供にとっての不利益のためではなく、子供の利益のために）与えるものだということを、親は確信しなければなりません。不従順な子供に対して、「お前を心から愛しているから、そんなことをするのを放っておくことはできない」ということを、よく分からせることが大切だと思います。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。

（ヘブル人への手紙　十二・五～八）

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（同　十二・十一）

第四の原則「子どもとの対決に親は勝ち抜かなければならない」

子供を懲らしめるということは、口で言うほど容易なものではありません。

何故なら第一に、子供が可愛い過ぎるからです。小さくて丸ぽちゃの可愛い子供の顔を目の前にすると、親は彼をあえて敵とする勇気がなかなか湧いてきません。なんとか事を荒立てないですませられないかと、つい思ってしまいます。

第二に、子供が親に反抗する時のエネルギーにはすさまじいものがあります。これに対抗するには、親の方にも相当の勇気と忍耐を要求されます。言ってみれば、子供との根くらべです。私どもにもこんな思い出があります。これはルール違反の懲らしめではなくて、新しいルールを守らせるための躾のケースであったのですが、次男が二歳になるかならないかの頃でした。

どちらかというと潔癖が強くやや神経質な子供でしたが、この子は夜、寝付くのが苦手でした。毎晩彼を寝かしつけるのが一仕事でした。一時間あまりも抱っこして、ようやく目を閉じスヤスヤしだしたので、ベッドにそっと横たえてそろそろと部屋を出ようとすると、また火がついたように泣き出す。それでまた初めからやり直し、といったことの繰り返しでした。

これではいけないということで夫婦で相談の結果、「就寝時刻は夜八時、ひとりで寝る」ことを決め、それを本人にも言って聞かせ、ある夜を境に実行にうつしました。時間が来たので子供用のクリップに入れ、部屋のドアーを閉めました。案の定、子供は泣き出しました。その内に泣き声は絶叫に変わり、それだけでは足りず、クリップの中に立ち上がりクリップの枠を掴んで揺すり、またそれを乗り越えようとしました。ドアーの外で息をこらして様子を見ていた私たち夫婦は、枠を乗り越えるのは未だ不可能であることは事前に確認済みでも、それでもヒヤヒヤものでした。

なによりも私たちにこたえたのは、子供の悲痛な泣き声でした。なんでこんなに苦しいことをやら

なければならないのか、いっそのこと部屋に飛び込んで行って泣き叫ぶ子供を抱きしめてやりたい、そんな思いにもなりました。家内などはもう半泣きで、ぶるぶる震えていました。

戦闘は約二時間ほど続きましたが、漸く息子は泣き寝入りに寝てしまいました。次の夜も事の展開は同じようでした。しかし昨夜と変わったことがありました。それは戦闘時間が昨日の半分、約一時間位で終わったことです。そしてその次の夜は、驚いたことに、クリップに入れられても、息子はもう一声も泣き声を発しませんでした。戦闘は終わりました。その後この息子は、時間が来ると自らベッドへ行くようになり、もう就寝のことで親を煩わすことはなくなりました。

ところで、子供はこの戦闘に敗れました。そして戦闘に敗れて、子供は傷ついたのでしょうか。敗戦の屈辱と失望に陥り、将来、負け犬のような卑屈な大人になる心配はないのでしょうか。パウロ流に言わせていただくなら、「絶対にそんなことはありません」。

子供は、この種の親との対決に敗れたからといって、傷つくことは決してありません。むしろある種の安心感に浸され、尊敬の目をもって親を見上げるようになるのです。この親子対決の裏に、溢れるばかりの親の愛情を子供が汲み取る時はなおさらです。

子供は親に反抗しながら、一方では醒めた目で、どこまでなら親は許し、どこを越えると親は許さないのか、冷静に見極めようとしているのです。同時に、その一線の範囲をできるだけ広げよう広げようとしているのです。しかし親が、一貫してこの一線を頑として定位置に保つなら、やがて子供は自らの「領地」を拡大することを諦めるとともに、この鉄壁のような親に対し、尊敬の念を抱くよう

になるのです。自分を危険から守り、安全と平安のうちに繋きとめてくれることのできる、賢明で理解のある親に対して抱く尊敬です。

もし反対に、子供の圧力に屈して、この一線をズルズル後退させるような親が、子供から受けるものは、軽蔑ととめどのない反抗だけです。

もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。（コリント人への手紙　第二　一・六）

第五の原則「罰の後はすぐ仲直り」

親が子供から反抗的な挑戦を受けた時は、決定的に子供に勝つこと以上に、親子を密接に結びつけるものはありません。親が自分の権威を示すことは、ほかのどんな方法よりも、子供に尊敬の心を起こさせます。

しかし同じように重要なのはその後です。言い換えれば終戦処理が大切です。というのは、罰を受け子供が興奮からさめると、他の時には語ることのできないようなことを、子供に語る機会となるからです。親子のコミュニケーションの絶好の機会です。

私どもには息子が三人おりますが、わが家では罰を与えた後はできるだけ早く、その息子と握手をしました。これを家では「仲直りの握手」と呼んでいました。握手をして、どうして彼が罰を受けたのか、どうすれば罰を受けないですむか、など改めて説明しました。泣いた後で子供は素直になっていますから、この時の話はよく耳にはいるようです。感情の爆発の後では、子供はよく親の胸に抱いてもらいたがります。力一杯抱きしめてやりましょう。この瞬間こそ、親子は心から語り合えるのです。親が拒否したのは、子供のやったことであって、子供自身を拒んだのではないことを、はっきり示してやりましょう。

反対に、ふくれ面のままの子供と分かれるのは、最悪です。是非「仲直り」した上で分かれるようにすることが大切です。

あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。

（マタイの福音書　一八・一〇）

夫婦の共同作業

以上、幼時の子育てについて、聖書から五つの側面から学んできました。

しかし最後に、最も強調しておかなければならないことが一つあります。それは、子育ては夫と妻の共同作業である、ということです。父親と母親が一致協力して、同じ熱心さで、同じ愛情をもって、同じ基準で子育てに当たることが大切です。

とかく、父親は仕事に追われて、また外での付き合いに草臥れて帰宅するのが通常の我が国においては、子育ては母親の専管事項として、妻にまかせっきりの傾向が強くあります。これは私自身の反省でもあるのですが、「僕は仕事、君は子育て」と、夫婦の分担をはっきりし過ぎて、お互い他の領域を侵さない、みたいなところが確かにあります。

それでも戦前の日本、すなわち明治、大正、昭和の初めで、それはわれわれの親の時代にあたる訳ですが、その頃の父親のことを思い起こしますと、まだ「地震、雷、火事、親父」の雰囲気はありました。父親は、夜は卓袱台を囲んで、家族とともに食事をし、子どもたちに何かと説教を垂れ、こわい存在でした。当時の父親は、子供は自分が鍛えなくては、と思っている風でした。ところがご承知の通り戦後になると、多くの父親は、精力と時間を仕事に向けて使い果たし、子育ては母親に任せました。子供にとって父親は他所の人の感なきにしもあらず、言ってみれば「不在親父」でした。

しかしこれは間違っていたというしかありません。母親のやさしさの愛とともに、父親の厳しさの愛、これら二つの愛が共に働いてこそ、正しい子育てがなることを、われわれは今一度思い起こすべきではないでしょうか。

自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。

（テモテへの手紙　第一　三・四）

執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません

（同　三・十二）

外にあって責任ある職に就く人は、家庭にあっても、このような父親でなければならない、と聖書は教えています。子育てにおいて父親は、決して「沈黙の部外者」であってはならないということです。

夫婦間の尊重

もう一つ、子育てにおける夫婦のありかたについて言及するならば、それは、子どもの前で夫婦はお互いを批判し合ってはならない、ということです。特に、子どもの躾や教育の仕方についての意見の相違を、子どもの前で論じ合わないことが大切です。

夫が子供を叱ったり指導している最中に、妻は、たとえ夫の言い分が自分の方針なり意見と食い違っていても、その場で異論をとなえないこと。また、その逆の場合、妻が子供に意見している時は、たとえ自分の意に添わなくとも、夫は妻の指導を尊重する、いや少なくとも尊重しているふりを守るべきです。お互いの意見の食い違いは後で、子どもの居ないところで、夫婦で話し合い意見の調整を



百合とトルコ桔梗

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、
世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして
滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネの福音書　3・16）

はかるべきです。

ましてや、「そんな悪い子でいると、大人になるとお父さんのようになってしまいますよ」と言うがごときはもっての外です。これだけは言ってはならない禁句です。使徒パウロも言っているように、《夫は妻のかしらであって、妻たちは夫に従うべきです。そして夫は自分の妻を愛しなさい。》（エペソ人への手紙　五・二三―二五）ということです。

この教訓はわれわれ凡人には、守ることが甚だ難しいことであることは事実です。しかし、改めて創世記第二章二四節をひも解くまでもなく、「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となる」のであります。一体となり、そして互いの人格を尊重し合う、両親の円満な夫婦関係こそが、健全な子育てのなによりの土台になることを、われわれは改めて銘記すべきではないでしょうか。

むすび

子供自身が幼い時から、自分より大きな、絶対の存在であり、かつ同時に愛の存在である、親に対して畏敬の念を抱くことは、特にわれわれキリスト者にとって重要であります。何故ならば、親に対する畏敬の気持ちは、やがて神に対する畏敬の念へと育っていくことが期待できるからです。

尊敬する父や母が、心からひれ伏す畏れの対象、敬愛の対象たる主イエスさまは、幼い子供心にとっても、同じように畏れと愛の的となって成長していくことは、ごく自然なことと思われるからであります。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づくまえに。太陽と光、月と星が暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。

（伝道者の書　十二・一～二）

わが子よ。これ以外のことにも注意せよ。多くの本を作ることには、限りがない。多くのものに熱中すると、からだが疲れる。結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令をまもれ。これが人間にとってすべてである。

（同　十二・十二～十三）

今育ちつつある幼いものたちが、必要な時に必要な訓練と指導を受けて、やがて、父母を敬い神を畏れる若者として巣立っていってくれることを、皆さんとともに祈っていきたいと思います。

（一九九九年八月）

本稿は、次に掲げる著書に依存しています。

Peter/Lois Cliff「ひとあじ違う子どものしつけ」（いのちのことば社）

James Dobson（舟喜晃子訳）「思い切ってしつけましょう」（いのちのことば社）

運命と神と

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。　（詩篇　23・1～4）

はじめに

ちょうど昨年の今ごろ、この場所に立たせて頂いたのは、息子との間の生体間腎臓移植手術直後のことで、そのことについてお証しさせていただいたことを覚えています。その節には、兄弟姉妹のみなさまにお祈り頂き、また励ましのみことばをお送り頂き、ありがとうございました。おかげさまで、その後順調に経過しております。どんなに回復したか、ということで一つだけ、一寸お証しさせて頂きたいと存じます。

これもいささか旧聞に属しますが、昨年の晩秋、あれはたしか十一月二十三日の祝日だったと思いますが、私は山に登りました。山といってもたいした登山ではなく、近郊の高尾山でしたが。私は昔から山も海も好きで、よく行っておりましたが、この時は手術後初めての山行でした。もっと早く行きたい気持ちはあったのですが、やはり、体力に今ひとつ自信がなかったことと、行こうとすると何か都合ができたりして、結局これが手術後初めての山行となりました。

高尾山口から、いつもの稲荷山コースをとって、一人でゆっくりと足をはこびました。思ったより快調に登って行き、高尾山を越して、その向こうの城山の山頂に達しました。当日は快晴で、富士山もくっきり見えていました。せっかく来たのだから一つ記念に写真でも撮っておこうと、カメラを取り出し、誰かにシャッターを押してもらおうと、目の前に来た青年に声を掛けようとしました。とこ

ろが何とその青年は、私の腎臓の片割れの息子だったのです。もうビックリしましてね。何やってんだおまえ！　向こうも、何やってんの！　と。

その日山に行くことはお互いに知らず、ご承知のように、高尾山は登山道がいくつもあり、息子と私は、まったく別のルートで登ってまいりました。また当日は絶好の日和で、登山客でごった返していましたので、たとい事前に打ち合わせていても、二人が出会うことは難しかったでしょう。それが、リュックからカメラを出して、シャッターを押してもらおうとした相手が、自分の息子だったとは……。

まあこんなことで、お互いの回復を確認し合い、喜びを分かち合ったことでした。

しかし以前の私なら、こんなことは単に、「偶然の一致」であるとか、あるいは「運命の悪戯」、というような一言で片付けていたと思います。起こった事実には驚きながらも、世の中にはこんな珍しい出来事・ハプニングもあるのだな、と思うだけでその後はもう、そのことを思い出すこともなかったでしょう。

もう一つの経験

次に、私の持ったもう一つの経験、というか思い出を話させてください。

それは私が、この「キリスト集会」に集いだした初めの頃です。当集会の兄弟姉妹たちが、ご自身や自分の身内、あるいは親しい人に起きた災難（としか当時の私には思えなかったのですが）を、む

しろ喜んでいらっしゃる。あるいは喜んでいなくとも、その災難の中から、何か「喜び」を見出そうとされていることに気づき、奇異の念を抱いたものです。

ある兄弟は、「こんな災難（いや災難という単語は皆さんの中では、試練という単語に置き換わるのですが）を頂いたのは、神様に愛されている証拠だ」と、訳の分からないことをおっしゃる。またある姉妹は、「これがもっと大きな、自分には耐えられない災難（試練）でなくてよかった。感謝です。」とおっしゃる。

なんという楽天家揃いの集団だろう、と私は驚きました。何でもかでも、わが身に起こってくる出来事をすべて、「ありがたい、ありがたい」と受け止めることができれば、世の中は平和で、喧嘩などは起こりえない。私は、ひょっとして「ありがたや教集団」に紛れ込んだのではないか、と私自身を疑ったほどでした。

しかし、また別の考えも生まれました。

いや待てよ。これは世の中を生きていくための、一種の処世術なのではあるまいか。人間この世に生まれた以上、幸せなことばかりで平穏無事に、一生を終えるものではあるまい。きっと大きな不幸や苦痛、あるいは悲しみを経験することだろう。それも、いつ突然にそれらに襲われるか知れない。その意味では、一寸先は闇である。そのように、いつなんどき襲って来るかもしれない不幸や悲しみを迎える、その時のための心の準備をしておけ、ということなのではないか。

常々最悪の事態を想定して、それをいつでも迎える心構えで、心の備えを怠らなければ、たといど

んな大きな不幸が訪れて来ても、そのショックは和らげられるだろう。また、それにじっと我慢して耐えていれば、時間の経過とともに、その不幸感は薄れていくだろう。また仮に、襲ってきた不幸が、予測していた最悪の事態よりも、少しでも軽微なものであれば、それはそれで、それを喜びに変えられないものでもない。

要は心の持ちよう、気持ちの持ちようだ。常々そういう思考方法をもって、非常時に備えておくという人生哲学を共有して信奉する人々。そういう人々の集まりなのではなかろうか。そんなことを考えたことを覚えています。

それまでの自分は、「人間努力をすれば大抵のことは叶う」という考え方の持ち主でした。と同時にそれとは裏腹に、この世界には、人間の力ではどうしようもないもの、人間の力をもっては動かすことのできないものがある、ということにも気づいていました。それは人間のレベルを超越する、絶対的な存在で、それにより人間の一生は支配されているもの。

私はそれを「運命」と呼んでいました。

二つの導き手

それから暫く時が経つにしたがい、また聖書を読んだり、集会の人たちの言動を見聞きすることが多くなるにつれて、私は、人間の一生を支配するものが「運命」の他に、もう一つあることに気づか

されるようになりました。それは「愛の神」です。

人間が生きていく、その道筋を導くものは、この世には二種類ある。すなわちこの世には、人間の生き方をリードする二つの導き手がある。その一つは、冷たい「運命」という導き手であり、今ひとつは、温かい「愛の神」という導き手です。

通常、人間はこの世に生れ落ちると、まず「運命」の手に委ねられ、その支配下に置かれ、その人生を「運命」によって導かれます。しかしながら、キリストを信ずることによって、人は「運命」の手から解放され、その後の人生は、運命に替わって「愛の神」が導き手となって、その人を導いて行くのです。人は、冷たい運命の手から、温かい神の愛の手に移されたのです。

人の道は主の目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を配っておられる。（箴言　五・二一）

主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。（詩篇　二三・三）

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。（詩篇　三二・八）

それでは、これら二つの導き手はどのように異なるのでしょうか。いくつかの点から両者の比較を試みて見たいと思います。

1　目的地が異なる

まず大きな違いは、二つの導き手の導いて行く目的地が異なることです。運命が人間を連れて行く先は「死」です。運命の目的地は、死の国であり、滅びの国です。ところが、愛の神がわれわれをお連れくださるのは、「死」を超えて、さらにその向こうにある、乳と蜜の流れる、美しい「天国」というところです。そこで人は永遠のいのちを持って楽しく生きます。

言ってみれば、「運命号」という列車は長距離列車ではありますが、それは「死」という駅止まりで、その先へは行けません。それに引き換え、「神様号」という列車は、「死」という駅に着いてもそこに止まることなく、さらに「天国駅」までまっしぐらに天空へ駆け上る、銀河鉄道なのです。

あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。（ローマ人への手紙　六・一六）

その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主イエス・キリストにある永遠のいのちです。（同　六・二一～二三）

2　ONEWAYかBOTHWAYSか

次は、onewayかbothwaysか、すなわち一方通行か両面交通かの違いです。

人の運命は、この世に生れ落ちる瞬間に、すべて決まってしまうと言われます。他には、母親の胎内にいる時にすでに決まっている、という説もあります。いずれにせよこれが、その人の「持って生まれた星」といって、これは、生涯もう変わるものではありません。

言い換えれば、「人生」というタイトルのついた、内容が一つ一つ異なる、コンピュータプログラムを大量生産する工場があって、そこから出荷するプログラムを、生まれて来る一人一人の赤ちゃんに一つずつ割り当てていく。人は与えられたプログラムを拒否したり、変更を要求する権利はなく、ただ黙ってそれを甘受するしかありません。そして人はその一生を、そのプログラムに組み込まれた通りに、歩んでいくしかほか道はありません。それはきわめて整然としたシステムの世界ですが、そこには個々人の事情を斟酌する余地は全くない世界でもあります。

それに引き換え、神様との関係は大いに様相が異なります。まず神様は、個人それぞれの言い分を聞いてくださるお方である、ということです。ここでは上からの一方通行ではなく両面交通、すなわち、神様と人間の対話が可能だということです。神様との対話は、聖書のみことばと人の「祈り」を通じて行われます。したがって、もし人の希望や願いが神様の御心にかなうものであるならば、神様はその願いを聞き入れ、あらかじめ定められた道筋を変えても下さいます。

神様の人生プログラムは、いったん決めたら金輪際変更しないというような、頑固なものではなく、いつでも書き込み自由・変更自在の、柔軟なソフトプログラムです。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ人への手紙　四・六～七）

3　既製服かテイラーメードか

このことを一寸別の角度から見ますと、これら二つの導き手には、既製服と誂えのテイラーメードの違いがあります。運命が人に着せてくれる運命服は、縫製工場から出荷される順番にあてがわれるので、少々寸法が合わなかったり、色やデザインがその人に似合わなかったりしても、そんなことには頓着しません。ただ機械的に、次から次へと割り当てていくだけです。人はその与えられた運命服が、たとい少々ダブダブであったり窮屈であっても、色やデザインが気に入らなくても、一生の間、我慢してでもそれを身に着けていくしか仕方ないのです。

人は時に、「こんなのはいやだ」と言って、運命を呪い、運命と戦おうとします。しかし所詮それは無駄な抵抗に終わります。人は、運命が嘲笑う前で涙を飲んで引き下がらざるをえません。そして、

「ああ　何事も運命なのだ」と諦めるしかありません。

古代ギリシャの哲学者たち（それはストア派と呼ばれる人たちですが）は、そのような運命を前にしてつぶやきました。すなわち、

「世の中のことは自分の思い通りとなると思うな。物事はそれがなるようになれと願うがよい。そうすれば心に平安が得られる」と。

このような考え方から導かれるのは、この世に対する「厭世観」にほかなりません。そこからは、希望も喜びも感謝も生まれ出ることはありません。

これに対して神様は、その人その人にぴったり合った、最もよく似合うテイラーメードの衣服を、一人一人に用意してくださいます。人は「運命服」を脱ぎ捨てて、神様が備えてくださった衣服に着替えればいいのです。それ以後は、快適な生活が約束されます。

さらに神様は、一度その服を与えたらそれでお終い、というのではなく、その人の成長やおかれた環境の変化に応じて、その衣服を、いつもその人に最適の状態に仕立て直してくださいます。神様はいつも一人一人の中に住み、生きて働いてくださるのです。

主イエス・キリストを着なさい。　（ローマ人への手紙　十三・十四）

バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たの

です。

（ガラテヤ人への手紙　三・二七）

また、「マタイの福音書」には次のように書いてあります。

《「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。》（二二・三二）

神様はただ人類全体の神、また民族全体の神であるだけではありません。同時に各個人の神であります。神様はアブラハムの神であり、イサクの神であり、ヤコブの神であるように、また太郎の神であり、次郎の神であります。

神は各個人一人一人の神であり、一人一人との間に、個人的な交渉をお持ちになります。神様は各個人を個々に保護し、個々に教え慰め、個々に話しかけられます。したがって、人もまた個々に、聖書と祈りを通じて、神様と口をきかなければなりません。

イエスの神は、生ける人格をもつ神様であります。その神様が、常に私たち一人ひとりの着る衣服に気を配ってくださっています。

4　愛のみ手とサタンの手

次に、これら二つの導き手のあるじ、主人は誰かということですが、一つは言うまでもなく、神様、すなわちイエス・キリストの神であります。それでは運命は誰が操っているのでしょうか。

それはサタンです。サタンを日本語に訳すと「悪魔」ということになりますが、実際はニュアンス

が一寸違うようです。「悪魔」という言葉のもつ響きから私たちは、角を生やし頬の痩せこけた悪魔、邪悪なたくらみを身にいっぱい含んで、ひと目見ればすぐそれと分かる悪意のかたまり、といったものを想像するのが普通です。

しかし「サタン」というのは、必ずしもそうではなくて、むしろ目立たないように人の傍に居て、この世を支配するもの、「この世の支配者」という意味合いが強いようです。サタンは、人間に対し大きな力をふるいますが、ただサタンの影響力は、人間の肉体の死をもって終わる「この世」にだけしか及ばず、死を超えてその向こうにある永遠の天国には及びません。

だからそれをも支配する神に対して、大いなる敵愾心をもっています。したがってサタンは、神に近づこうという人間に対してはその邪魔をし、なんとかそれを阻止しようとして迫害しますが、それ以外の場合は、人間に対して特に悪意を抱き、攻撃することは普通ありません。

しかしだからと言って、別に人間に対して好意をも抱きません。人間が自分の支配下に納まっている間は、人間に対して冷淡で無関心、無色透明、無機的な存在です。ですから私たちは、イエスさまに出会う前はそんな存在に気づかず、知らずしてサタンの支配する運命のもとに歩まされていたのです。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。

（エペソ人への手紙　二・一～二（ここでいう「不従順の子」は未信者、「霊」はサタンのことです））

ところが神様の愛のみ手に移されると状況は一変します。神様は人間をこよなく愛しておられます。したがってどんな時でも、人間を最善へと導こうとして下さいます。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ書　二九・一一）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ人への手紙　八・二八）

神様は、私たち一人ひとりの人生に対する計画を持っておられます。そして神様が、私たちの身に起こってくるすべてのこと（それが一見、良いことであろうと悪いことであろうと）を働かせて、私たちのために益としてくださることを、私たちは悟らなければなりません。

「運命号」から「神様号」への乗り換え

以上四つの点から、二つの導き手の比較をしてまいりました。これからも分かるように、人は一日も早く「運命号」という列車から「神様号」に乗り換えなければとんでもないことになります。

それでは、どうすればこの乗り換えができるのでしょうか。それはそう難しいことではありません。イエスさまを自分の主と信じ、それを告白することです。そうすれば神様は、運命の支配下にある「死の世界」から私たち救い出して、神の御子がご支配される永遠のいのちの世界へと移してくださるのです。そして神はそのことを切に望んでおられます。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

（テモテへの手紙　第一　二・四）

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

（ローマ人への手紙　一〇・九～一〇）

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネの福音書　五・二四）

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

（コロサイ人への手紙　一・十三）

このように聖書は各所で、神様のお約束を示しています。しかし、この時注意しなければならないことが一つあります。それはサタンの妨害に会うということです。サタンは、人が自分の支配下から逃れて、神の手に向かうことを極端に嫌がり、妨害と迫害で迫ってきます。

人はこれに負けないよう、硬く信仰に立って、サタンに立ち向かわなければなりません。そして、神様が私たちの助け主として、イエス・キリストの名において、私たち一人一人に豊かに注いでくださった聖霊に導かれて、私たちは、それ以後の人生を、新しく再出発することが必要となります。

悪魔の策略に対して立ち向うことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣であ

る、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

（エペソ人への手紙　六・一一～一八）

信仰に生きる喜び

冒頭に私は、当集会の兄弟姉妹方が、災難をも喜んでおられて奇異の念にとらわれたことを申しました。しかし今私には分かります。それは、神様がすべてのことを、たといそれが一見よいことであろうと悪いことであろうと、すべてのことを益としてくださり、最善へと導いてくださることを、兄弟姉妹方は知っておられるからであるということが。

私たちの上に起こるすべての事柄は、天の父の、愛のみ手により許されたものである。そのことを兄弟姉妹方が、固く信じておられるゆえにこそ、患難に対してすら感謝することができるのである、と。

それなのに、「ありがたや教団」などと疑ったりして悪いことをした、と反省しています。

高尾山での息子との出会いも、それは単なる「偶然の一致」などではなくて、ここ数年来の、息子の発病から腎臓移植手術そして回復に至るまでの一連の過程に、神様が一応のピリオッドを打ってく

ださった。心からの感謝をもって、そう信ずることができました。

信仰に生きる喜びを心にかみしめながら、そして御名を心からあがめながら、これからも兄弟姉妹方とともに、イエスさまの道に歩んでまいりたいと思っております。

信仰を知らずして逝った親しい人の救い

最後に、近年私の心の中にわだかまっていると申しますか、一寸気がかりなことについてお話したいと思います。

それは、信仰を知らないままこの世を去っていった、私たちの親しい人たちのことについてです。私たちは、イエスさまと出会って、天国の希望を持つことができました。しかしイエスさまを知らずして先に逝った親しい人たち——それは両親であったり、肉の兄弟なのですが——、その人たちの救いはどうなるのだろう。あの人たちは死んでからどうなったのだろう、いま一体どうしているのだろう、という不安が時として心に芽生えてくるのです。

そんな時、最近次のようなエピソードに出会いました。

それは今から九十年近く前、大正の初めのことです。当時、一高を卒業したばかりの矢内原忠雄は父親を失いました。正直で誠実で、彼の尊敬措くあたわざる父親でしたが、生涯キリストの信仰を知らずして逝った父の死を前に、若き矢内原は、父親の死後について堪え難い不安に襲われ、遂に意を決して、師内村鑑三の教えを乞いました。これに対して鑑三は、問題の点については何の答えをも与

えず、ただ「君自身の信仰を継続せよ。然らばかかる問題はいつ解るともなく解るものだ」と諭したのです。

それから三十五年の月日が流れ、当時、東京大学経済学部長に就任した矢内原忠雄が五十五歳の年、彼は機会があって、浜松市郊外のある療養所に、余命いくばくもない一人の婦人を、その病床に見舞いました。その婦人は、イエス・キリストの信仰を持たないまま先にこの世を去った、親しい人たちのことを考え、思い煩っていました。そして彼に胸の苦衷を訴えました。

「この世を去った祖母や兄弟やの救いはどうなるのかと思って、それがわからないのです」

矢内原のこれに対する応えは、次のようでした。

「その事は誰もはっきりわからない問題です。しかし私共にわかって居ることがあります。それは、神様は愛であること、あなたがお祖母さんや兄弟を愛して居られること、そして神様はあなたを憐れんで、あなたの為に最善を為して下さるということです。すべての事を神様の愛の御手に委ねて、平安に依り頼んで居ればよいのです」。

後に彼は述懐しています。

「(内村)先生は正しくあった。私には今、この問題は解るともなく解って居る。私が信仰に固く立つ以上、私が愛を以って結ばれて居る骨肉は、彼らがキリストの明白なる敵でない限り、必ずや、何らかの形に於いて私と共にエクレシヤに与るであろう事を私は信ずる」と。

このことについて、私自身はまだ確たる解答を持ち合わせていません。しかしながら、先人、それも畏敬する先人の一人が、かつて同じ悩みを抱いておられたこと、そして固い信仰のうちに歩まれた過程で、ご自分なりの答えと確信にたどり着かれたということは、私を勇気づけるものでした。

神様は、私たち信ずる者への愛と憐れみによって、私たちの祈りを聞きいれ、私たち自身ばかりでなく、信仰を持たずして先に逝った骨肉に対しても、愛の御手をさしのべてくださる、という希望を持つようになれたことは感謝でした。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネの福音書　三・一六）

（二〇〇〇年一月）

光の中を歩め

そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。（創世記 1・3）

すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。（ヨハネの福音書 1・9）

はじめに

私がむかし通っていた高等学校の校長室に、一枚の額が掛かっていて、それには「若者よ、光あるうちに光の中を歩め」とありました。

同じ高校に通っていた家内にそのことを尋きますと、覚えていないといいます。もっとも校長室というのは、なにか特別のこと、例えばお説教を食うとか、あるいは特別の用事を言い付かるとか、そんな特別のことがないかぎり、普通の生徒は敬遠して、なるべくなら近寄らないようにするものですから、家内が知らないのも当然かもしれません。

私は何の機会でしたか記憶が定かではありませんが、ある日の校長室で、校長先生の頭越しにその額をぼんやり眺めていたことを覚えています。当時の私は、それが文豪トルストイの著書から来ていることも、当のトルストイが敬虔なクリスチャンで、そしてこの言葉のそもそもの原典が聖書にあることも知りませんでした。

それどころか愚かな私は、これは「少年老い易く学成り難し」的な格言か何かだろうと、若い間にちゃんとやることをやっておかないと、すぐ年をとって後で後悔することになるよ、といった類いの教訓だろうくらいに受けとめていました。

それから何十年も経って、聖書を手にするようになった私は、光は、神が天地創造の時、あらゆる生命の創造に先駆けて「光よ。あれ。」と仰せられて、この世界に顕されたものだということを知りました。

そして「光」は、神による被創造物というよりは、むしろ神、および神の御子イエス・キリスト御自身そのものである、ということも学ばされました。

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光をもつのです。」（ヨハネの福音書　八・十二）

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。（ヨハネの手紙　第一　一・五）

光と罪

主の光の中に導き入れられた私は、はじめのうちは、その明るさの中に無我夢中でおりましたが、その内に、何かしら足許を焼かれるような、落ち着かない気分になってきました。

光というのは世界を満遍なく照らします。そして一点の暗い所をも残すことはしません。また光は、

その照らす対象を明らかにします。照らす対象そのものの実体を、本質のところから明らかにし、何一つ隠れたままにせず、すべてを白日の下に曝してしまう——そんな一面を持っています。

私を落ち着かない気分にさせた理由は、光の中に入れられた私に対して、光が私という存在を真正面から照らし、私が持っている「罪」というものを内面から引きずり出して、それらを徹底的にあばき出したからだろうと思います。これは、光というものが持っている性格の厳しい側面だと思います。

神は、深くて測り知れないことも、隠されていることもあらわし、暗黒にあるものを知り、ご自身に光を宿す。

（ダニエル書　二・二二）

罪の意識

私が未信者でいた頃、私は自分自身を、「良い人間か、悪い人間か」と問われたら、どちらか言うと「良い人間」の部類に属すると思っていました。他人にそう迷惑をかけることもない、むしろ人の役に立ってきた方が多いと思う。そりゃあ人間だから悪いこともするだろうが、悪いことといってもたまにキセルをすることくらいはあっても、他にそんなに大きな罪は犯して来なかったと思う、そんな風に思っていました。

自分の中にある、いわゆる「罪の意識」といったものは、きわめて希薄であったと言わざるをえま

せん。

私がこの「キリスト集会」に集いだしたそもそもの理由は、とくにこれといった人生の大試練があったとか、自分という人間に絶望してどうしようもなくて助けを求めてとか、というのではありません。

直接のきっかけとなったのは、家内が集いだしたことです。別に悪いことだとは考えませんでしたから、家内が通うのを止めはしませんでした。かといって自分も同行することは思いませんでした。しかし実際には、家内より半年くらい遅れて私自身も集会に集いだしたのは、それは今から考えると、主の恵みと言うよりほかありません。

しかしその時は、「家庭内平和のため」がその理由のひとつであり、もうひとつは以前にも話したことですが、この集会の雰囲気がとてもよく、居心地が良かったことです。それに周りにおられる兄弟姉妹方が皆よい方々で、「青柳さんは熱心だ」とか、「青柳さん（の信仰）は早い」とか、口々にそう言ってほめて下さるのです。ご当人たちは、お世辞のつもりではなく、多分本気でそう言ってくださるのでしょうが、元来、素直におだてに乗り易いタイプで、人の思いを気にする私は、そう言われているとだんだん抜けられなくなってしまうのです。そんな訳で、少なくとも表面上は、ますます熱心に通うようになったという次第です。

言ってみれば、神様とのお付き合いはどちらかと言うと二の次で、むしろ、これらの人々との交際の楽しさに惹かれて、集会に集いだした面が大きいように思います。

そういう時期が暫く続いたあと、初めの熱気のようなものが徐々に静まり、自分自身で少しく本気で考えるようになってきた頃から、自分の中にいろいろと疑問がわいてくるのを覚えました。その頃、それらのことをメモしたのがありまして、いまそれを取り出しましたら、次のような一節があります。

〈人間は生まれながらに罪人である、人間は本来的に罪を背負ってこの世に生を享けている……と聖書は言う。

神はそれを救すために、自らの唯一の御子であるイエス・キリストを、この世にお遣わしになり、十字架につかせることによって人間の罪を贖われた、と言う。したがって人間の罪はこのことによって救されたのだ、と聖書は言う。果たしてそうなのだろうか?

確かに人間は、良いこともするが悪いこともする。心の中に邪悪な思いを抱くことも事実であろう。それは認める。しかしそれがイエス・キリストの十字架の死に繋がるほどの（深刻な）ものなのか。自分のこれまでの生き方は、それほど悪いものだったのだろうか? そんなに悪いことをしてきたとは思えないのだが……。

また、人間の罪というのは、アダムという人から引き継いだ人間本来の罪、神様に背いてきた罪だと言う。しかし自分にはそんな自覚はない。身に覚えがないというべきだろう。そんなとんでもないことを信じろといきなり言われても……。

さらに聖書は言う。そんな人間の罪は、イエス・キリストの十字架の贖いによって救されたのだと。本当にそうなのか?

なにか、自分がした覚えのない借金を、「君のあの借金は肩代わりして払っておいたよ」と言われているみたいで、「ああそう、それはありがとう」と一応口では言ってみるものの、何かまだ腑に落ちない、そんな感じだ。》

これが当時書いた私のメモの一部です。当時の私の罪の意識はその程度のものでした。

罪の顕現

しかしそれは、自分の本当の姿から目を逸らしているだけだ、ということに、やがて気が付かされるようになりました。

あれは自分が悪いのではない、あれはあの事情では仕方がなかったのだ、あれは結果的にそうなったので悪気があったわけではない——そんなオブラートに包んで、自分の記憶の外側に隠していた事実が、光に照らされているうちに次から次へと現されて来ました。

人間は、誰しも多少なりとも秘密を持っています。他人に見られたり知られたりしたくない後ろめたいこと。できることならこのままそっと墓場まで、人に知れずに持って行きたいこと。またそうする方が、この世を生きていく日常生活の平安を保つ上では、むしろ必要なこと。

そんなことの一つや二つは、誰も持っていない人はいないのではないか。そしてそれらの秘密を、「言い訳と正当化」という包装紙にがっちりと包み込んで、普段は押入れの奥にひっそりと隠してお

き、できればそのことを思い出したくない、そしていつしか都合よく忘れ去ってしまう。

そんな人間がいったん光の中に入れられると、そうは言っておられません。光はそんな人の秘密を、容赦なく明るみに出すものですから、人間は絶え難い苦痛と屈辱を、光の中で体験するのです。私の場合がまさにそれでした。

もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。
（ヨハネの手紙　第一　一・八）

もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。
（同　一・一〇）

罪の認識

主の光の中に導き入れられた私は、光が容赦なく、私自身の罪の多くを白日の下にたな晒しするのを覚えて戦慄しました。（罪の多くと言い、あえて罪の総べてと申しませんのは、まだ自分の意識が認めようとしない、いくつかの隠れた罪があるはずですから。）

そして私は、たな晒しされたそれらの罪を呆然と見つめているうちにやがて、それらに共通するいくつかの点に気がつきました。

一つは、自分勝手であること。自己中心と言いますか、自分の損得勘定が第一で、いつも目指していることが「自分のため」であったこと。そしてその目的の追求のためには、必要ならば他の犠牲をも顧みなかった。というのが若干言い過ぎであれば、他に犠牲が及ぶかもしれないと思われる時でもそれに目をつぶり、意識的にそれを見ようとしなかったこと。そうして、自分の利益を追求し、また欲望を満足させようとしたこと。

二つは、自分を高いものとしたこと。自分は優秀だと自惚れ、他が自分より優れていることに我慢がならず、それを認めようとせず、「なに　あんなものはたいしたことはないさ」と、自分を無理にでも納得させる。一方、他人の中に、弱いもの・劣っているものを認めると、心の中で快感を覚える。また人の欠点は見逃さず、それに対して厳しかったこと。

と同時に、こんな傲慢さと裏腹に、「裏返しのコンプレックス」も大きく、他人の評価を気にし、他人からの誉れを、常に内心期待したこと。

三つは、他人に対する愛が乏しいこと。人の幸運や成功・出世を羨み嫉み、自分の願望を邪魔するものに対しては、怒りと恨みをもって報いる。敵対者や競争相手に対しては、憎悪をもってこれと戦

い、心中相手の没落と滅亡を願ったこと。

他方、弱いもの・遅れたもの・困っているものに対しては、「努力が足りない。所詮身から出た錆び」と冷たく突き放してしまうこと。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎むもの、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らうもの、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

（ローマ人への手紙　一・二九～三一）

神に背きの罪

このように数え挙げていくときりがありませんし、自分がますますみじめになっていくのですが、最後にもう一つ、自分の罪を挙げなければなりません。そしてこれが多分、一番重大な罪だと思うのですが、それは、「神というものを意識しなかった」ことです。

それまでの自分は、人生は自分自身の力で切り拓いていくもの、そして現在生きているこの自分は、他人の世話になることはあるにせよ、基本的には、自分自身の力で生きているのだ、と思い込んでい

たことです。また人間は、努力次第で大抵のことは成し遂げることができる、とも考えていました。

そのような「人間万能主義」の私でしたが、同時に、そうは言うものの、人間の能力を上回る何者かの存在、人間の力では動かすことのできない、人間のレベルを遥かに超えて存在する何かがある、ということにも気がついていました。それは人間がいくら努力しても、懇願しても、抵抗しても、その意思を曲げることはできず、人間は最終的には、その冷徹な意思に従わざるを得ないもの。それは、われわれがよく使う言葉、「やれるだけのことはやった、後は運にまかせよう。」と言う時の「運」です。私は、「運命」というものが働いていることを認め、人間はその支配下に生きているのだと、考えていました。

しかしながら、運命とは別に、もっと高い所から人間世界全体を愛の眼差しで見渡し、一人一人の人間を、その最善へと導こうとしておられる方。この方のことについては、私は何も知りませんでした。

ただ世の中の宗教家の言う「神様」というのは、私が「運命」と呼んでいるもののことであり、これを神と崇めて信奉しているのではないか、と漠然とながら、そんな風に考えていただけです。

光と救い

そのように、主の光の中に入れられて、足許を焼かれるような居たたまれない気分、あるいは、人

前で裸にされるような激しい苦痛と屈辱を味わいながらも、私は光の外に逃げ出し、元の暗やみの世界に帰ろうとはしませんでした。それは、光の中に居続けることによって、そんな苦しみにも勝る、慰めと安らぎを全身に感じ取っていたからです。

光は一点の暗いところをも余さず、容赦なくすべてを明るみに摘発する、厳しい審判の一面がありますが、それと同時に光はもう一つの側面を持っています。それは、明るく、晴れやか、なごやかで、人を無条件に慰め、勇気づけ、希望をもたせる……それは、光が厳しさとともに兼ね備える光の優しい一面です。まるで春の野に出て、燦々とふりそそぐ陽光を浴びたとき人が感じる、あの安らぎと慰め、そして励ましを光は与えてくれます。

光は快い。太陽を見ることは目のためによい。

（伝道者の書　十一・七）

これが、私が光の外に逃げ出すことなく、むしろ求めて、光の中に居続けた理由だと思います。自分がどれほど真剣に自分の罪を認め、悔い改めたか、その点については残念ながらあまり自信がありません。というのは同じような罪を、悔い改めた後もまた繰り返しているからです。それでも以前と比べれば、罪悪感や自己嫌悪感に抑えつけられて気分の重い自分より、心安らいで喜んでいる自分の方が大きくなってきている。そのことが感じられるように変わってきました。

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わり

を保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（ヨハネの手紙　第一　一・七）

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（同　一・九）

家内とともに私が洗礼にあずかったのは、そのような時、今から三年前の春の御代田でした。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。（ローマ人への手紙　六・四～七）

光にある交わり

光の中で光によって罪を赦され、罪から解放された私たちは、「交わり」を保ち続けなければならない、と聖書は教えています。その「交わり」とは父なる神そして御子イエス・キリストとの交わりであり、同時に隣人との交わりです。

「交わり」とは「愛」にほかなりません。

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

（ヨハネの手紙　第一　一・三）

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ちます。

（同　一・七）

しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまずくことがありません。兄弟を憎む者は、や

みの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らないのです。やみが彼の目を見えなくしたからです。（同　二・八～十一）

光にある御父および御子イエスさまとの愛の交わりは、聖書のみことばを通して、そして祈りを通じて行うことができます。何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるという、神に対する確信を私たちは持つことができます。

また兄弟姉妹方との主にある交わりも、喜びと感謝をもってすることができます。殊に私などは先に申し上げた通り、はじめから兄弟姉妹との交わりに惹かれてこの集会に集いだしたくらいですから、光の中で兄弟姉妹と主にある愛の交わりを持つことは、まことに喜びとするところであり、何の支障も覚えません。

しかし、聖書がここで言っている「兄弟」とは、ただ主にある兄弟姉妹のことを言っているだけなのでしょうか。もっと幅広い意味、すなわちこれは「隣人」、さらにはそれ以上の範囲を指して言っているのではないでしょうか。

罪と赦し

そのように考えると、たちまちイエスさまのあのみ教えが自分に迫ってき、胸をグサリと衝き刺す思いにさせられます。「汝の敵を愛せよ」というあの教えです。

「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょう。異邦人でも同じことをするではありませんか。だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。

（マタイの福音書　五・四三～四八）

私はこれを聞くと顔を俯けざるをえません。何故なら私にはこれができないからです。先ほど数え上げた私の罪、光に炙り出された私の数々の罪、それらはいずれも矯正することは大変難しいのですが、なかんずく自分にとって直すことが困難なのは、この「敵に対する愛」です。他の罪、すなわち「自己中心の罪」や「自分を高くする罪」、これらも難しいのですが、それでもその罪を犯しそうになる時、その寸前にハッと我に返り、未然に収まることも時にはあるのです。しかしこの三番目の、「愛の欠如の罪」とくに敵対者に対する場合は、ほとんど自分ではコントロールが不可能であることを告白しなければなりません。

このように性懲りも無く同じ罪を繰り返し、その都度失意に落ち込む愚かな者です。しかし、そん

な私がそれでも希望を捨てないでいられるのは、イエスさまが、そのような者をもその度にとりなして下さる、ということが約束されているからです。

もしだれかが罪をおかしたなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです。（ヨハネの手紙　第一　二・一～二）

光——それは父なる神、そして御子イエス・キリスト御自身であり、この光が私たちの罪を絶えず指摘します。しかし指摘するだけに終わらず、光は指摘した罪を赦し、そして私たちを救う、絶えざる赦しと救いでもあります。

そのうえ光は私たちの足許を照らし、私たちの行くべき道を示してくれます。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。（詩篇　一一九・一〇五）

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。（エペソ人への手紙　五・八）

むすび

若い頃に校長室に見た、あの額に書いてあった一節、「若者よ、光あるうちに光の中を歩め」というのはそういうことだったのかと、あの老校長の厳しさの中にも慈愛のこもった温顔を懐かしく思い浮かべながら、今さらながら思い返している次第です。

せっかく主の恵みで導き入れられた光の道に、これからも外れることなく、兄弟姉妹方と共に歩み続けていきたいと願っております。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

（ヨハネの手紙　第一　四・九～十一）

以上をもって終わりにしたいと存じますが、最後に蛇足ながら一言弁明させて頂きたいと思います。というのは、私はここ数年このかたキセル乗車を一度もしていない、という事実であります。「しない」、というより「できなくなった」、というのが当たっているようであります。これも感謝なことであります。

この点ひとこと申し添えまして、本日は終わらせていただきます。

（二〇〇〇年四月）

生と死 ―先に逝った友へ

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。　（ピリピ人への手紙　3・8～11）

最後の出会い

最近、私は親しい友人を病で失いました。

彼と最後に会ったのは、彼の死の半月ほど前だったのですが、その彼との最後の出会いのわかれは、お互いにとって少々気まずいものとなりました。

私たち二人は「死後の世界をどう考えるか」ということを話し合っていました。不治の病で自分の死期がそう遠くないことを、彼があまりにも淡々と話すものですから、話題は自然とそんなところに向いて行ったのでした。

この世は、死後の「永遠の生」の前のほんの一瞬間に過ぎない。人間は、短いこの世の人生で遺り残したことをそのまま携えて行き、あの世で完成させるのではないか。言ってみれば、この世は「天国への階段」だ。そんな風なことを私は話したと思います。

それに対して彼は、「そうかもしれないね」と頷いていたのですが、イエス・キリストを主と仰ぐ信仰について話題を進めた時、彼はそれまでの様子とは異なりキッとして、「そのつもりはない、その話はやめてくれ」と語調を荒げたのです。

私としては、それでも今彼に救われてもらわなければ困る、という必死の思いと、同時に、まだ「神の時」ではないのかという空しさを抱いて、それ以上は言わずに彼の部屋を後にしたのでした。

人は自分の行いがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。
あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。

（箴言　一六・二〜三）

親友

彼と私は今から約四〇年前、同期で同じ銀行に就職しました。大学は東西に分かれていたので、初めて出会ったのは新入社員研修の場でしたが、その時以来お互い妙に気が合って、終生の友となりました。

彼は若い時から、「一頭地を抜く」と言うのか、周りから自然と一目も二目も置かれる存在でした。常に背筋をすっきりと伸ばした長身、端正な容貌に加え、プロアマコーラスで長年鍛えた魅力的なバス。そしてどちらかと言うと真面目くさった表情を崩さない彼は、初対面の場合はややとっつきが悪く、堅苦しい印象を人に与えかねません。ましてや、在学中に司法試験にパスした秀才と聞いて、人はちょっとたじろがざるをえません。

しかし彼が、本当は酒をこよなく愛し、とびっきりの映画ファンで、口を開けば邪気のないジョークを連発し、しかもそのジョークに、誰よりも自分自身が笑い転げる好人物であることに気づくのに、そう時間はかかりませんでした。

この四〇年の間、彼とは仕事以外にも色々な形での付き合いがありました。インドネシアや米国で、あるいは京都への家族ぐるみの旅行。子供同士の家庭教師、感銘を受けた本の貸し借り。映画、音楽会、小唄の稽古……。数え上げればきりがありませんが、一番多かったのはなんといっても、旨い店を見つけては、二人で交わしたお酒でした。いろんなことを話しました。心から話し合える相手でした。

彼は会社の出世街道も常にトップを走りました。こちらはともすると置いてけぼりを食うのですが、しかしそんなことは、二人の友情をいささかも損なうものではありませんでした。

友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。

（箴言　一七・一七）

「一緒に酒は呑めるんだろうね」

ところがそんな彼との間が、お互いに何となくぴったりせず、話をしていても、何か間に障子を挟んで話しているように感じ出したのは、数年前私がこの「キリスト集会」に導かれ、信仰を持ち出してからのことです。信仰を持ち始めて、最初にそのことを告げたのは、無論彼にでした。

「ほおー……青ちゃんがねえ……」

と何とも言いようのない顔をして、彼は二の句が継げない様子でした。そしてやがてしばらくして、彼が半ば本気で、

「これからも一緒に酒は呑めるんだろうね」

と心配げに言ったのはけっさくでした。

それからは、家内の証しのテープや、私のメッセージテープは彼に渡しました。彼はその都度聞いてくれていたようで、時々短いながらも心のこもったコメントをしてくれました。

これは断言できると思うのですが、彼は私どもの信仰を、うわべでは時には揶揄しながらも、内心は、理解と同情とある種の敬意をもって、見守っていてくれている、ということでした。ただ彼自身はというと、本人は明言こそしませんが、何か一歩隔てた構えで用心しているさまで、肝腎なところに来るといつも、なんとなくサラリと話題をかわされてしまい、乗ってこようとはしませんでした。

そんなことが何度か繰り返されているうちに、二人の間の会話は、以前のような自由闊達とはいかず、なんとなくしっくりしない、もどかしいものとなってきたのは事実です。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

（コリント人への手紙　第一　二・一四）

発病の知らせ

彼の発病の最初の知らせは、昨年五月の連休明けの土曜日、夕餉時にかかってきた電話でした。家内に彼からの電話を告げられた時妙に胸騒ぎをおぼえて、またその日は来客もあったので、別室に回してその電話を受けました。

「君にだけは言っとかなきゃと思って……実はオレ癌が見つかっちゃった」。

普段と少しも変わらぬ、落ち着いた声で彼はそう言いました。短い会話のあと、「祈っているよ」と言って電話を切りました。

五月二十五日、彼がオペを受ける前日だったと思います。その日病室に見舞った時、いつになくナーバスで、こちらの話にも上の空の風な彼をそこに見ました。手術を目前にしてやはり心穏やかでないのかな、と察しましたが、それにしても、日頃冷静で多少のことには動じない彼にしては珍しいことに思いました。(後日談になりますが、彼はこの時の自分の態度を大変気にして、翌日手術室に入る前、奥さんに、青柳に謝っておくように言いつけ、また快復後、自身でも私にしきりに謝りました)。

それはともかく、彼のいつにないこの時の様子を、私は一寸怪訝に見たことは事実です。しかし実のところこの時彼は、手術前最後の検査の結果、病巣が転移していること、その転移も多部位にわたっているため、転移部については手術不可能、という判定を医師から直接聞かされた直後だった、と

いうことが後になって判りました。

しかしこのことを私が知らされたのはほぼ一年後、彼の口から、彼の死直前一ヶ月のことでした。

実に、私には食物の代わりに嘆きが来て、私のうめき声は水のようにあふれ出る。私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。私には安らぎもなく、休みもなく、いこいもなく、心はかき乱されている。

（ヨブ記　三・二四～二六）

さむらい

「オレは根っからの町人だが、お前は本当にさむらいだね」

と、かつて彼に言ったことがあります。代々、九州の筑後柳川藩の家老を勤めた家柄で、さらに祖先を辿れば、京都吉田神社の神祇官で、徒然草の作者兼好法師に行き着く。そんな家系の嫡男として彼は生まれました。

そういう血筋のなせる技か、あるいはそういう躾を受けたせいか、彼の生き方は確かに武士のものでした。彼から泣き言や愚痴は聞いたことがなく、他人についても、冗談めかした皮肉めいたコメントをすることはあっても、悪口をもろに言うのは聞いたことがありません。人間なら誰でも持つであろうところの弱さ、醜さ、惨めさ、苦しさといったものを、人前に顕すことを潔しとしませんでした。

言い換えれば彼は常に、「自制の人」であり、「啫みの人」であり、また彼一流の美学を貫いた人であった、と言うことができるでしょう。

しかし、内心はどうだったのでしょうか。人一倍厚い情、研ぎ澄まされたような神経の持ち主でもあった彼の場合、外面はともかく、内面では大きな揺れ動きがあったに違いないのです。

こんな思い出があります。二人がまだ三〇代後半だったと思います。彼のお母さんが亡くなられてすぐ後、たしか小唄の稽古の帰りだったか、いつもの居酒屋で、彼の様子があまりにも普段と変わらないので、私は言いました。

「君は強いね、お母さんが亡くなってもそうして平気でいられるなんて」

その途端彼の顔はクシャクシャに歪み、涙をどっと出してトイレへ走り去りました。

今度のことだって実際はどうだったのでしょう。医者から不治の病であることを告げられてからこの一年間、どんな思いが彼の心に行き来したのでしょう。

日本経済の高度成長期がちょうど始まる頃学窓を出て、第一線の企業戦士として、ひたすら会社のため、社会のために全力を尽くし、勤勉に勤め上げてきた。その結果、相応の地位とこの世の富をも手にした。そしてこれからは、自由な時間のゆとりもでき、リタイヤー後にとっておいた色々な夢や計画も、そろそろ遠くなくなってきた。その矢先に、なぜ自分だけにこのような苛酷な運命が押し寄せるのか。

「なぜ？　なぜ？　なぜ？」

そんな思いが、彼の心に繰り返し去来したことは、想像に難くありません。悲しみ、悔しさ、未練、心細さ。そして後に遺していく家族への憐れみ……。それらが、入れ替わり立ち代わり彼を襲い、彼の心はその苦悩にうめき、のたうちまわったのではないでしょうか。

私にはむなしい月々が割り当てられ、苦しみの夜が定められている。横たわるとき、私は言う。「私はいつ起きられるだろうか。」と。夜は長く、私は暁まで寝返りをうち続ける。

（ヨブ記　七・三〜四）

しかしそうこうしているうちにも、彼は彼なりの心の整理を、徐々にではあるにせよ、していったようです。去年の秋頃より再開した二人のノミ会で会う彼は、一見以前と変わらないようでした。病気についても、再発予防の処置は継続しているが、今のところ特に問題はない、という風にほのめかすだけでした。彼はもともと、自分のことを語ることが少ない人でしたが、それ以後はもっと極端になり、彼の口から自分自身が出ることはほとんどなくなりました。

それでは彼は一体どのようにして、自分の心の整理をつけていったのでしょうか。これは今となっては想像するしかないのですが、やはり一種の「あきらめ」だったのではないかと思います。

ジタバタしたところで運命には逆らえるものではない。そうであるならば、潔く現実を受け入れるしかない。自分はこれまでも、自分だけを恃み、自分なりの生き方を貫いてきた。今回のことも自分で解決するしかない。あとどれだけ残されているか定かではないが、残された人生をこれまで通り、

自分の力で生きていくしかない。

このような、あるいはこれに近い心境に彼は達したのではないか、と想像されます。自らの強烈な意志でもって、受け入れ難い現実を受け入れ、納得できない自分を無理にも納得させたのでしょう。そしていったん自分でそうと決めた以上、あとは未練も恨み言も言わない。そこに見られるのは、古来日本の武士道に見られる潔さと諦念です。

死はすべての終わりか

それはそれなりに理解できないわけではなく、ある意味では勇敢な生き方と言えるし、それに対して敬意を払うこともできます。しかし彼にとって惜しまれることは、そこには平安も希望も喜びもない、ということです。

彼は多分、「死」を以ってすべての終わり、と考えていたのでしょう。したがって当然のことながら、その先へ続く希望は持てなかったし、そのため残念なことに、そこには喜びも心の平安もなかった、と思わざるを得ないのです。

ところが、私たちイエス・キリストを信じ主と仰ぐ者には、そういうことはありません。私たちにとって、この世での死は決してすべての終わりではなく、さらにその先に、永遠に続くいのちの希望があるのです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

（ヨハネの福音書　十一・二五～二六）

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

（同　十・二八）

このように、私たちは主のみことば・御約束を信じて、永遠への憧れと、来るべき世界、すなわち来世への信仰を持つことができます。それでは、私たちが憧れそして信仰する、永遠に続く来世とは、一体どのようなところでしょうか。少し聖書から学んでみたいと思います。

永遠への憧れ

それは一つには、来世とは、この世の涙をぬぐい取ってくれる処です。

この世は憂きこと、つらいことで満ちています。言ってみれば、死の陰の谷、涙の谷であります。もちろんこの世にも楽しいこと、嬉しいことがありますが、一方では思わぬ不幸に出会い、途方に暮れることがあります。また不幸がさらに不幸を呼び、立ち直る隙も与えられないような時、これらは神様からの試練とは分かっていても、襲って来る苦しみと悲しみに流す落胆の涙は多くなります。

しかしそんな時でも、私たちが希望を失わないでいられるのは、たとえこの世でこの涙が乾くことが無くとも、あちらへ行けば、その涙はぬぐい取って頂けることが確信できるからです。

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（ヨハネの黙示録　二一・三〜四）

二つには、来世は親しい人との再会の場である、ということです。

先に逝った最愛の夫や妻、あるいは病気や不慮の事故によって若くして先立った愛する子供、また多くの主にある兄弟姉妹たち、そんな人との再会の期待。逆に自分の方が先に旅立つ場合でも、この別れはいっときのもの。残されたわが愛する者もいずれは後を追って来て、再び愛の生活を共にすることができるという期待。これらの思いは私たちの心を慰め、そして私たちの来世に対する信仰を限りなく強めます。

何故なら、イエスさまは、極悪の死刑囚さえも、彼が神を畏れ、罪を悔い改めた時、彼を即座に赦し、天国をお約束してくださったのですから。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではない

か。自分と私たちを救え。」と言った。

ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

（ルカの福音書　二三・三九～四三）

来世への憧れの三つ目は、そこでは正義が行われる、ということを知っているからです。

この世では、正直者が損を見る、ということが往々にしてあります。一方では真面目に誠実に生きているのに大きな災難が見舞い、不遇の一生を送る人があります。そうかと思うと他方では、したい放題この世で悪徳のかぎりをつくして、世間からは目を背けられているにもかかわらず、とくに制裁を受けるでもなく、一見幸せにこの世の生涯を終わる、そんな人もあります。世の中ってなんて不公平なんだろう、と思わせられることがしばしばあります。

しかしこの世においてはたとえどうあろうと、来世には神の正しい、そして厳しい審判が待っています。正しい人の正義は神様の前に善とされ、永遠の輝きを受けるのに対して、悪人の罪は永遠に罰せられるのです。

このことを胸に浮かべるとき人は、世の中の多少の不条理にも心を騒がせることなく、また悪人に対しても徒に腹を立てることなく、すべてを主にゆだね、自らは益々正義の道にいそしもう、という気持ちが与えられるのではないでしょうか。

悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。悪を行う者は断ち切られる。しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。

（詩篇　三七・一～九）

「完成の場」

来世を憧れる理由の四つ目は、そこは「完成の場」であることです。人は、この世における勤めを、天職として、神様から一人一人に授かっています。それはビジネスであったり、学問や芸術の道であ

ったりします。しかし人間一生の間で、与えられた天職を完成して死を迎えることのできる人、というのはどれだけいるのでしょうか。きわめて稀なのではないでしょうか。家庭の事情、経済的な理由、あるいは健康問題等で、本人の素質や能力や意欲とかかわりなく、志半ばにして、この世を後にしなければならないケースのいかに多いことでしょうか。

また仕事以外でも、人はこの世でやりたい事、やらねばならぬ事など、いろいろと計画を持っているものです。しかしそれらが計画通り実行できるかというと、必ずしもそうではありません。何らかの障害が、いつもそれらの計画実現を妨げ、人はそれをやり残したまま、心ならずもこの世を去るというのが普通です。

しかし、この世における生活と死は、すべての生命の終わりではなく、さらにそれに続く永遠の世界があることを知る時、人は希望を繋ぐことができます。人は、「不完成」を持ち越して死を迎えるのが普通です。それは、この世で持ち越した不完全を次の世で完成させるためだ、ということなのではないでしょうか。

パウロは次のように語っています。

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。

（ピリピ人への手紙　一・六）

パウロの死生観

次に来るべき世界、来世、すなわちこれから私たちが向かおうとする天国は、目の涙をぬぐい取ってくれる処、親しい人との再会が約束されている処、正義が行われる処、そして人間を完成に導いてくれる処。それに引き替え、私たちが今生きているこの地上の世界は、憂いと悲しみと苦しさに満ちた処、不公平・不条理なことがはびこる処、折角の志を立てても事半ばにして未完成に終わる処、であります。

そういうことであれば、この世に生きるということは、あまり意味がないことになるのでしょうか。そんなに憂きこと、辛いことが多いこの世ならば、来世こそを楽しみに夢見ながら、この世はなるべく適当に過ごしておけばよい、ということになるのでしょうか。

さらに言うならば、自分の命を自らの手で縮めてでもこの世には別れを告げて、一日も早く来世に向かう方がよいのではないか、ということになるのでしょうか。

パウロはそのような考え方を否定しています。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ人への手紙　一・二一）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリスト

が私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ人への手紙　二・二〇）

自分がこの世に生きているのはキリストと共に生きているのであって、キリストの命じるままに自分の務めを果たすのであるから、この世の生は重要である。他方、自分が死んでこの世を去れば、天国でキリストの傍に、キリストと共に生きることができるので、死ぬこともまた益であると言っています。

パウロにとっては、どんなに辛いことがあっても、この世を生きることは、神から与えられた義務を果たすためであって、大いに意義があることである。しかしながら、かといってこの世に一日も長くしがみついていようというのでもない。主が召してくださる時がくれば、喜んでそれに従おう。何故なら自分は死もまた益だ、いやむしろ、そのほうがはるかにまさっていると信じているのだから、と。

言い換えれば、パウロは「生きるもまた善し、同時に、死ぬるもまた善し」と言っているのであります。このようにパウロの人生観といいますか、死生観は徹底して明るいものだと言うことができると思います。

「その時はよろしく頼む」

さきほどの私の友人のことについて、話を戻します。

彼の場合、彼はこの世の生の喜びは持っていたにしても、死についてはどういう思いを持っていたのでしょうか。少なくともそこに喜びに類するものは無かったと思われます。何故なら彼は、この世の死はすべての生命の終わりと考え、死後の世界への希望は持っていなかった、と想像されるからです。

しかし、そういう希望が持てるものなら自分も持ってみたい、という思いは彼にもあったのではないでしょうか。というのは、冒頭に申し上げた彼との最後の面談の時にも、天国の話について彼は、「そうかもしれないね」と頷いていたのですから。

彼の拒絶は、「それでは、天国に行くためにはどうすればよいのか」ということに話を進めた時に起こったのです。彼はそれについては耳を傾けようとはしませんでした。何故、彼はあのように頑なに拒んだのでしょう。

彼の葬儀の準備をする中で、一つの理由らしきものが判明しました。というのは、彼のお祖父さんか、曾お祖父さんの時に、故郷にお寺を建立してこれを寄進したそうです。それ以降、代々の当主の入る墓はすでにその寺院の中に決められていて、また戒名についても、よく知りませんが、「院殿号」とかいう最高位のものが定まっていたそうです。

そういうこの世のしがらみからくる縛りが、彼が真の意味での信仰に入ろうとする時にも、あるい

は内在する障害となった、ということも考えられます。

しかし、私の心に憧かながらも慰めと救いがあるのは、最後の面談のほぼ一週間あとだったと思います。彼から電話があったのです。退院して暫くの自宅療養に入っていることなどを告げるうちに、彼はさりげなく言いました。

「この前は気を悪くしたのではないかと思ってね。言い繕うつもりはないが、こう言い直させてもらえないか。今はそうではないが、僕が本当に救けを求める気になった時、その時は君に信号を送るからその時はよろしく頼む。こういうことでいいかい?」

むすび

この電話のあった日の夕刻から、彼の病状は急変し、再度緊急入院となり、そしてほぼ二週間後の五月十四日、彼は帰らぬ人となりました。

この二週間、彼は一体何を考えていたのだろうと、この頃しきりにそんな思いが、繰り返し起こってきます。ひどい痛みと苦しみがありましたが、薬も効いて家族と穏やかに会話を交わすような落ち着いた時間も、少しですがあったそうです。予想していたよりも急速にやって来た自分の死期の近いことを悟って、一体彼は何を考え、何を願ったのでしょう。

そんな苦しみの中で、ひょっとしたら、心の中で私に信号を送り、そしてイエスさまのお名前を口

にしたのではないか、などと想像してみるのです。もう今となっては確かめる術もありませんが、もしそうだったら良いのにと思います。

彼の発病以来この一年間私は、自分一人で、あるいは家族と共にする朝晩の祈りに、毎日彼のことを祈りました。しかしこの一年間というのは、彼にとって最も辛く悲しい時間だったはずです。その間私は祈ることはしても、他に彼に何をしてやったか。彼が苦しみのうめきの中で、口でこそ言わなかったにしても、「救けてくれ」と心の中で彼は必死の信号を送り続けていたのではなかったか。その信号にも気づかず、彼が一番必要とした時に何もしてやれなかった、自分の友達甲斐の無さと愛の無さが悔やまれてなりません。

彼が亡くなってからも、彼と彼のご遺族の救いを毎日祈っています。これからも祈り続けたいと思います。そして私が向こうへ行った時、それはそう遠いことではないと思いますが、そこに彼の姿を見出し、また昔の友情を復活させる。そして今度こそ、共に主にある兄弟として交わりを続けること、これが今の私の夢です、心からの願いです。

この願いが叶いますよう、これからも祈り続けて参りたいと思っております。

それでは、最後にみことばを一つ拝読して終わりたいと思います。

私たちの国籍は天にあります。

（ピリピ人への手紙　三・二〇）

（二〇〇〇年七月）

ふたりの主人

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ人への手紙　3・7〜8）

信仰に導かれるまで

先般「ドイツ喜びの集い」に参加いたしました際、求められてお証をさせて頂きました。ただそのお証は、五分間という時間内での比較的短いものでありましたので、若干舌足らずであったことは否めません。そこで本日はそれを少し敷衍するかたちで話を始めさせて頂きたいと存じます。

私は今から約五年前、この「キリスト集会」に導かれました。それまでの約六十年間の人生を、私は宗教や信仰とは全く無関係に送ってきましたので、聖書を手にしたのもその時が初めてでした。

そのさらに一年前、すなわち今から約六年前、ある銀行の役員を務めていた私は、次回の株主総会で役員を退任することが決まりました。企業社会の中での出世コースを断ち切られた私は、それまでの自信満々の鼻をへし折られてガッカリしたのは事実ですが、一方では心の中で一寸ホッとしている自分をも発見しました。

第二次世界大戦敗戦後の混乱期に、私は少年時代を送りました。そこには、家は空襲で焼かれ、着るものもなく、また毎日何百人という餓死者が出るという極端な食糧難がありました。そんな中で日本人の多くは「物質的な豊かさ」を夢見ました。日本経済を復興して物質的に豊かになることこそが日本人を幸福にする道であると、彼等は固く信じて疑いませんでした。私もその一人でした。

天然資源の乏しい日本は、原材料の供給を外国に頼らざるを得ないわけで、日本が生きていくため

には、また日本人が欧米並みの高い生活水準を保つためには、それら原材料をもとに、より付加価値の高い「モノづくり」が求められました。そこで、日本全体が生産工場と化すほど、日本は各種生産増強に励み、それらの海外向け輸出に努めました。

一九六〇年代の初め、それはちょうど日本経済の高度成長期が始まりつつあった頃ですが、大学を出た私は、何のためらいもなくビジネスの世界に身を投じました。折から日本経済が伸張し、国際化していく中で幸いにも私は、主として、日本の輸出入を円滑に実行するための貿易金融や外国為替の面で、一企業戦士として国際ビジネスの最先端で、仕事に打ち込むことができました。

自動車・家電・光学器械等に代表される日本の工業製品は、海外からの強い需要を喚起し、それらは文字通り飛ぶように売れました。同時に、効率的かつ家族的な日本式経営が見直され、これこそが経営の鑑、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」として外国で持て囃されました。

戦後五十年、日本は確かに「物質的に豊かな国」になりました。「金持ち国」にもなりました。「モノ」が全般に行き渡り、需要がそろそろ限界に達してきて、「モノ」の生産活動のためには、もうあまりおカネが要らなくなりました。そしていわゆる「カネ余り現象」が生じてきました。すると日本人は「モノづくり」のためではなくて、今度は「カネづくり」のために、言い換えれば、おカネを求めておカネのためにカネを使うようになりました。

しかしその結果、果たして日本人は幸福になったと言えるのでしょうか。その逆ではないかと思います。人間の欲望は、さらに大きな欲望を呼び起こして限りがなく、そしてその欲望を達成するため

には、他人の犠牲をも頓みない。最近の日本で、毎日のようにひき起こされる悲惨な事件の数々は、そのことを物語っています。日本人は「物質的な豊かさ」と引き替えに、何か大切なものを失ってしまったのではないか、そんな思いがします。とくにバブル経済といわれた時代、人々はカネを求めて狂ったように走り回りました。

そのような中で銀行は、それを制止するどころかかえって人の欲望をあおり、それを助長しました。そしてその結果、銀行は自らの破滅をも招いてしまいました。

私はその只中に居ました。

金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。

（テモテへの手紙　第一　六・九～一〇）

それは、私が自分のやっている仕事にいくぶんの空しさを覚え、ある種の限界を感じている、ちょうどそんな時でもありました。世に役立つ何物をも創造しないもののための金融、否むしろ世の害毒にすらなるもののための金融――いつの間に路線が狂ってきたのか。

私は自分が知らぬ間に犯してきた罪の大きさに驚きました。そしてできるものならば、赦しを求めてもう一度出直したい、という思いを持つようになりました。と同時に、人間というものが本来的に

持つ弱さ、不安定さというものを、改めて目の当たりにする思いがしました。

そんな中で、何ものによっても動かされないもの、何かしっかりした拠りどころとなるもの、人間にとって真に頼りになる何ものかを、私はその頃から求め始めていました。

それを私に与えてくれたのは一冊の書物でした。それは聖書です。

主は、そのようなものを憐れんで、私ども夫婦をこの「キリスト集会」に導いて下さいました。

ふたりの主人

以上が、私が信仰を持つに至った一面の経緯ですが、それでは信仰に入ってからの歩みはどうだったか、順調だったかというと、必ずしもそうとも言えません。

というのは、イエスさまを信じて、心の安らぎを覚えて喜んでいる自分が一方には確かに居るのです。しかし同時にもう一方には、口先では人の心のはかなさとこの世の空しさを言っていながら、実際のところは、なおこの世のことに心を用い、そのことにも意味を見出し、努力している自分が居るのです。そしてそれら二つの板挟みとなり、その双方に意を用いる結果、どちらにも中途半端で生ぬるい自分を見出すのです。

そのような私に次のようなみことばは、私の肺腑を抉って響いてきます。

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重ん

じて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にもつかえるということはできません。（マタイの福音書　六・二四）

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。（ヤコブの手紙　四・四）

これらのみことばの前に、私は一言も無くただ頭を垂れるしかないのです。ただ聖書が其処此処でこのように言っているということは、とりもなおさず、昔からこの問題は人間にとってそうたやすく解決できない、大きなテーマだったのではないか、そんな気もしてきました。

そこで聖書から少し先人の例を二、三、辿ってみたいと思います。

モーセの場合

まずモーセです。モーセはご承知のようにエジプトのパロの娘に拾われ、その愛し子として大切に養育され、立派な若者に成長しました。このままいけばパロの後継者か、そうでなくともエジプト王朝の中で、国の指導者としての道が約束されていました。その気になれば彼は、この世で人が望みうる限りの富や栄誉や権力を手にすることもできました。ところが彼はその道を選択しませんでした。彼は主の命に従って、パロの圧政下で苦しみにうめく同胞とともに苦難の道を選びました。

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。信仰によって、彼は、王の怒りを恐れないで、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。

（ヘブル人への手紙　十一・二四～二七）

さすがモーセです。彼はこの世の快楽と繁栄をものともせず、敢えて苦難の道をとり、主に従いました。

「富める青年」の場合

次は、そうはウマく行かなかったケースです。よく知られている「富める青年」の話です。

彼は真面目で模範的な人物で、人が守るべき善いことはすべて行っていると自負できる青年でした。しかし彼の心にはいつも安らぎがなく、永遠のいのちを獲得していない、という淋しさと不安に常に襲われていたのです。そこで彼はイエスさまのところに来て尋ねました。「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか」と。イエスさまのお答えは、「戒めを守りなさい」

でした。

問答は続きます。「どの戒めですか」「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか」。

イエスさまは言われました。

《もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについてきなさい。》（マタイの福音書　十九・二一）

青年はそれを聞いてどうしたでしょうか。

《ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。》（同　十九・二二）

青年は心の底から永遠のいのちを求めていました。ただ彼は誤解していました。

永遠のいのちは、自分が頑張って努力すれば、手に入れることができるものと考えていました。永遠のいのちは、自分の行い（たといそれがどんな尊い行いであっても）の結果得られるものではなくて、神様に依り頼むことによってしか獲得できないものである、ということを知りませんでした。したがって、永遠のいのちと引き替えに自分の持っている全財産を要求された時、彼の心はあまりに強

くこの財産に執着していたため、ついにこれを棄てて神に立ち帰ることができませんでした。いわば彼は、神様と財産との二者択一を迫られたのであります。彼は結果的に神様よりも財産を優先させた。言い換えれば、神様に依り頼むことをせず、自分の財産に依り頼んだ、ということになります。

真に大切なもの

この話を聞いて、あるいは人は言うかもしれません。「ああこれはお金持ちの話だ。棄てるほどの財産を持たないわれわれには関係の無い話だ」と。しかし果たしてそうなのでしょうか。

聖書がここで言っている「財産」とは、単に富、すなわち金銀財宝のことだけを指しているのでしょうか。そうではなくて、その心が神様以外、キリスト以外の何物かに依り頼んでいる人はすべて、この「富める青年」と同じ状態にいるのであって、その意味ではやはり同じく「金持ち」といえるのではないでしょうか。

ある人は、自分の仕事や趣味をもって拠りどころとしている人もあるでしょう。またある人は、名誉や地位権力といったものを最後の拠りどころとしている人もあるでしょう。またある人は、肉体の健康を自分の拠りどころとしているかもしれません。またある人の拠りどころは、家族や親しい友人かもしれません。

人は誰でも自分の「宝」を持っています。それを失えばもう生きてはいけない、生きている意味が

無い、と思い詰めるほど大切なものです。

しかしながら、人間というのは勝手なもので、その価値観というか、価値の判断基準はきわめて相対的なものです。今まで大切にしていたものよりもさらに貴重なものに出会うと、以前のものはそれほど大切には思わず、というより、それはもうどうでもよくなってくるのです。イエスさまを知るようになってから、私たちの価値観はその意味で大きく変わってきたのではないでしょうか。

以前はあれほど執着していた「こと」や「もの」が、今考えると、どうしてそれほど大切だったのかと不思議に思えるほど、何ものでもなくなりました。しかし「それでは、お前は今持っているものすべてを棄てて、それらを失ってもいいのか」と訊かれるとどうでしょうか。やはり「うーん」と唸らざるを得ないのです。先ほどの青年はそれができずに去っていきました。

「では、お前もイエスさまを棄てて去っていくのか」と言われると、これははっきり断言しますが、それはできません。

イエスさまを知ったことの大切さは、他の何物にも換えることはできません。ただ問題は、他のものへの執着が完全に断ち切れないで、それらをまだ背中に一部載せたまま、イエスさまへの道を求めていることです。

パウロの場合

さてここで、そのようなもの一切を棄てて、敢然としてイエスさまに向かったひとりの人物につい

て、少し学んでみたいと思います。それはもちろんパウロです。

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ人への手紙　三・七～八）

パウロはこのように証しています。

ご承知のようにパウロは、血筋といい、才能といい、学識といい、この世での働きといい、生活態度といい、全く非の打ち所が無い、当時の模範的な青年でした。彼は、人々から将来を嘱目され、この世における最大の成功、富や名誉や権力を約束された、いわば当代随一のエリート中のエリートであったと言えるでしょう。

キリスト教徒を迫害することも自らの使命と考え、熱心であった彼が、まさにその目的、すなわちさらなるキリスト教徒迫害のための旅をする途中の出来事、ダマスコ門外でのイエスさまとの出会いが、彼の生き方を根本的に変えてしまったのです。一体何が彼の心の内に起き、彼の生き方をこのように変えてしまったのでしょうか。

彼は先ほどの「富める青年」と同じく、あるいはそれ以上に、世の人々の賞賛の的であったと思われます。先祖からの伝統に則った律法を守ることについては自らにも厳しく、品行方正でもあった彼

に対する人々の評価は等しく高く、彼を時代の若きリーダーとして重きを置いていたのでしょう。

しかし、そうした人々の賞賛や尊敬にも惑わされず、「本当の自分はそんなにエラいものではない」ということを自覚するだけの、曇らない正直な目を彼は持っていたのではないでしょうか。自分は、律法を守ることにかけては、人後に落ちない努力をしてきた。しかしその努力をいくら重ねても、それを達成したという満足感が自分には得られない。いやむしろ努力をすればするほど、自分が至らない事がますます身に沁みて明白となるばかりで、自分というものが信じられなくなるだけである。後になって彼は「ローマ人への手紙」の中で自分を顧みて述懐しています。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ人への手紙　七・一五）

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行なっています。（同　七・一八～一九）

私は、ほんとうにみじめな人間です。（同　七・二四）

パウロのこの告白は、もちろん彼がイエスさまと出会い、「罪」というものを知った後での告白で

す。しかしこれからも察せられるように、生来的に、彼は自分というものを厳しく見つめ、反省する性向を持っていたのでしょう。

彼は自身がいくら努力しても、律法が要求する水準に自分が到達できないことを、言い換えれば、自分の限界、というよりも人間というものの持つ限界を自覚していたのでしょう。それゆえ、世の人々がなんと彼を賞賛しようと、そんなものでは癒すことのできない淋しさと、不安と焦りを、常に心に感じていたのではないでしょうか。

「ステパノ事件」の衝撃

それに引き比べ、彼が迫害の対象としたキリスト教徒たちは、なんということでしょう。彼らの穏やかながらも確信に満ちた平安な態度は、一体どうしたことでしょう。彼等は一様に貧しく、教育も満足に受けていない、一般的に言えば、社会の中で尊ばれない人々でした。

しかし彼等は、パウロたちがいくら激しく迫害しても、返ってくるのは、慎み深い微笑みと希望に満ちた殉教の態度でした。それらに対してパウロは驚愕しながらも、初めのうちこそ、それによってなお一層の敵愾心を燃やしたのかもしれません。しかし人一倍感受性が強く純粋なパウロの心に、これらキリスト教徒の態度は、徐々にではあるにせよ、しかし確実に浸透していき、訴えていったことは想像に難くありません。

殊に彼に衝撃を与える事件が起こりました。それはステパノの殺害です。

イエス・キリストの福音を伝える、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノは捕らえられ、議会に引っ立てられました。しかし彼は恐れることなく、大祭司や長老、律法学者と大勢の民衆を前にして、彼らの非を指摘し、神の正義と自らの所信を堂々と表明しました。これに怒った聴衆はステパノを町の外に追い出して、石を投げて彼を打ち殺してしまいました。しかしステパノはこの時、何の抵抗も怒りも示さず、彼らが石を投げつけるのに静かに身を任せ、むしろ彼らのために赦しを、天にある主に祈り求めました。

「使徒の働き」七章五五節からお読みします。

しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。

「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。

こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。

「主イエスよ。私の霊をお受けください。」

そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。

「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」

こう言って、眠りについた。

サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。（使徒の働き　七・五五～八・一）

サウロすなわちパウロは、自らの手をもって石を投げつけることこそしませんでしたが、石を投げる人々の衣服の番をして、その側で見ていました。その彼の目に、殺されながらも自分を殺害する者のために、その罪の赦しを祈ったステパノの姿は、どのように映ったのでしょう。

彼は今まで自分が拠って立つ基盤が必ずしも確固たるものではなく、脆くも根本から揺らぎ始めるのを、確かに感じたのではないでしょうか。どうも自分が知らない世界があるらしい。しかもそれは「ホンモノ」らしい。そしてそれは、彼らが信奉するナザレ人イエスという人物に繋がっているらしい。

パウロの回心と災難

彼がダマスコ門外でイエスさまに出会った時、彼の心の中にはすでにそのような伏線があり、下地があったのではないでしょうか。そんな心境にあったパウロに、イエスさまのお言葉は、砂漠に水が吸われるように染み透っていきました。イエスさまは言われました。

起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、

また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。

わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。

（使徒の働き　二六・一六～一八）

こうして、イエスさまの選びの器として、「イエスは神の子である」と宣べ伝え始めたパウロですが、その彼の上に降りかかってきた迫害と災難は、ちょっと想像を絶するものではなかったかと思われます。

まず同僚たるパリサイ人から受けた嘲りと迫害。人間の怨念は、身内から出た反逆者や裏切り者に対して、より激しく燃え上がるのが普通です。昨日までわが陣営の最尖兵として貢献した、最も有力な味方が寝返った、とあっては守旧派・体制側の人たちの怒りはいかばかりであったか。陰に陽に迫害の手がパウロの身に伸びたことは明らかです。

またエルサレムの教会からも、容易には受け容れられなかったものと思われます。これまで自分たちをあれほど厳しく痛めつけ、猛威を振るった迫害者が、今日から急にわが兄弟といわれて、彼らは一体どんな顔をしたのでしょう。俄かには信じ難かったことでしょう。

また異邦人への使徒として立てられたパウロに対して、信者、未信者双方から、無知と無理解から



トルコ桔梗

すべての人は草、その栄光は、みな野の花のようだ。
主のいぶきがその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。
まことに、民は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。だが、私
たちの神のことばは永遠に立つ。　（イザヤ書　40・6~8）

来る、いろいろな誤解も投げつけられたことでしょう。石打の刑にも遭いました。その他にも、貧苦窮乏・病い・海難・毒蛇の難など、あらゆる災難が彼を襲いました。最後には、カイザリアで、そしてローマで、彼は獄に囚われの身となりました。

若い日の彼は、この世で望みうるすべてを持っていました。家柄血筋も才能も、学識も道徳も、すべて申し分ないものでした。彼はこの世で最高の富、名誉、地位、権力といったものを手にし得る可能性を、無限に持っていました。しかし彼はかつて持っていたこれらすべてを失いました。いや自らこれらを棄てました。そしてそれと引き替えに、そのような数々の災難を引き被ったのです。

これは一体どうしてでしょうか。

キリストの十字架

それはパウロの人生の目的が変わったからだ、と言えるのではないでしょうか。

かつて自分は、自分の力で自由の喜びを得ようとした。そのために律法の戒めを厳しく自分に課し、これを守りきることで自分を完成に導き、それによって律法からの解放、すなわち自由を得ようとした。しかし自分は、それが自分の力ではできないことを悟った。何故なら自分は、自分がしたいと思うことができないで、反対に、自分がしたくないことをしてしまう。自分はなんという罪深い人間だ——自分は不安と焦燥の中で、絶望の淵に沈んだ。

しかしキリストの十字架を仰いでこれを信じたときに、自分は十字架の上にキリストとともに死に、

そしてそれからは、キリストが自分のうちに生きるようになった。キリストが自分の生命となった。しかもそれは死ぬことのない永遠のいのちである。

そして自分は解放され自由となった。自由となった自分はキリストのために生きる。キリストによって生かされる。キリストと共に生きる。

このようにパウロは、人生の最終目的をキリスト・イエスの中に見出しました。彼は告白しています。

それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

（ピリピ人への手紙　三・八～十一）

「それは人にはできない」

以上パウロの生き方、そして彼の人生の目的を学んできました。

彼は自分自身の力では真の生き方はできないということを悟って、イエス・キリストに頼ることを知りました。それはイエス・キリストと父なる神以外には、他の何物にも頼らない、ということでした。したがって彼は、自分がすでに持っていたものすべてへの執着を棄てました。そのようなものに依り頼むことは、キリストの福音を受け容れることの妨害になる、と考えたからです。

ただ一寸注意を要するのは、ここで「他のものをすべて棄てた」というのは、形式的にあるいは物理的にものを放棄した、ということを言っているのではないということです。そうではなくて、そういうものに対する自分の執着を棄てた、もうそれに依り頼まない、ということです。

財産や学問や健康を棄てるということは、形式的に無一物になり、無学になり、病人になってしまえ、ということではありません。ただわれわれは、これらに執着し、これらをもって最上のものと見てはならないということなのです。これらのものが、われわれの最後の拠りどころであってはならないということなのです。

われわれの唯一の拠りどころである、イエスさまと父なる神様にすべてをお委せする時、神様はわれわれの財産も、われわれの知識も、われわれの健康も、すべてこれを御心にかなうようにお用いになります。われわれは、これらをすべて神様のもの、神様より預けられたものと信じ、神に対する畏れをもって使う。すなわち、われわれの心がそれらから離れて、常にイエスさま・神様に向かうことができればそれでよいのだ、ということです。

さあしかし、そうは恰好のよいことは言ったものの、パウロならともかく、われわれ凡人に、それ

が果たして容易に可能なことでしょうか。イエスさまはもちろん「一番」だけれども、それだけではない。実は「二番」も「三番」もあるのだ。そしてたまに「一番」を忘れて、「二番」や「三番」がそれに取って代わることもあるのだ。こんな思いをお持ちになることはありませんか。事実イエスさまのお弟子たちにとっても、それは難しいことのようでした。

イエスさまが、「金持ちが天国に入るのは、ラクダが針の穴を通るよりも難しい」と、弟子たちに言われた時、自ら無一物で、財産といわれる物は何ひとつ持っていなかったに等しい弟子たちが、驚いて口を揃えて言ったのです。

「それではだれが救われることができるのでしょう!」と。

人間は、たとえそれが財産でなくとも、何かそれに依り頼んでいるものを一つや二つは持っていて、その執着がなかなか断ち切れないものである。その意味では人間は誰もが「金持ち」なのだ、ということを弟子たちは知っていたのです。

「そんなことをおっしゃるなら、人間の中で救われるのは、誰も居なくなるじゃありませんか」

「それではだれが救われることができるのでしょう」弟子たちのこの質問は、彼らの絶望的な心の叫びでもありました。

イエスさまのそれに対するお答えは次のようなものでした。

イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

（マタイの福音書　一九・二六）

そうです！　それは人間の力ではできないことです。しかし神様にお願いし、おゆだねすると、神様はわれわれ自身ではできないそのことを成し遂げてくださる、と聖書は言っています。何という嬉しいニュースでしょう！

むすび

人間的なものに頼むところを多く持っていたにもかかわらずパウロは、それらをすべて捨てイエスさまに従いました。パウロにひき較べれば、人間的に頼むところなどは、何ひとつ持っていないに等しい者であるにもかかわらず、私自身は、この世のものへの執着をまだ完全に捨て切れず、「イエスさま第一」「イエスさまオンリー」の生活ができていません。

しかしそういう生き方ができるよう、そういう生き方に少しずつでも近づいて行けるよう祈り続けています。自分の力では何もできませんが、そうして祈っていると、イエスさまは私から余計なものを一つずつ取り除いて下さり、主の道へ導いて下さることが確信できますから感謝です。

私自身かえりみると、自分でも気がつかないうちに大分変えられたな、と思うことがあります。その一つにお酒があります。

「最近、サケが呑めなくなった」と言うと、口の悪い、古くからのノミ友達は、「それはトシの所為

だろう」とか「いやお前は、人の一生分のサケをもう呑んでしまったからだろう」と言ってからかいます。確かに私とサケとの付き合いは古く、長くそして多くて、サケ抜きの私の人生など考えられないくらいです。

自分で言うのも変ですが、私は自分のサケは「良いサケ」だと思っていました。サケに呑まれる訳ではないし、呑むと陽気になり、自分も楽しく、周りをも明るくする愉快なサケだと思っていました。またサケの効用は、お互いの殻を脱ぎ捨てホンネの話ができるし、サケの勢いを借りてシラフでは言い難いことも言える。事実サケのお蔭で、友情を深めたこともあったし、また商談がうまくいったことも経験しました。

しかしそれは、そう思い込んでいただけではないか。自分ではサケをうまく活用している積りが、本当はサケに囚われ、依存していたのではないか、と思えてきました。ひとりで大いに気炎を上げて吹きまくり、楽しんでいたのは自分だけで、周りが笑って付き合ってくれているのを、自分中心で周りが見えない私は、周りもそれを楽しんでいると、誤解していただけなのではないか。

ひとりで吹きまくり、量を過ごしたサケの後の「自己嫌悪」を通して、イエスさまは、サケを私から少しずつ遠ざけてくださっているように思えます。このことも主のご栄光を見る思いがして感謝であります。

ただ蛇足ながら誤解のないように願いますが、私は、状況の如何を問わず、ノむ相手の如何を問わず、またノむサケの種類を問わず、完全にサケを断ったというわけではありません。のめり込むことなく、適度に楽しむサケは主もお許し下さると思いますので、どうか仲間外れにしないで頂ければ幸

いです。

それでは最後にみことばをひとつ拝読して、終わらせて頂きたいとおもいます。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

（ピリピ人への手紙　三・十二～十四）

このパウロのように、目標を目ざして一心に走り続けることができればいいなと思います。そのためにも、そのことができますようにと、これからも主に祈っていきたいと念じております。

（二〇〇〇年十一月）

生きるにしても、死ぬにしても

それは、私がどういうばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。　（ピリピ人への手紙　1・20〜21）

はじめに

われらが愛する一兄は去る一月十二日天に召されました。発病を知らされてから召されるまで、半年足らずという短い時間でした。最後に残されたこの短い時間を彼がどのように生きそしてどのように死を迎えたかということは、まだ皆さんの記憶に新しいところでありますが、それは、信者・未信者を問わず、多くの人に深い感動を呼び起こし、見る人・聞く人それぞれに、勇気と希望を与えるものでした。

私自身は、生前の兄弟とはそんなに長いお付き合いではなく、また個人的に特に親しいお交わりを頂いた訳ではありませんが、そのような者にも、兄弟の「生と死」は強烈な印象と深い感銘をもたらしました。そしてこのことを通して、真の信仰の持つ意味を改めて考える機会を与えて頂きました。

死に向かい合うとき

人は死に直面するとき、一体どのような態度をとるのか。殊にそれまで健康を保ってきた人が、あるとき突然に自分の死期が目前に迫っていることを知らされた場合、人は一体どのような態度でこれを受けるのでしょうか。

よく知られたエピソードがあります。それは禅宗か何かの、古今東西稀なる名僧といわれる人でし

た。彼が不治の病にかかりました。主治医も周りの人たちも、彼がすでに悟りの奥義に達していてどのような重大事でも平静に受け止め、泰然として身を処することができると信じていました。そこで彼の命がもう旦夕に迫っていることが彼に告げられました。するとどうでしょう。彼の生きる気力はまたたく間に萎えてしまい、自分の不運を嘆きながら、医師が予測した死期よりもずっと早くに死を迎えたということです。

幕末に吉田松陰という人がいました。彼は明治維新を果たした志士たちに大きな影響を与えた偉大な思想家といわれる人ですが、獄に囚われの身となり、そして死罪を言い渡されました。しかし彼は少しも取り乱すことなく従容として死についたそうですが、当然のことながら、彼の心中には悲しみや諦めこそあっても、そこに「喜び」に類するものは一切なかったものと思われます。

昨年私の親しい友人が亡くなったのは、癌の発病後一年のことでした。この間彼はこの事実をひたすら外部から隠し、自分独りで苦悩を背負い、そして静かに死んでいきました。

人が死を迎える態様はこのように人さまざまですが、これらの死に共通することは、そこには「喜び」や「希望」や「感謝」というものが全く見られないことです。

I兄が自分の死の病を告げられたとき、それをどのように心に受け止められたのか、詳しくはよく存じませんが、「それって、死ぬということですか?」と聞き返された一言からも充分察せられるように、それは思いもよらぬ出来事、まさに晴天の霹靂とでもいうべきものだったのでしょう。

これまで健康にも恵まれ、男にとってはまさに働き盛りともいえるまだ五十歳の若さで、しかも家

長としてあるいは会社経営者として大きな責任を背負って、今まさにその責任の遂行に、自分の全力を尽くして走っているその真っ最中なのに、なぜ、どうして神様はこのようなことを自分に起こされるのか。神様はこの自分をお見捨てになるのか。そのような疑問が雲のように、次から次へと湧き起こってきたのではないか、と想像されます。そしてそのような状況から何とかして脱出したいと願い、神の助けを、何とかして神様の助けをと、全身全霊で祈られたに違いありません。

わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。

（詩篇　二二篇一節）

どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。

（同十一節）

私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついています。あなたは私を死のちりの上に置かれます。

（同十四～十五節）

主よ。あなたは、遠く離れないでください。私の力よ、急いで私を助けてください。

（同十九節）

私を救ってください。獅子の口から、野牛の角から。（同二二節）

このような悲鳴にも近い、文字通り必死の願いが、兄弟の祈りの口からはき出されたのではないでしょうか。また他方からは、この時とばかり攻めてくる、サタンの激しい攻撃にも見舞われたのではないかと思われます。

「あなたのように神と御子イエス・キリストを信じる信仰を持ち、これまで従順に礼拝をしっかり守ってきた人に、ましてそんなに健康で未だそんなに若いのに、よりにもよってどうしてこんなことが起こるのですか。ネ、解ったでしょう。世の中には神も仏もあるもんですか。」とサタンは兄弟の耳元で囁き、ヨブの妻のように

《それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。》（ヨブ記二・九）とそそのかしたこともあったでしょう。

ところが、兄弟の姿からは、承るところによると、この世での最期に近づくにつれ、そのような神様に対する不信感はおろか焦りや絶望も一切見られず、ただそこには、そこはかとない平安が満ち満ちていたということです。一体兄弟のうえに何が起ったのでしょうか。

生きることはキリスト、死ぬことも益

さきほど開きました詩篇二二篇をもう一度開きたいと思います。二一節をご参照下さい。詩篇の作者は、二二篇の二一節前半までは、「私を救ってください。（おそろしい）獅子の口から、野牛の角から」と、取り乱したように神様に訴えています。ところがこれに反し、一行空けたその次は突如打って変わって、あたかも今までの悩みや苦しみを忘れたかのように、確信と希望に満ちた口調で、高らかに謳っています。

あなたは私に答えてくださいます。私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆のなかで、あなたを賛美しましょう　（同　二一節後半～二二節）

詩篇の作者に、この一行の空白の間に起こったと同じことが、おそらく1兄弟の上にも起こされたのでしょう。それはなんだったのでしょうか。

その詮索はしばらく措きまして、ここでパウロの人生観を少し学んでみたいと思います。使徒パウロの人生観ないし死生観を一言で言い表すなら、それは、

《私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。》（ピリピ人への手紙一・二一）ということになるのではないでしょうか。

しかしこのような人生観をパウロが持つに至ったのは彼の後半生のことで、初めからあったわけではありません。イエスさまに出会う前のパウロにとっての人生は、律法に従い律法を守るべく、自分の力のかぎり、ただ盲目的に歩み続けることでした。それは先に希望の光を見出せないまま、暗やみに空しくさ迷う毎日でした。自分がいくら努力をしても、目指す目的地はかえって遠く離れるばかりで、そこに到着する前に「死」が待ち受けていました。「死」は彼にとっては恐怖の破滅を意味していました。

そんな彼の人生観が一変したのは、彼がダマスコ門外でイエスさまに出会い、イエスさまの贖いによる救いと復活を信じた、その時からでした。

イエスさまに出会う前と後の彼の人生を、この世的に見比べるなら、パウロの人生はイエスさまと出会ってから後の方が、この世の苦難ははるかに大きかったでしょう。若い頃の彼は、家柄にも才能にも学識にも恵まれ、時代のエリート中のエリートとして世間からもて囃されていました。

ところが、彼の後半生は、昔の仲間からは裏切り者と呼ばれ、エルサレムの教会からは警戒されながら、未知の世界への伝道活動を通じて、数限りない迫害と災難に見舞われ、人生の辛酸を嘗め尽くしました。これら数々の苦しい経験を経て、パウロという人は、人生の言い難い喚きと悲しみを知る人、に変えられていったのであります。

しかしながら、この人生の悲嘆と苦悩を知り尽くしたパウロの口から発するものは、世間に対する呪いや恨み言ではなく、それは人生への讃歌でした。彼はそれを現すのに、「力強い」という言葉を繰り返し使っています。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。

確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。

私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神はその保証として御霊を下さいました。

そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。たしかに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。

そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

（コリント人への手紙　第二　五・一～九）

生きるにしても、死ぬにしても

パウロは言います。この世、すなわち現世はもろくはかなく、いずれ壊れてしまう。人間は現世にあって、重荷を負ってその苦しみにうめいている。しかしそれにもかかわらず私たちはいつも心強いのだ。彼がここで繰り返し言う「心強い」という言葉は、原語では「勇気または希望または信頼をもって満ちている心の状態」を意味するそうです。すなわち、パウロの心は、勇気に満ち、希望に満ち、そして主に対する信頼に満ちている、というわけです。なぜそんなに心強いのかというと、それは、「自分の中で本当に生きているものはキリスト」だからであります。

自分はキリストを信じたとき、キリストとともに十字架の上に死んだ。いま生きているのはもはや自分ではなくて、自分の中に生きておられるキリストである。神様は自分の中にキリストの御霊を宿してくださった。これが自分の真の生命である。たとい自分の肉体は壊れても、自分に宿ったキリストの生命は天の住まいに永遠に生きる。

この世にあるかぎり、この肉を帯びた自分は罪にまみれ、邪悪な思いにさいなまれ、いつも心の平安を失いがちである。だが、自分の中に宿されたキリストはいつも変わらぬ真理であり、いつも新鮮な生命であり、いつも溢れる喜びである。肉なる自分も、ふと心を静めてキリストに帰って行けば、そこにいつでも平安を見出すことができる。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のために

ご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ人への手紙　二・二〇）

このようにイエスさまによって創り変えられたパウロは、それからの人生の目的をイエス・キリストに見出しました。自分がこれまで追い求めてきたのは、この世における勝利であった。しかしこの世における勝利、すなわち富や財産、地位や権力、あるいは肉体の健康でさえ、これらをいくら追い求めても決して満足させられることはない。否むしろ、それらを追い求めれば求めるほどかえって、不満や不安が心の中に積み増され失望するだけである。

ところが、自分の生きる目的はキリストだ、ということになって以来物事がはっきりしてきた。自分が生きることによってなすべきは、イエス・キリストの御名が崇められ御栄えが上がることである。イエス・キリストの福音をできるだけ多くの人々に伝え、一人でも多くの人が信仰の道に入ることである。そして自分がそのための器として用いられるためには、自分の生き方そのものがイエスさまを証し、イエスさまに喜ばれるものでなければならない。パウロはそのように考えそして実行しました。

それは、私がどういうばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさがあらわされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。

（ピリピ人への手紙　一・二〇）

パウロはここで「生きるにしても、死ぬにしても」と言っています。キリストのすばらしさが現わされ、キリストの御名が上がるなら、彼にとっては自分の生死などは問題でない、とパウロは言うのです。否むしろ、先程の聖句にもありましたように、彼は肉体を離れて主のみもとにいる方がよいと思っています。何故なら、「死」は来世への入り口であるからです。「死」は虚無の世界への破滅ではなくて、永遠の生命への入り口であるからです。

神様が自分の中に宿して下さったキリストの御霊、これは現世から来世にわたる永遠の生命である。だからわれわれは喜び勇んで「死」を迎えることができる。われわれが「死」をそういう意味で克服し、来世の希望をもって喜んで「死の門」を通過することによって、キリストの御名が崇められる。

キリストを信じる者は死に当面しても、このように平安であり、希望に満ちているということを、イエスさまをすでに知っている人にも、イエスさまをまだ知らない人にも、多くの人に示すことができる。したがってパウロは言ったのです、「私にとっては、死ぬこともまた益です」と。

このようにパウロにとっては、「肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、自分の念願とするところは、主に喜ばれること」であり、その意味で、パウロにとっては、「生きることはキリスト、死ぬこともまた益」であったのです。

神の応答

このようなパウロの人生観、希望と喜びと感謝に満ちた人生観が、彼のものであるのはもちろんで

すが、といってこれは彼自身が独力で創りあげたものかというと、どうもそうではないように思われます。

ダマスコ門外でのイエスさまとの出会いによって、十字架上の贖いと復活を直ちに信じ、「イエスは神の子キリストである」と宣べ伝え始めたパウロですが、その後襲って来た数々の迫害や災難を通して、筆舌に尽くせないほどの苦難に見舞われたとき、彼とても人間ですから、最初の信仰も時にはくずおれそうになったこともあったことでしょう。そんな危機に遭うたびに、彼は必死になって神様に祈ったに違いありません。

彼の必死の祈りは神様のお聞きになるところとなり、神様はそれにお応えくださいました。そして終には、このように希望と喜びと感謝に満ちた、確固たる人生観に達するまで、神様はパウロをお導きになったのではないでしょうか。

先ほどお読みした詩篇二三篇をもう一度開きたいと思いますが、二一節の中にある空白の一行の間には一体何が起こったのか。それは詩篇の作者が、死の床から発する悲鳴にも似た必死の祈りに、突然神様がお応えくださったのではないでしょうか。神様の応答を確信した作者は、その後はまるで別人のように、それまでの口調とは一転して、死の悲鳴は神への賛美と変わったのです。そこには死に勝利した者がもつ平安があります。

同じように神様はI兄弟の祈りにも応えて下さいました。神様はI兄弟におっしゃいました。

「もうよい、お前はもう充分苦しんだ。もう苦しまなくてもよい。安心して私のところに来なさい」

人は、悲しみや苦しみに遭ったとき、一番よく神をみることができる、と言われます。その悲しみや苦しみが、自分の智慧や力によっても、また他の人の智慧や力によっても癒すことができず、それらにもはや頼ることができないと知ったとき、人はただ神を見上げるしかないのです。

人は、悲しみや苦しみがあって初めて、天を仰ぎ、神様を求めるようになります。言い換えれば、神の国に人を近づけるものは悲しみや苦しみである、と言うことができます。イエスさまはおっしゃっています。悲しむ人は幸いです。いま飢えている人、いま泣いている人、いま苦しんでいる人、それらの人もみな幸いです。何故ならこれらの人は、天の御国を約束され、永遠のいのちによって慰められるから、と。

天の御国に行くには、貧しい悲しい、また苦しい道を通っていかなければなりません。そうした道を通って初めて、天国の門を見ることができるのです。だからイエスさまは、そういう人たちを幸福者とおっしゃいます。

しかも、イエスさまがここでおっしゃっている幸福は、死後の世界における幸福のことだけをおっしゃっているのではありません。この世にいる時から、この人たちはもう幸福者なのです。何故なら、いのちの喜びに満ちた世界が、自分を待ち受けているという希望があるからです。現実に、この世の悲しみや苦しみが消えうせるわけではありません。しかし、そんな悲しみや苦しみに耐え忍んでなお余りある喜びと感謝が、この希望によって湧いてくるのではないでしょうか。

そういう意味で、この世で人が受ける悲しみや苦しみは、これもまた神様から与えられるもの、神

様の恩恵であります。それを思うとき、私たちは人生の悲しみや苦しみそのものをも感謝することができるのではないでしょうか。

それぱかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ人への手紙　五・三～五）

病者の祈り

人生の悲しみや苦しみを、この希望によって、それらを喜びや感謝に変えることができた人、この人たちの生き方は、その生き方そのものがイエスさまの証しであります。

病床にあって、身動きさえ自分の思いのままにならない日々を過ごしている重病者でも、イエスさまの立派な証し人となります。長い病気をしていると、つい気持ちが挫けて、一体自分の人生って何なんだろう、何のために自分はこの世に生きているんだろう、などと弱気になることがあります。

そんな時に、「自分はキリストを信じている、自分にとって生きるのはキリストである。」だから、「永遠のいのちの約束と天国への導きを、喜び感謝しつつ、希望を持って日々生きている」という風

に変えられた病人は、その存在そのものが生けるキリストの証しです。

キリストへの絶対の信仰によって、焦りや苛立ちが無く、静かであることができ、平安と希望をもって生きている病者の姿は、周りの人々に真の信仰の力を深く印象づけることでしょう。わが病を通して、人々は、キリストの生命、キリストの恩恵はこういうものだと認め、キリストの御名をほめたたえることになる。そうすれば、地上における自分の生の目的は充分達せられる。たとえ身動きできない病床にあっても、このままで自分の生きていることの意味があるのだ。

事実私どもの周囲にも、健康を害して病床に就くことを余儀なくされている兄弟や姉妹がおられます。しかしその方々が、病魔に負けることなく、いつも晴れ晴れとして、感謝して希望の日々を送っておられる姿は、本当に大きな恵みであるなと、つくづくそう思わされます。イエス・キリストの福音を伝えるのに、体が自由に使え、何でもできるはずの健常者よりも、これらの方々の方が、遥かに優れた有能な伝道者であることを思わされます。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからです。（コリント人への手紙　第二　十二・九～一〇）

I兄弟も、死の病の床にあって、多くの人に希望と喜びの福音を伝えました。

発病後二か月、昨年十月に兄弟は次のように証しされています。

「私は今、特別に悲観的になっているわけではありません。あと何日、生きられるかわかりませんが、それは皆さまも一緒です。それよりも今、この病気を宣告されてから、毎日毎日が私にとっては本当にすばらしい一日一日であり、いままで五十年間生きてきた中で、これほど充実した二ヶ月はありませんでした。新しい一日一日が、すべてが美しく感動的であり、目に見えるもの、耳に聞こえるものすべてが、新しい体験でした。また、家族と過ごす、残された時間も、今まで仕事をしていれば到底ありえなかったような、中身の濃い時間を過ごさせていただいています。心から感謝をしています」。

死の病の床にありながら、こんなに透明に、こんなに新鮮に、そしてこんなに充実して、兄弟が送られた感謝の日々は、人々の感動を呼ばずには措きませんでした。その感動は着実に、イエス・キリストと父なる神への賛美へと移って行きました。そしてそれは、これからもなお将来にわたって、さらに大きな実を結んでいくであろうことは間違いありません。

兄弟ご自身は、主のすばらしい福音をもっと多くの人々に宣べ伝えることができなかったと、悔やんでおられました。しかしそんなことはありません。

I兄弟は、ご自分の思いを遥かに超えて、神様のお用いになるところとなり、神様の器として十二分にお働きになり、神と御子イエス・キリストの御名を高められました。この世において、神の戦士

として、余るほどの戦果を挙げられ、神に善しとされ、I兄弟は晴れて神の御国へ凱旋なさいました。まことに感謝であります。

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。（ペテロの手紙　第一　四・二）

このみことばの通り、I兄弟は、地上に残された時を、神のみこころのためのみに過ごされたのです。

むすび

「私がI兄弟だったら……」

と思うときがあります。私だったら、兄弟のように、人生の最期をあのように平安で希望に満ちて迎え、そして送ることができただろうか、と自問することがあります。正直言って自信がありません。しかし心配はしていません。それは自分の力でできることではないことが分かっているからです。神様の恵みとイエスさまのお力を頂くこと無しには、それは自分にはできないことが分かっています。そういう訳ですから、すべてを主にゆだね、それらの恩恵にあずかれるように、これからも祈り続ける日々でありたいと念じております。

あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。

（ヨハネの福音書　一六・三三）

（二〇〇一年二月）

神のやしない

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。　（エペソ人への手紙　2・8）

神からの賜物

表記の聖句が言っている通り、人が「救われる」ということは、人間の、自分自身の力によって成るものではなくて、神様がお与えくださる賜物です。「救い」は、神様の人間に対する一方的な愛から来る神様の恵み、恩恵であります。しかし神様が人間をどのようにお救いになるかとなると、その方法はみな一様ではなくて、人によってケース　バイ　ケース異なるように思われます。

ある人は、何か特別な事件がきっかけとなって、神様・イエスさまと劇的な出会いを果たし、「ああ自分は救われた！」との確信を直ちに得て、感謝の涙をはらはらと流される。一方においてそのようなドラマティックな場面に遭遇するかと思うと、他方では、

「自分は信仰の道に入って久しいのに未だ本当の救いの確信がない。自分は救われていないのではないか、いや、自分はこれからもずっと救われないのではないだろうか」

という疑問を持つ人もいます。こういう人たちにとって、先ほどのようなケースを目の当たりにしたり、あるいはその方の「お証し」などから、劇的な回心のシーンに触れたりすると、たいへん淡ましくもあります。その陰で、それに引き替えこの自分は……とついついうな垂れてしまい、自分だけが蚊帳の外に置かれているような寂しさと、一種のコンプレックスに陥ってしまうことがあります。

それではこれらの人は「救われて」いないのかと言うと、そんなことはないように思います。昨日と今日という短期間では気が付かないかもしれませんが、その期間をもう少し長くとって、いわゆる

「使用前」と「使用後」を較べてみると、その間に確実に変化している自分を見出すはずです。

神様は人間をお救いになるのに、大きく分けて二つの方法をお取りになるように思われます。その一つは神様が人から何かを「取り去られる」ことによって、他の一つは神様が人の信仰を「養われる」という方法によってであります。

神の「取り去り」

第一の方法は、「取り去り」であります。神様は人間がとても大切にしているものを、人間から無理やり奪い取り去られることによって、信仰に導かれるケースです。人間が大切にしているもの、それは人さまざまでしょう。

人によっては、それは自分が所有している財産でありましょう。またある人にとっては、それは最愛の夫や妻、あるいは目に入れても痛くないほど可愛い子供や孫でありましょう。さらにある人が大事にしているものは、自分の肉体の健康ということもあるでしょう。これだけは失いたくない、これを失えばその時はもう自分の身の破滅だ、と思い込んでいるもの。そのようなものの一つや二つは、人間なら誰でも持っているのではないでしょうか。

そのように人間が大切にしているものを、神様はある時突然にその人から取り去られることがあります。当然のことながら人は悲嘆のどん底に沈み、涙します。しかしそのことによって神様は、人間の目から埃や塵のような不純なものを取り除いてくださるのです。不純物が取り除かれて曇りのない

目で改めて自分を見直した時、人は自分の本当の姿をそこに見ます。そこに居るのは、傲慢で貪欲で、しかも無力な自分です。そして人は初めてその時、目を神に向けるのです。

このケースでは、人は辛くて苦しくて悲しい道をいっとき通らなければなりません。しかしその代りこのような場合、人は比較的すんなりと神様に出会え、信仰の道に入ることができるのではないでしょうか。しかも神様は、この「取り去り」によって人間に与えられた試練をいつまでも捨て置かれず、同時に、この試練からの脱出の道も備えてくださることを約束されています。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（コリント人への手紙　第一　十・十三）

人の「言い分」

しかしながら、これといって特に顕著な試練というべきものを経験しない第二のケースの場合は、一体どういうことになるのでしょうか。今日皆さまとともに少し考えてみたいのは、この第二のケースです。

人間は、日常生活が平穏無事であると、神様のことを真剣に考える、ということは普通少ないのではないでしょうか。たまに人から神様の話を聞かされても、それは自分には遠い空のことのように受け止め、なかなか本気で耳を傾けようとしません。

その理由はいろいろあると思いますが、今そのいくつかを拾い出して、彼らの「言い分」を聞いてみますと、次のようなことになるのでしょうか。

第一は、「自分は神様を必要とするほど弱い人間ではない。神だ、仏だと言って宗教に走るのは、あれは弱い人間のすることだ」というものです。

自分はこれまでの生涯を振り返っても、もちろん他人の世話になることはあっても、基本的には自分の努力で生き抜いてきた。人は努力をすれば大抵のことはできる。これからもその方針を変えるつもりはない。今さら神様の助けなど必要としない。これはそういう人たちのグループです。

しかしこの人たちは、本当に自分が強いと、本気で思っているのでしょうか。

本当の自分はそんなに強いものではない、ということを一番よく知っているのは、その人自身なのではないでしょうか。多少なりとも自分を冷静に見つめることのできる人なら、実際のところ本当の自分は、「欲求不満と劣等感という実」を「プライドという氷砂糖」でくるんだだけの、壊れやすいガラス細工のような存在、であることに気がついているのではないでしょうか。自分ではとっくに気がついていながら、ただそのことを認めたくないだけなのではないでしょうか。一見強気の風を装いながら、内実は自分の中の「ストレス箱」という倉庫に、毎日毎日ストレスを溜め込み、その結果心

身ともに、日々弱りつつある自分を意識しているのは、他ならぬ本人自身なのではないでしょうか。聖書も、彼らのことを次のように一刀両断にして言っています。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。（ヨハネの黙示録　三・十七）

「罪びと？」

第二の理由は、「自分は罪人（つみびと）ではない」というものです。

自分はそんな悪いことはしてきた覚えがない。これまでの人生を真面目にこつこつと生きてきた。それは人間だから完全無欠とは言わないが、人に後ろ指をさされるようなことも、法律に触れるような犯罪もおかしたことはない。それなのに「罪人」などと呼ばれるのは、自分としては甚だ不本意である、とこのようにおっしゃる人たちのグループです。

それではお訊ねしますが、あなたはこれまで、人を憎んだことや人に嫉妬したことが一度としてありませんか。そんな人は居ないはずです。

神様が、この宇宙と世界を創造された時、神様はこの世界に住むすべての生物をお造りになりました。そして最後に、これらすべてを支配するものとして人間をお造りになりました。しかも、他とは

異なる特別の愛情をもって、人間を神ご自身に似た形にお造りになりました。そして人間は神様の庇護のもと、すべてを神様にゆだねて、平和に、永遠の生を楽しんでいました。

ところがある日、蛇の形をとった悪魔の誘惑に負けた最初の人・アダムとエバは、神様の言いつけに逆らって、神様の道をはずれて、自分独自の道を歩むようになりました。その時から人間に「自我」と「欲望」が生まれました。それ以来、人間は自我と欲望を追求するようになり、今日に至っています。

「世界は自分中心にある。そして全ては自分の利益のために」と言って自我と欲望を追い求めていくと、その結果は勢い、他人に対する「敵対心」と、そしてそれの裏返しである「嫉妬心」となって現れてきます。これらは傲慢心と劣等感の反映でもあります。別の言葉で言い換えると、自分の心が神に対しても、他人に対しても「愛」のない状態のことです。

これが人間の罪なのです。聖書がいう根本的な罪とは、個々の行為ではなく、人が持つ心の状態ないし性質そのものを言うのです。この罪の性質が人間に入った結果どうなったか。人間はその罰として死ななければならなくなった。すなわち、人間は「死」というものを免れないことになったのです。

人間の罪、その根源は人間が神様に背いたことに発しています。そして人間は何びとといえども、この罪の埒外に置かれることはありません。これは残念ながら厳然とした事実です。聖書は、この根源から発する罪が具体的にはどのような形で現れるかを、次のように言っています。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だ

くみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人とも思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

（ローマ人への手紙　一・二九～三一）

さあ、ここで聖書があげている罪の具体例について、これらの一つとして自分には覚えがないと言える人は、果たして居られるでしょうか。

「Leave me alone !」

第三は、「自分は現状満足している、問題は何もない。だから放っておいて欲しい」という、いわゆる "Leave me alone !" タイプの人たちであります。

自分は目下、外においては仕事をバリバリやり、内においては家族にも恵まれ、特にこれといって問題となるようなことがある訳ではない。幸い健康にも恵まれている。言ってみれば、すべて順調だ。「神様」もいいけれど、今はとてもそんなことに拘らっていられる心境ではない。

一言で言うと、この世において最も幸せな部類に属する人たちであります。ご同慶の至りと言ってもよいでしょう。しかし、彼らがややもすると陥りがちな落とし穴があります。それは、幸せな今日が、明日へそして明後日へ、といつまでも続いていくかのように錯覚することです。人は順境にある時「変化」を、とりわけ悪い方向への変化を認めたがらないものです。人は人、自分だけは大丈夫だ、

とついつい希望的に物事を見てしまいがちです。

しかし世の中一寸先は闇、一体何が起こるか判りません。何も起こらないかも知れません。ただ一つ確実に言えることは、これだけはどんな人にも必ず起こるという「変化」があることです。それは「死」です。人間は、前述のごとく、神様の前に罪を犯した時以来、何人といえども「死」を免れることができなくなりました。しかも「死」は、いつその人を襲うか分かりません。それは何年、何十年先かも知れませんが、明日かも知れません。いや今日起こるかも知れないのです。これは、年齢の老若だけで決まるものではありません。使徒ヤコブは、人のいのちを次のように言っています。

聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

（ヤコブの手紙　四・十三～十四）

人はいつ自分を襲ってくるか判らない「死」に対して、無防備でいてよいものでしょうか。

人間の死は、単に肉体の死だけで終わりになるというものではありません。神様のみことばである聖書は、肉体の死後にもずっと永遠に続く世界のあることを明示しています。そして罪ある人間（これはすべての人間に当てはまるのですが）の死後行き着く先は、その人が生前に自分の罪を認めそしてそれを神様に赦して頂かないかぎり、永遠の滅びの世界です。聖書はこれを「ゲヘナ」と呼んでい

ます。

だから人間は、自分を死後このゲヘナに投げ込むことのできる方、すなわち神様を敬い畏れなければならないのです。イエスさまはおっしゃっています。

からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。

（マタイの福音書　十・二八）

「宗教は嫌い！」

人間が神様のところになかなか来たがらない理由の第四は、「自分は宗教が嫌いだ」というものです。

宗教というものほど嫌なものはない。宗教は、平和だとか愛だとかを旗印に上げながら、その実昔からやっていることと言えば、争いであり金儲けであるに過ぎない。事実世界の歴史を振り返っても、宗教の名のもとに幾多の殺戮が行われ、そのためどれだけ無辜の命が失われたことか。またその陰で宗教家・聖職者と言われる人たちが、信者から金を吸い上げ、それによってどれほどこの世の栄華を誇ってきたことか。このように宗教を毛嫌いする人たちのグループです。

ただここで彼らが「宗教」と呼んでいるものは、もっと正確に言うなら、「宗教団体」という言葉に置き換えることができるのではないでしょうか。すなわち「宗教」と「宗教団体」という二つの言葉がほぼ同義語として用いられているように思われます。その意味では、「宗教」と「信仰」は違いません。両者は全く異なるものです。そして人間にとって真に必要なことは、「宗教」に入ることではありません。「信仰」を持つことです。

では「宗教」と「信仰」はどう違うのか。「宗教」と「信仰」の違いを端的に言うならば、それは神様と人間との間に媒介者が居るか、居ないかということです。言い換えると、神様と人間の間を取り持つ第三者が居るか、それとも両者の間にはいかなる介在者もなく、人間が直接神様に結びついているかどうか、であります。

「宗教」には、法王とか、牧師とか僧侶とか、教祖とかが存在します。しかもそれは会社組織のように、いくつかの階級からなるピラミッド型組織によって運営されていて、人が神様と関係を持つ時は、必ず彼らの媒介ないし取次ぎを必要とします。それに引き替え、人間は神様の前にすべて平等であり、両者の関係は、その間に何びとの介在をも必要とせず、人間は一人ひとりが神様と直接の交渉を持つ、というのが「信仰」であります。

「それなら」、とあるいは人はおっしゃるかも知れません。

「分かった、信仰とは神様と人間の一対一の関係、言い換えれば唯一の神と一個の人間との直接かつ個別の関係なんだな。それならば、人は家でただ独りでひっそりと、神様と個別に交わればいいの

であって、なぜ君たちのキリスト集会のように、大勢の信者が群れ集まるのか。これでは他のキリスト教の教会とどこが異なるのか。本当のところは集会という名の教会ではないのか」と。

しかしそれは違います。当キリスト集会は、創造主である唯一の神様をお父様とし、イエス・キリストを首（かしら）とする家族であります。家族ですから、お互いに集まりそして交わりを持ちます。それは家族として当然のことであり、また必要なことであります。

言い換えると、これは、制度とか組織とか教義とか形式といった、そのようなもので作り上げた人為的な団体ではありません。神様をお父様として、イエスさまを首（かしら）として敬い、そして兄弟姉妹が互いに愛し合う、まさに家族・ファミリーであります。さらに言い換えれば、家族の一員一員の愛による霊的な結合体であります。

イエスさまは、このような家族としての直接の繋がりを、ぶどうの木に譬えておっしゃっています。

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。（ヨハネの福音書　十五・一）

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（同　十五・五）

聖書にある初代教会とは、このように直接的な自由な集まりでした。それが時代を経るにしたがい、

人が制度を作り組織化するようになって、今日のような「キリスト教会」ができました。これは人間が作り上げたものであって、聖書から出たものではありません。当キリスト集会は、聖書にある初代教会にならって、ただ純粋にイエス・キリストの福音を信じる信仰を持つ人たちの集まりです。

神のやしない

以上、人が神様の許に来たがらない、彼らの「言い分」四点について考えてみました。

人は、自分の言い分をそのように主張しながらも、このように反論されると、「うん、そう言われれば、それはそれで一理はあるな」と心の中の一部では、頷いていることも確かです。

常日頃はこの世を生きることに精一杯の人の心にも、時としてポッカリと口をあける空白、一種の空しさが訪れることがあります。神様はそのような機会を活用して、人の目が「真理」に向くようにざなわれます。日常の生活上の体験を通して、あるいは周りの兄弟姉妹との交わりを通して、さらには何かの形で聖書のみことばに触れる機会を通して、人を信仰の道へと導かれます。

まさに神様のやしないであります。パウロは言っています。

いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。

（使徒の働き　二〇・三二）

しかし多くの場合、人はまだ一歩踏み出すだけの決心がつかず、信仰の門の外でためらいがちに立ち止まっているのが実状です。門の中ではイエスさまが両手を差し伸べて、招いてくださっているのですが、人はその門を自分の手で叩かないかぎり、そのことに気がつきません。

幸いにも門を叩いて中に入った人はみな、そこに待ち構えておられたイエスさまの御手が、しっかりと自分を捉えてくださることを知るようになるのです。人によってこれには何の差別もありません。

すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。

（ローマ人への手紙　三・二二）

第一の方法すなわち神様の「取り去り」によってであろうと、第二の方法すなわち「神様のやしない」によってであろうといずれにしても、自ら求めて門の中に入った人は、誰彼の差別なしに神の国に招き入れられるのは事実です。ただ中に入ってからの歩む道筋、言い換えればそれからの行程は、人によってそれぞれ少し異なるようです。

ある人は中に入った途端、あたかも高いビルの狭間の暗い谷間から、広々とした大高原に抜け出たような大いなる解放感をもって、広い天を見上げることができます。まさに別世界に導き入れられた思いに溢れます。しかしある人にとっては、見上げてみると確かに周りのビルディングは低くなって、その分大空の面積は大きくなっているが、それほど顕著に変わったという気はしない。言ってみれば、

丸の内のビル街から神田界隈に移った程度の変化だ、と思われるかもしれません。またある人には、全然景色が変わらない、「丸の内」のままだ、ということかもしれません。神の国の門を叩いて入ってはみたものの、今までとそれほど変わった実感が持てない。本当に自分は救われたのだろうか、という疑問が湧いてくることがあります。

しかし焦ることはないと思います。その人も確実に救われているのです。神様は、その人にイエス・キリストの聖霊を宿され、聖霊がその人に最適の方法でもって、その人の信仰をお導きになります。

親が子を養い育てるように、神様は一人ひとりの信仰を養われます。確かに短期間では、その成長は目立たないかも知れません。しかしある日、人から「あんた、この頃随分顔つきが変わったね」と言われて、「えっ」と驚くことがあります。また以前の自分なら度を失って慌てふためいただろう、と思われる出来事に出会ってもそんなことはなく、自分の心が実に平安で落着いているのを感じて、かえって驚くことがあります。

イエスさまの御霊は、どんな動機であれ自ら門を叩いて入ってきた人には、それぞれ個別に対応されます。ある人には一気に、またある人には少しずつゆっくりと、その人に最も相応しい方法で、その信仰を育んでくださるのです。

「神様のやしない」はこのように、人が救われた後にこそ本格的に始められる、と言うべきかも知れません。

人が信仰の力を受ける秘訣は、信仰生活を長く継続することにある、ということが分かります。信仰生活とは、主として次の三つを実行することだと言われます。すなわち、

（1）聖書を繰り返し読むこと、
（2）主に心からの祈りを捧げること、そして
（3）兄弟姉妹との交わりを広く深くすること、

この三つであります。これらのことを日夜倦まずたゆまず続けていくと、たとえゆっくりした歩みでも、自分でも気がつかない間に信仰の力が増し加わり、あらゆることを主に委ね、心は平安で、いつも感謝し、希望をもって喜んでいる……そんな風に自分が変えられていくような予感がします。これがイエス・キリストの聖霊の働き、すなわち神のやしないというものではないでしょうか。

「たたきなさい」

以上「救い」について考えてきました。

「救い」は神様からの一方的な恩恵によって、それを望む者には誰にでも与えられる。その与えられる方法は、人によってさまざまに異なることはあるが、「救い」が与えられることについては、人によって何の差別もない、ということを学んできました。

確かに「救い」は誰彼の差別なく、誰にでも平等に与えられるものです。ただし、ここにたった一つだけ条件があります。それは、人が神の国の門の前に立ったとき、その門を自分の意志で叩くこと

であります。「門をたたく」とはなにか。それは自分の意志で、イエスさまの福音を信じることであります。

話は先ほどの、人間が神様に背き罪を犯したことに戻りますが、神様は正義を何よりも重んじられる方ですから、この人間の罪を赦すことはおできにならない。それにもかかわらず神様は人間を、お造りになった時と同様、今でも限りなく愛しておられる。

神様は人間に「悔い改めていつでも戻って来い」とおっしゃっている。しかし自我と欲望に目のくらんだ人間は、死の破滅に向かうばかりで、神に立ち返ることができない。それでも人間を愛される余り神様は、それを放っておくことができない。そこで神様は、今から約二千年前、ひとり子イエス・キリストを人間の世界に送られ、そしてすべての人間の罪をイエスさまの一身に負わされ、人間の身代わりとしてイエスさまを十字架の死におつけになった。

これによって神様の正義は全うされ、神様は人間を赦すことがおできになる。言い換えれば、イエスさまのこの犠牲の死によって、人間は何の代価を払うこともなく、ただこのことを信じるだけで、その罪が赦され、人間はその罪から解放される。

一方、十字架の上に死なれたイエスさまは、これも神様のご意志により、三日後に甦られた。これを「復活」という。この「イエスさまの犠牲の死」とそれに続く「復活」の事実を信じた人間は、もはや「死」からも解放される。何故なら、イエスさまが自分のために、自分の身代わりとなって死なれたことを信じた瞬間、イエスさまと自分は霊的に一体化される。

昨日までの罪に汚れた自分は、イエスさまと共に葬られた。そしてイエスさまの復活とともにこの自分は、永遠のいのちを与えられ、新しく生まれ変わった。新しく生まれ変わった自分は、この世で肉体が滅んだ後も変わることなく、天国に復活されたイエスさまと共に永遠に生きる。

これがイエスさまの福音です。使徒パウロは次のように言っています。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

（ローマ人への手紙　六・四～八）

「救われる」ためのたった一つの条件は、このイエス・キリストの福音を、自らの意志で信じることであります。

しかし、ここでちょっと違和感をお持ちになるかもしれません。というのは、一般に「信じる」という言葉は、次のような場合に用いられるのが普通ではないでしょうか。すなわち、いくつかの情報

が自分の頭の中に積み重なってきて、それらが自分がこれまでに持っている知識や経験に照らし合わせて疑いがないとき、それが一つの事実となって頭に定着する。普通は、これが「信じる」ということでしょう。それは、どちらかと言えば、受身の行為であり、頭（理性）の作用です。

ところが、福音を信じる場合はそれとは少し異なるように思います。この場合、信じる対象が、これまでに自分が持っている知識や経験で計るにはちょっと大きすぎるのです。したがって、自分の目で見た事実や耳で聞いた情報をいくら積み重ねていっても、このことは信じられません。福音を信じるのは、自らの意志による決断です。受身でいくら待っていてもこのことは成りません。自分の罪を認めて、その赦しを求めて、自ら一歩踏み出すことです。

「福音を信じること」――それは受身ではなく積極的な意志の行為であり、頭（理性）ではなく心（魂）の作用であります。

このように自らの意志で、自らの手をもって信仰の門を叩く。このことさえできれば、後はもうすべてを神様の御手に委ねて、イエスさまの聖霊の導きに任せるだけで、「救い」への道は備えられるのであります。イエスさま自身おっしゃっています。

わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

（ルカの福音書　十一・九～十）

ところで私たちの周囲には、どうか救われて欲しいと、日々祈られている方々が多くおられます。殊に当集会の姉妹方のご主人方で、まだ救われておられない方が、多くの兄弟姉妹の長年の祈りの課題となっているケースが多いように見受けられます。

そこでそのようなご亭主方に一言申し上げたいと思うのですが、「いちど奥さんに騙されてみては如何ですか」

騙されるというのは、誰しもあまり愉快なことではないかもしれませんが、あなたを心から愛しておられる奥様になら、一生の間で一度くらい、たとえ騙されたって人生の帳尻は合うのではないでしょうか。長年の奥様の祈りに応えて、騙されたつもりで一歩踏み出してみてはいかがでしょう。門の前で、ああでもない、こうでもないなどと考え込んで突っ立っていないで、思い切って自分の手で門を叩いて入ってみられたらいかがでしょう。

入ってみれば、決して後悔はされないでしょう。後悔するどころか、「ああ騙されてよかった」と、きっとそうお思いになることでしょう。これは、かつて同じ経験をした者の一人として申し上げられることであります。「経験者は語る」であります。

また救われて欲しいのは、ご亭主方ばかりではありません。家族の中でまだ救われていない妻、両

親、兄弟、子供、女婿、息子の嫁たち。あなた方にも言います。あなた方一人ひとりの救いが、ご家族によって日々祈られています。同じようにお勧めします。どうかあなたの救いを祈るご家族の祈りに応えて、あなた自身の意志で、自ら一歩を踏み出してください。

最後に、イエスさまのお言葉です。

わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。

（ヨハネの福音書　十・九）

このイエスさまの門を、一人でも多くの人が自分の手で叩いて入っていかれますよう、これからも皆さんとともに祈り続けていきたいと願っております。

（二〇〇一年六月）

エレミヤの信仰

望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。　（ローマ人への手紙　12・12）

はじめに

人がこの世を生きることは「ままならぬ」と言いますか、なかなか人の願い通りにはいかないようであります。

人がこの世を生きていく過程には、思いもよらぬ悲運や不幸に見舞われることがあります。信仰をかたく守って、慎み深く日々神様に従って歩んでいるキリスト者ならその埒外にあることができるかというと、決してそうではなく、時にはむしろより大きな災難や不幸に、それも繰り返し襲われることがあります。

そうかと思うと他方では、したい放題この世で悪徳の限りをつくして世間からは顔を背けられているにもかかわらず、とくに制裁を受けるでもなく、一見幸せにこの世を渡っている人もあります。人生ってなんて不公平なんだろう、神様は一体何を考えていらっしゃるのだろう、とつい呟きたくなることがあります。「人生は不可解」とか「人生は不条理」と言われる所以であります。

エレミヤの召命

聖書の時代にもこのような事はごく当たり前にあったようです。その一つに、預言者エレミヤに次のようなケースがあります。エレミヤは自分の身に起こされる不可解な出来事に振りかねて、ついに

神様に食ってかかりました。

主よ。私があなたと論じても、あなたのほうが正しいのです。それでも、さばきについて、一つのことを私はあなたにお聞きしたいのです。なぜ、悪者の道は栄え、裏切りを働く者が、みな安らかなのですか。

（エレミヤ書　十二・一）

いつまで、この地は喪に服し、すべての畑の青草は枯れているのでしょうか。そこに住む者たちの悪のために、家畜も鳥も取り去られています。人々は、「彼は私たちの最期を見ない。」と言っているのです。

（同　十二・四）

エレミヤという人は、どちらかと言うとおとなしくて内気の人だったようです。

エレミヤがまだ青年時代、預言者として神様から召し出された時も、彼は「自分はまだ若くて、弁舌も立たないので」と言って最初はご辞退しています。そのため神様は彼を預言者として立たせるために、何度も繰り返し彼を励ましたり、時には威したりすかしたりしなければなりませんでした。その辺のやりとりを見てみますと、

そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」すると主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすど

んな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。」（エレミヤ書　一・六～八）

「さあ、あなたは腰に帯を締め、立ち上がって、わたしがあなたに命じることをみな語れ。彼らの顔におびえるな。さもないと、わたしはあなたを彼らの面前で打ち砕く。」（同　一・一七）

エレミヤの挫折

こうして漸くにして預言者として立ったエレミヤですが、彼の最初の仕事は、北方からの異民族の襲来を預言することでした。それはユダの国民が偶像礼拝と道徳的悪事に耽ったために神様からの罰として与えられることでした。

すると主は私に仰せられた。「わざわいが、北からこの地の全住民の上に、降りかかる。今、わたしは北のすべての王国の民に、呼びかけているからだ。――主のみ告げ。――彼らは来て、エルサレムの門の入口と、周囲のすべての城壁と、ユダのすべての町に向かって、それぞれの王座を設ける。しかし、わたしは、彼らのすべての悪にさばきを下す。彼らはわたしを捨てて、ほかの神々にいけにえをささげ、自分の手で造った物を拝んだからだ。」

（エレミヤ書　一・十四～十六）

しかし結果的にはこの預言は外れました。北からの異民族は来るには来て遠く南方のエジプトの国境までをも襲ったのですが、そのルートを海岸寄りに取ったため、山地にあるユダ国は往復とも素通りしてしまったのです。これを見て国民はエレミヤを嘲り笑いました。

彼らは主を否んでこう言った。「主がなんだ。わざわいは私たちを襲わない。剣もききんも、私たちは、見はしない。預言者たちは風になり、みことばは彼らのうちに無い。彼らはこのようになる。」

（同　五・十二～十三）

エレミヤはこの不可解な出来事を疑いそして苦しみました。彼にしてみれば、自分の不名誉な立場は忍ぶとしても、神様の権威がこの事によって疑われるのは何としても我慢できない。自分は結果的にそのことに一役買ってしまった、どうしよう。どうしてこんなことになったんだろう。それは彼にはついに分からずじまいでした。いずれにせよ若いエレミヤは預言者としての第一歩で失敗してしまったのです。

彼の第二の挫折は、それから五年ほどしてやってきました。時のヨシア王は主の目にかなうことを行って、主の宮の修理をさせた際、一つの「律法の書」が発見されたのです。その書は、いま聖書に

ある「申命記」であったと言われています。その書の内容を知ったヨシア王は、自分の衣を引き裂いて現状を大いに悔い改め、宗教改革に乗り出しました。その経緯が列王記に記されてあります。

そのとき、大祭司ヒルキヤは書記シャファンに、「私は主の宮で律法の書を見つけました。」と言って、その書物をシャファンに渡したので、彼はそれを読んだ。（列王記　第二　二二・八）

ついで、書記シャファンは王に告げて、言った。「祭司ヒルキヤが私に一つの書物を渡してくれました。」そして、シャファンは王の前でそれを読み上げた。王は律法の書のことばを聞いたとき、自分の衣を裂いた。（同　二二・十～十一）

それから、王は柱のわきに立ち、主の前に契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、精神を尽くして、主の命令と、あかしと、おきてを守り、この書物にしるされているこの契約のことばを実行することを誓った。民もみな、この契約に加わった。（同　二三・三）

この発見された「律法の書」に関して、エレミヤにも神のみことばが直接下されました。

主からエレミヤにあったみことばは、こうである。「この契約のことばを聞け。これをユダの人とエルサレムの住民に語って、彼らに言え。イスラエルの神、主は、こう仰せられる。この契

約のことばを聞かない者は、のろわれよ。これは、わたしがあなたがたの先祖をエジプトの国、鉄の炉から連れ出した日に、『わたしの声に聞き従い、すべてわたしがあなたがたに命ずるように、それを行え。そうすれば、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。』と言って、彼らに命じたものだ。」

（エレミヤ書十一・一～四）

このように主の命を受けたエレミヤは、ヨシア王の宗教改革を大いに助け、この契約のことば、すなわち発見された「律法の書」の定めを守るべく、国中を説いて回りました。

しかしながらこのことによってエレミヤは、他ならぬ自分の故郷アナトテの人たちの恨みを買ってしまい、とうとう命まで狙われることになりました（エレミヤ書十一章参照）。事態の思わぬ発展に驚いたエレミヤは、冒頭にお読みしたように神様に食って掛かったのであります。

「なぜ悪者の道は栄え、裏切りを働く者が、みな安らかなのですか」と。

エレミヤが故郷の人たちの恨みを買ったのにはこんな事情があります。発見された律法の書に基づくヨシア王の宗教改革の一つに、礼拝の統一があります。それまで地方各地に宮を設けてそれぞれがバラバラで行っていた地方礼拝が、偶像礼拝に陥る原因であるとしてこれを廃止し、礼拝をエルサレムの神殿に統一しようとしたのです。困ったのは、地方の祭司たちでした。しかも悪いことに、エレミヤの父親ヒルキヤは、その昔ダビデの祭司を務めた名門エブヤタルの流れをくむ、地元アナトテの祭司でした。

郷土の裏切り者、親不孝者……人々からエレミヤに投げつけられる非難は、さぞ憎しみのこもったものであったと思われます。

エレミヤの抗議

危機一髪のところでなんとか殺害を免れたエレミヤですが、彼の心はおさまりません。神様の命令ゆえに実行した正義の結果がこれだ。一体どうなっているのですか、と彼は神様に食って掛かったのです。

これに対する神様のお答えは、予想に反するものでした。神様のお答えは次のようなものでした。

あなたは徒歩の人たちと走っても疲れるのに、どうして騎馬の人と競走できよう。あなたは平穏な地で安心して過ごしているのに、どうしてヨルダンの密林で過ごせよう。

（エレミヤ書　十二・五）

お前は、徒歩の者と一緒に走って疲れたなどと泣き言を言うようならば、どうして今後騎馬の人と競走ができると思うか。お前は、平安な地に居て安穏をむさぼっているようでは、どうしてヨルダンの厳しい密林の中で生きて行けると思うか、「しっかりしろ」と頭から叱りつけるように、神様はお答えになりました。

神様はエレミヤの思い詰めた質問には、まともに何のお答えも下さらなくて、代わりに「これしきのことでへこたれて何とするか。もっと大きな将来の災難に備えて、自分の日常の信仰生活により一層励め」と叱咤激励されたのです。

エレミヤはその神の言葉に素直に従いました。もともと彼は神様に従順な僕でした。彼が神様に食ってかかるといっても、それは神様の正義をいささかも疑ってのことではありません。どんなに自分には分からないこと、納得できないことがあっても、神様は常に絶対的に正しい。そのことを十二分に承知した上で、彼の疑問は発しています。

> 主よ。私があなたと論じても、あなたのほうが正しいのです。それでも、さばきについて、一つのことを私はあなたにお聞きしたいのです。（同　十二・一）

エレミヤの神様への絶対の信頼と深い敬虔さが、この言い方から読み取れます。

「涙の預言者」

エレミヤは「悲しみの預言者」とも「涙の預言者」とも言われます。

彼にはこの後も次々と新たな悲運が襲います。そしてついに紀元前六世紀初め、第二回「バビロン捕囚」によりユダの国は滅び、彼はエジプトに移され、その地で不運の生涯を閉じたと言われていま

す。彼の一生は悲運の連続でした。彼はそんな悲運に遭遇するたびに、泣き言を言いました。恨み言も言いました。敵を憎みもしました。

ああ、悲しいことだ。私の母が私を産んだので、私は国中の争いの相手、けんかの相手となっている。私は貸したことも、借りたこともないのに、みな、私をのろっている。（同十五・十）

彼らは言った。「さあ、私たちは計画を立ててエレミヤを倒そう。祭司から律法が、智恵ある者からはかりごとが、預言者からことばが滅びうせることはないはずだから。さあ、舌で彼を打ち、彼のことばにはどれにも耳を傾けまい」

主よ。私に耳を傾け、私と争う者の声を聞いてください。善に悪を報いてよいでしょうか。まことに彼らは、私のいのちを取ろうとして穴を掘ったのです。私があなたの御前に立って、彼らに対するあなたの憤りをやめていただき、彼らについて良いことを語ったことを、覚えてください。それゆえ、彼らの子らをききんに渡し、彼らを剣で殺してください。妻たちは子を失い、また、やもめになり、夫たちは虐殺されて死に、若い男たちは戦いで剣に殺されますように。

（同　十八・十八～二二）

エレミヤの嘆き方も訴え方も相当なものですね。これからも察せられるように、エレミヤは決して人格円満な聖人君子ではなく、また物事に動じない英雄豪傑でもなかったようです。エレミヤは、悲

しい時には泣き、口惜しい時には怒り、神様に訴えもしました。

彼は自分の弱みや敵に対する憎しみを隠しませんでした。これらは彼の欠点といえば欠点ですが、それだから彼を見下げるかというとそれは逆で、むしろ彼のそういった性格の中に自分たちの持っている共通の数々の弱点を見出して、私などはエレミヤという人に格別な親しみを覚えます。

絶対の信頼

しかしここで注目すべきことは、そのように心弱くまた感情の起伏の激しいエレミヤでしたが、そんなエレミヤの中に、彼の全生涯を貫いて確固として揺るがなかった、一本の太い芯があったことです。それは、主への絶対の信頼と完全な服従でした。

彼は、生涯どんな苦難に出会っても、どんなに不可解な出来事に遭遇しても、それらは主から出たものとして受け取り、主への信頼を片時も失いませんでした。彼は、苦しみながら、疑いながら、また泣きながらでも主に従い、主が定められた道を歩み続け、やむことがありませんでした。エレミヤの主に対する賛美は、いつ聞いても心打たれます。

私をいやしてください。主よ。そうすれば、私はいえましょう。私をお救いください。そうすれば、私は救われます。あなたこそ、私の賛美だからです。ああ、彼らは私に言っています。「主のことばはどこへいったのか。さあ、それを来させよ。」しかし、私は、あなたに従う牧者と

なることを、避けたことはありません。私は、いやされない日を望んだこともありません。あなたは、私のくちびるから出るものは、あなたの御前にあるのをご存知です。（同　十七・十四～十六）

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。（同　十五・十六）

エレミヤにはこのように神様に対する絶対的な信頼があったからこそ、彼はどんな苦難にも耐えることができました。神様に対する信頼とは、神様に対する愛にほかなりません。このことは、その後時代を経てパウロが、「愛」について語ったことを思い起こさせます。

それは、《愛は、すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます》（コリント人への手紙　第一　十三・七）です。エレミヤの生きた生き方が、このパウロの言葉によって、よりよくわかるような気がします。

「ラザロの復活」

話は変わりますが、先般「スイス喜びの集い」に参加することができました。時差の関係からか旧

が覚めたのは、まだ空が明けやらぬ早朝でした。もう眠りに戻れそうにもないので、手探りで持参したカセットテープの一つを取り出し、家族の眠りを妨げないようヘッドホーンで聞き始めました。

それは、ヨハネの福音書十一章、あの有名な「ラザロの復活」をテーマとしたベック兄のメッセージでした。

「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」と言って兄弟ラザロの死を嘆くマルタとマリヤの姉妹に、イエスさまはおっしゃいました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

そして、すでに死後四日も経っていたラザロが甦った記事です。

ベック兄は、これから以下七つの点の学びを取り次いでおられました。

(1) イエスさまがマルタ・マリヤ姉妹を愛されたと同じく、われわれも一人ひとり個人的に主に愛されている。誰に対しても主は無関心ではない。

(2) 主は、すべてご存知で、すべてのことについて目標を持っておられる。

(3) 人間が悩むと主も共に悩まれる。そして主はわれわれの悩みを変えてくださる。

(4) われわれの祈りは必ずきかれる。主はわれわれの祈りを必ず聞き届けてくださる。

(5) 主はわれわれの考える通りには物事を叶えてくださらない。それは人間のわがままを防ぐた

め。主は意識的に苦難を通してわれわれを吟味される。

(6) 主は最善の時に応えてくださる。

(7) 主のお応えは、われわれの期待するものより、常にはるかに良い。

このように話されたあとベック兄はまとめとして、次の二点をあげておられました。

(1) 主はわれわれに理解できないことをたくさん許しておられる。だから起ること全部を主の所為にすればよい。そうすればそれは祈りの材料となり、見方も変わる。どうしてか、何故か考えても訳が分からなくなる。試練は、これを通して主のご栄光が現されるため。主にだけ依り頼むために、苦しむこと、悩むことが必要だ。

(2) 信じる者の信仰を試し、増し加えるために、主は理解し難いことをお許しになる。苦しみがなければ成長もない。苦しみがなければ、真剣に祈ろうとしない。すると主はお応えになることができない。主に委ね、主に信頼すれば必ず神の栄光を見る。

以上がスイスアルプス山麓の早朝、ベック兄を通して頂いた学びであります。

このベック兄のメッセージを聞いていて、私はエレミヤの生涯と彼の生き方を思い浮かべていました。これは、エレミヤの生き方そのものではないか、と。

主に対する絶対の信頼。主は私を愛してくださっている。私の祈りは必ずきかれる。主は最善の時に、私の期待をはるかに超えて、私の祈りを聞き届けてくださる。この確信こそ、エレミヤが生涯ず

っと抱き続けたものではなかったでしょうか。この確信があったればこそエレミヤは、彼の生涯でどんなに苦しいことに会っても、どんなに不可解なことに出会っても、それらをすべて主からのものと受け止め、主にゆだね、主に信頼して、それら一つひとつを耐え抜き忍び通すことができたのではないでしょうか。

一方振り返ってわが身を省みるとどうでしょうか。私などは、このエレミヤの信仰と引き比べて自分の信仰がなんて生ぬるいのかと、つくづく思わされます。

自分がお祈りするとき、果たしてどれだけ真剣に祈っているのか。この祈りは主によって必ず聞き届けられると、果たして百パーセントの確信と期待をもって祈っているのか。そうではなくて、こんなお願いをしても叶えてくださるのは、いくらイエスさまだって無理だろう。厳しい現実や困難な現状についつい目が奪われるあまり、主に期待することを中途で弱めてしまう、ないしは止めてしまう、そんな傾向が自分の心の中にないと言えるか。

「そんなの信仰じゃない！」

これもスイスでの話ですが、ある夜集会が終わった後、六七人の兄弟姉妹とお交わりを持つことができました。一人ひとりが自分の信仰経験や信仰の課題などをお証ししたり、またそれらについての互いの反応があったりして、お交わりは深夜にまで及びました。

私は、家族の救いについてお証しさせていただきました。まだ救われていない息子たちとその家族の救いについてでした。《主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます》（使徒の働き　十六・三一）というみ約束を頼りに、もうここ何年も彼らの救いを祈っているけれど、一向にその兆候が現れない。

殊に息子の一人は、内臓のひとつを私から提供を受け順調に快復していることもあって、そのことに感謝し、親子の関係や嫁姑の関係は、この世的に見れば特に親密円満と言えるのに、信仰の話となるとどうもお互いに腹蔵なく語ることができない。息子の負い目につけ込むようなことをすまい、と自制しているのか。いやそんなことを考えること自体、自分の心に高ぶりや卑しい恩着せがましさがあるのであって、もっとフランクにイエスさまを伝えるべきではないか……。

グダグダとああでもないこうでもないと、私は自問自答しながら話していました。

「そんなの信仰じゃない！」ある姉妹の言葉に私は頭をガツンと一撃打たれる思いでした。

もちろんその姉妹は、その通りストレートにおっしゃったのではなく、また私ないし私の信仰を非難する意図も毛頭お持ちではなかったと思います。ただ姉妹は、私の「泣き言」が終わるのを待って、静かな口調でご自分の信仰体験を話し始められただけでした。自分もかつては自分が何かできる者、何者かであると思ったことがあった。しかし今は、自分は何もできないことが分かっている。だから主に頼るしかない、主に祈るしかほか私には何もできないのです、と。そうすると主は必ずきいてくださるのです、とも。

これを聞くだけでも、スイスまで来た甲斐があったと、私は思いました。

なお余談ながらこの夜のお交わりには後日談があります。実は、英国へ留学中でお友達同士の若い女性お二人が、その前日現地参加され、このお交わりに同席されておりました。お一人は「集会」の姉妹ですが、もうお一人は「集会」が初めての方でした。その方は、自己紹介のあとは最後までただ静かに耳を傾けられている様子でした。しかしその夜部屋に引きあげた時、彼女はイエスさまを受け入れたいとの思いに導かれ、その旨同室の姉妹に打ち明けました。翌日は雨の日曜日でしたが、急遽調えられた近隣のホテルのバスルームで彼女は洗礼を受けました。

「主は生きて働いておられる」——このことを改めて思わされたことでした。

むすび

最後に、使徒パウロの祈りをひとつお読みします。

これはパウロがエペソにある兄弟たちのために主に祈った祈りですが、私たちもこの祈りを自分のものとしてとらえ、パウロの口に合わせて、自分自身のために真剣に祈りたいと思います。

こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あな

たがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。

アーメン。

（エペソ人への手紙　三・十四～二一）

（二〇〇一年七月）

初めの愛へ

アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。
「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。」　（ヨハネの黙示録　3・14～16）

はじめに

今回「お証し」をするようにと言われました時まず私の胸をよぎったのは、「ああ、イエスさまはよくご覧になっているんだな」ということでした。

最近の自分の信仰がやや行き詰まりの状態になっていて、焦れば焦るほどそこから抜け出せない自分を、なんとなく感じているところだったからです。だから「お証し」の場を与えてくださるのだ。そしてこの「お証し」を通して、いま一度自分自身を省み、皆さんの前に告白し、自分が神様の前に塵や灰に等しいものに過ぎないことを、あらためて知るための機会にせよとの御心ではないかと思ったからです。

信仰に導かれるまで

私がこの道に導かれたのは今から五、六年前のことです。そのころ家内が集会の姉妹に誘われ、吉祥寺の学びの会やあちこちの家庭集会に集い始めていました。家の中に「光よあれ」をはじめその種の本やカセット・テープが氾濫しだし、時には私もそれらを手にとることもありました。私が「聖書」というものを手にしたのもそのときが初めてでした。それまでの六十年近い人生を「宗教」や「信仰」から全く程遠いところに過ごした自分が、それらに少しでも関心を持ったのは、やはり自分の心の中

に何か満たされぬ思いがわだかまっていたからだと思います。

その前の年のことでした。ある銀行の役員を務めていた私は、次回の株主総会で役員を退任することがきまりました。「ついに来るものが来たか」という思いの反面、「なぜこの時期にこの自分が……」と意外の念にもうたれ、心の中に不満の気持ちが渦巻くのを覚えました。

まあ「仕事人間」といいますか、それまでの自分は仕事仕事で、自分と家族の生活においては私の仕事が最優先に置かれ、またそうすることが自分および家族のしあわせに繋がる、と思い込んでおりました。そしていつも、もっと「いい仕事」がしたい、「いい仕事」をするにはもっと「上」に行かなければと、常に上方志向の会社人間でした。しかもそんな思いはその時点まではある程度望みどおりに叶えられ、順調ともいうべきキャリヤーを社内では重ねてきていました。自分の前には上に向かう階段が無限に続いていると信じていた私の目の前に、突如その階段が断ち切られ、替わってそこには奈落の底が口を開けている——そんな感じでした。

しかし、少し時をおいて冷静になって考えれば、それは自分自身を実体以上に自分が買かぶっていただけのことであって、他人にとっては別に何ということはない、ごくありふれた人生の一断片に過ぎないことが分かってきました。同時に、自分より先に会社を去って行った同僚の人たちのことを思いやる気持ちのゆとりも、遅まきながら与えられました。

何十人もいた同期生でその時会社に残っていたのはもう数名だけとなっていました。多くの同僚が先に去って行った時、自分はどれだけの同情をもって彼らのことを思いやったのか。厳しい競争社会の中では、それもやむを得ないことと割り切ってしまい、突き放してしまう冷淡な自分。仕事という

ものはそれにかける意欲と能力と努力の差によって結果は大きく異なってくるもの、と自分の力を過信する傲慢な自分。そのくせ他人が少しでも自分よりも良い成果を上げると、口先では「なにあんなものはたいしたことない」と貶めながら、その実心の中では相手に嫉妬して、劣等感にこり固まっている自分——そんな自分の等身大の姿がよく見えてきました。

もう一つ仕事のことで言うならば、それだけの仕事人間であった私が、当時自分のやっている仕事そのものに、ある種の限界と空しさみたいなものを感じていたのも、一面の事実でした。

第二次世界大戦敗戦の年に私は小学校に入りました。戦後の極端な窮乏を経験した私たち、当時の日本人の最大の望みは、この貧困からの脱出すなわち物質的に豊かになることでした。そんな思いは、日本を経済大国・貿易立国への道に駆り立てました。その結果日本全体を生産工場と化すほどにまで日本は「モノづくり」に精を出し、またでき上がった製品の海外輸出を奨励しました。

当時どれだけ日本人が「モノづくり」に頑張ったかということで、一例をあげますと……。

私は、一九六〇年代の後半と、それからほぼ十年間をおいて七〇年代後半の二度、北米に勤務しました。最初の勤務の時、クルマは米国車が圧倒的に優勢で、日本製自動車は北米のハイウエイで米国車に伍して長時間高速度で走行可能かどうか危ぶまれており、事実、日本製のクルマを現地で見ることも稀でした。ところが二度目の駐在の時は、その間にオイルショックが起こったこともあり、高性能かつ燃費効率抜群の日本車は引く手あまたで、オーダーしてからクルマを手に入れるまで六ヶ月は当たり前というほどの人気でした。

私は「モノづくり」には直接従事しませんでしたが、金融や外国為替の面から、それらの生産や貿易推進のお手伝いをすることができました。

ところが世の中にモノが出まわり需要が一巡すると、「モノづくり」のためにはもうおカネがあまりいらなくなりました。そこで「カネ余り現象」が生じてきました。すると人々は「モノづくり」のためではなく、今度は「カネづくり」のためにおカネを投入するようになりました。いわゆる「バブル経済」といわれた時代、人々はさらに大きなおカネを求めて狂ったようにおカネを使いました。

そんな中で銀行は、それを抑えるどころかそれに手を貸し、それを助長しました。そして終に今日に見るように、銀行は自らの破滅をも招いてしまいました。銀行員の一人としてそんなただ中に居た私は、あまりにも移ろいやすい世の中の動きや人の心の動き、それに自分の現にやっていることに空しさを覚えてきました。そして、揺るぎのない何かしっかりしたもの、不動の基準となるもの、安心して頼れる心の拠りどころを、無意識に求めはじめていたようです。

主はそんな私を憐れんで下さいました。主は私たち夫婦を、銀行時代私の尊敬する先輩の奥さまであったK姉妹の手を通して、イエスさまのみもとへ導いて下さいました。

試練——息子の発病

それからしばらくの間はただ嬉しくて、また物珍しくて、兄弟姉妹のお交わりの中に入れて頂き、

言ってみれば無我夢中の日々を喜んで過ごしていました。

約半年ほど経った頃だったと思います。それまで平安だと信じ切っていたわが家に異変が起こってきました。その一つが長男の健康問題でした。結婚して広島に勤務していた長男が定期検診で腎臓の異常を指摘され、精密検査の結果「嚢胞腎」と診断されました。現代の医学では未だ完治の実例のない難病だということも知らされました。

ただし、外から新たに腎臓を移植するという方法はあり、近年わが国でも成功例が着実に積み重ねられている、ということも知らされました。お先真っ暗だったわが家にとって、これは朗報でした。一条の希望の光が差し込む思いでした。息子から、私の腎臓の一つを提供してもらえるかどうか遠慮勝ちに打診を受けた時は、もう私の心は決まっていました。

「ああいいよ」、と私の返事があまりにもアッサリしていたので、「おやじは本当にワカッて言っているのか」とかえって息子の方が途惑ったそうです。

今から思えば、その時から主がぴったりと傍に居て下さいました。迷うこともなく、何の不安を覚えることもなく、すべてを平安と感謝のうちに主は導いて下さいました。

お医者さまの説明は、概して人を悲観的にさせるものが多かったと思います。たとい親子間であっても、希望すれば誰にでもできるというものではないこと、何か月もかけて気が遠くなるほどいくつもの検査を経た上でないと適性かどうか判定できないこと、またたとい移植手術が無事終わったとしてもそれはまだ全行程の三〇%をクリアーしたに過ぎず、その後に拒絶反応との熾烈な戦いが控えて

いること等々でした。

しかし、主がともに付いていてくださる私はただそれを聞き流すだけで、気にとめようともしませんでした。「主がそれを成し遂げてくださる」との確信を頂いていたからです。

ただ一つのことだけが私の気にかかっていました。それは創造主たる神様から与えられた身体、しかもイエスさまを信じたことによって聖霊の宮とされたこの肉体を、人間が勝手につくり変えてよいものか。クローン人間も取り沙汰されている今日、何処までが神の領域で、何処までなら人間に許される範囲なのか。

お医者さまでもある兄弟方やまた最終的にはベック兄のご意見をお聞きし、この事が主の道にはずれるものではないとの確信を得ることができました。それに、医師のどんな悲観的な説明にも動揺することなく、先に希望の光を見出している自分の心のありかたそのものが、イエスさまがサポートして私に付き添っていてくださる何よりの証左でした。

主の恵み

この時私は初めて、多くの兄弟姉妹方が私たちのためにしてくださった「祈り」のありがたさを知りました。それとともに、今回のこの事が起こる前に、私たちをイエスさまの処へ導いておいて下さった主の温かいご計画と恵みに、心からの感謝を捧げました。

もしイエスさまへの信仰なかりせば今回のことはどうであったか。迫って来る苦難におびえながら、

不安と緊張の持続に疲れ果て、それでも何とか自分の努力で結果的に乗り切ったとしても、この時私たちが経験したような心からの平安と希望と感謝は、到底手にすることはできなかったのではないか。それを思うとき、改めて神様の愛のご計画のすばらしさを覚えるのであります。

それで手術の結果とその後の経過はどうだったのか、ということでありますが、それについてひとつの小さなエピソードがございます。以前にもお証ししたことで「またか」と思われるかもしれませんが、私どもにとっては忘れ難い主の恵みでありますので、それをもう一度お話することによってこの質問へのご報告とさせて頂きます。

それは晩秋のある休日でした。私は思い立って一人で山に登りました。山といっても大した登山ではなく近郊の高尾山でした。昔から海も山も好きでよく行っておりましたが、この時は手術後初めての山行きでした。腎臓の移植手術からはもう半年以上経っていましたが、何となく用心する気持ちがあったりして、その日まで控えておりました。

秋晴れの好天に勇気づけられて、私はいつもの稲荷山コースから頂上に向かいました。思ったより快調に足が進みましたので、予定を変え、高尾山のひとつ先の城山まで足をのばすことにしました。

頂上に着いたのは正午前でしたが、大勢の登山客で賑わっていました。快晴で富士山もよく見えていたので記念に写真でも撮っておこうと、リュックからカメラを取り出して誰かにシャッターを押してもらおうと、ちょうど反対側から登って来た青年に何気なく声をかけました。そして驚きました。

なんとその青年は、私の腎臓の片割れの息子だったのです。

「何やってんだお前！」向こうも「何やってんの！」と。

今日山へ行くこともお互いに知らず、出発点も登山コースも全く異なった二人が、事前に打ち合わせがあったとしてもあの雑踏の中で出会うのは難しいだろうに、それがシャッターを頼みにふと声をかけたのがわが息子だったとは……。

まあこういう次第で、二人はお互いの無事と順調な快復を確認し合ったわけでありますが、このことも考えてみれば単なる偶然などではなく、息子の発病から快復までの一連の過程に、神様が一応のピリオッドを打ってくださったものと感謝でした。

初めの愛へ

あれから何年か経って今があるのですが、あの時と較べて今の自分を見ると、果たして自分の信仰はあれからどれだけ成長したのか。どうも一向に成長のあとが見られない、というのが正直な感想です。

確かに当時よりも今の方が聖書を読む量も増え、祈りの頻度も時間も増えました。また、この世のかつての友人や仲間たちとの交際が、どちらからともなく遠のき薄らいでいくのに反比例して、集会の兄弟姉妹方とのお交わりが親密となり、それを心から楽しみ待ち望んでいる自分がそこに居ることも事実です。しかし何か違うのです。「何と違うのか」と問われれば若干答えに窮するのですが、敢

えて言うなら「ホンモノと違う」ということになりましょうか。

イエスさまを十字架の上に死なせたのは、他の誰でもないこの自分だと、本気で自分は信じているか。それほどまでの「罪人（つみびと）」である自分を、頭でなく心で本当に自覚しているか。そのイエスさまに自分は個人的に愛されていることを実感しているか。イエスさまに感謝して、イエスさまを心から愛しているか。

先に天に召されたリャオ・アキオ兄弟が、幼な子のような素直さで歌われたように「イエスさま大好き」と心から自分も歌えるか。

祈りは必ず聞き届けて下さると、一〇〇パーセントの確信をもって自分は祈っているか。

こんなことを考え自分を突き詰めていくと段々と自信が揺らいでいくのです。しかしそれも自分ひとりのことで済むうちは、自分だけの問題として悩めばいいのですが、辛いことにメッセンジャーというお役目があります。

手術の時と前後してメッセンジャーのお役目がまわってきました。初めの頃はこれも無我夢中で、しかも楽しんでやったつもりです。しかし先のような疑問が心に湧いてくるにしたがい、本当に自分は人にメッセージをするような資格があるのか、と不安になってきました。そうなるとメッセージをすることが、楽しみどころか苦しみとさえなってきました。

聖書を読んでいても頭だけで字面を追っていることが多く、実際にどれだけ心を開いてみことばを受け止めているのか。次のメッセージで何を話そうかと、主のみ心を訊ねる替わりに、自分の頭で考えようとしていないか。

今私はそんな状態の中に居ます。そしてもがいています。しかし同時に、この状態から抜け出すのは自分の力ではできないことも分かっています。今回この「お証し」をする機会を与えられて、改めて自分と向き合い、自分の信仰を振り返ることができたのは感謝でした。

イエスさまが、私をもう一度「初めの愛」に立ち返るように導いていてくださることが分かります。愚かで頑固な私ですから、これからもどうなるかは分かりません。しかしどんなことがあっても、これからもイエスさまに結びついているつもりです。そうしてイエスさまにとどまっているかぎり、イエスさまは私を助け導いてくださると信じます。

これからも日々真剣に祈りながら、家族や兄弟姉妹とともに、イエスさまに従って歩ませて頂きたいと思っております。

朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

あなたのみこころを行うことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が平らな地に私を導いてくださるように。（詩篇　一四三・八&一〇）

（二〇〇一年八月）

霊とまことによって

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。

（ヨハネの福音書　4・24）

人間の規則

人間が棲む社会には規則というものがいつも付きまといます。どんな規則かというと、小は小人数間の申し合わせ事項から、大は体系化され六法全書に収められているような各種の法令があります。人間社会の秩序や統制を保つためには、このようにお互いの間に一定の規則（ルール）を持つことは、避けられないことでありまた必要なことでもあります。

しかし「規則というものは破られるためにある」と言われるくらい、規則はなかなか守られないということも事実であります。一見規則が守られているようなときでもそれは表面上守られているだけであって、実際のところは違反しているということもあります。米国で多くの弁護士や会計士たちの腕の揮いどころは、法の抜け穴（ループホール）を見つけることにある、とも言われます。法文の上で禁止していないことは何をやってもよいとばかりに、殊に税法面で辣腕を揮い、依頼主（クライアント）の節税（脱税）をより多く謀ることができるのが優秀とされているようです。

このようにうわべではなるほど規則を遵守しているようでも内実は、その規則が作られた主旨、言い換えれば「法の精神」というものは無視され、ないがしろにされていることがしばしばあります。しかも当の本人はそのことに罪悪感を持つどころか、逆に自分は法に忠実な市民であると思い込み、本当は自分が偽善者であることを認めようとしません。



クリスマスローズ

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ人への手紙　8・28）

神様の規則

神様が、人間にまとまった形で与えられた最初の規則集は「モーセの十戒」でした。旧約聖書「出エジプト記」十九章によれば、イスラエルの民はエジプトを出て三ヶ月目にシナイの荒野に入り、シナイ山のふもとに宿営した時、モーセは山の上で神からの契約を提示されます。神は直接語られ、後には二枚の石の板に記されて十のことばを、モーセを通してお与えになりました。聖書ではこれらを「律法」「戒め」「おきて」あるいは「みおしえ」と呼んでいます。

この「モーセの十戒」の内容については、出エジプト記の二〇章あるいは申命記五章に詳しく記されていますが、それらを要約すると次のようになります。

第一戒　「わたしは、あなたの神、主である。ほかの神々があってはならない。それらに仕えてはならない。」

第二戒　「偶像を造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。」

第三戒　「主の御名を、みだりに唱えてはならない。」

第四戒　「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」

第五戒　「あなたの父と母を敬え。」

第六戒　「殺してはならない。」

第七戒　「姦淫してはならない。」

第八戒　「盗んではならない。」
第九戒　「隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。」
第十戒　「隣人の家を欲しがってはならない。」

以上の十か条であります。前半は神に対する人のあり方を、後半は人に対する人のあり方を戒めたものです。これらは人がこの世を生きていく上での基本的な心得として、いずれももっともなまた心すべき大切なことであります。

しかし問題は、人間がこれらの戒めを完全に守りきることができない存在であることです。そこで人間は何をするかというと、それは「問題のすり替え」ということです。まず規則の数を増やすことです。戒めの項目を細分化し、煩雑化し、精密化することです。こうするといかにも忠実に規則を守り行うように見えますが、実際のところ規則というものは細かく規定すればするほど、同時にその抜け穴をも見つけやすくなるという性質があります。もうひとつ人間がやることは、「例外規定」や「救済規定」あるいは「代償規定」を設けて規則そのものを骨抜きにしてしまい、当初意図された規則の目的、すなわち「法の精神」を無視してしまうことです。

イスラエルの民に神様から与えられた律法も同じような道をたどりました。律法が煩雑化し細分化するにしたがって、形式や儀式が重んじられ頑固な教条主義がはびこるようになりました。人は形式的に律法を守り行うだけで事足れりとし、また仮に違反したとしても身代わりに代償のいけにえを捧げることによって「ああこれで本件は片づいた」と安心して忘れてしまいます。そして一体自分は何

のためにこの律法を守っているのか、そもそもこの律法は何のためにあるのか、という根本的なことを忘れてしまい、「モーセの十戒」が立てられた当初の立法の精神からどんどん遠ざかって行きました。

新しい契約

このような事態に警告を発したのが、預言者エレミヤでした。神に仕えるとは、儀式や制度によるのではなく心の問題であり、霊と真実の心をもって行うべし、というのがエレミヤの主張であります。

彼がまだ青年時代、ヨシヤ王の時世に一つの「律法の書」が発見されました。これはいま聖書の中にある「申命記」だと言われます。この律法の書をもとにヨシヤ王の宗教改革が行われ若いエレミヤも協力しますが、結局この改革は失敗に終わりました。偶像崇拝を止めさせるために各地の祭壇を壊すとか、宗教儀式を改正するとか、それは確かに表面的には宗教制度は改まりましたが、効果はそこまでにとどまり、真に国民の魂を呼び覚まし人の心の改革を引き起こさせる、というところまではおよびませんでした。これにいたく失望したエレミヤは長い苦悩と祈りの時を経て、心の改革は心の新生によるほか道はない、それはすなわち信仰である、との思いを抱くに至りました。

律法の定めるところを実行することによって義とせられることは、人間の力をもってしては不可能であることを思い知らされたエレミヤは、石の板に刻まれた律法ではなく、人の心の上に律法を書き記す信仰を示されました。エレミヤに神の新しい契約が示されました。

見よ。その日が来る。――主の御告げ。――その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。――主の御告げ。――彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。――主の御告げ。――わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、「主を知れ。」と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。――主の御告げ。――わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。

（エレミヤ書　三一・三一～三四）

エレミヤに示された神様の新しい契約は、石の板の上ではなく、心の中に置き、心に書きしるす律法であります。もし心の中に神を知り、心の真実を神に差し出すならば、神様はわれわれの不義を赦しその罪をもう思い出さないであろう、とおっしゃるのでした。この新しい契約は、神様が人の不義を赦しその罪をもう思い出されないということであって、これは「罪の赦し」という新約聖書の福音に通じる霊的信仰の呼びかけでした。

この新しい契約が真に有効になるためには、イエス・キリストがこの世に来られ十字架の上に血を流され、そして三日後の復活という事実を待たなければなりませんが、エレミヤはこの時すでに、約

六百年後に起こるこの事実を神によって示されたのであります。

立法の精神

ところで、話をもう一度「モーセの十戒」に戻したいと思います。

「モーセの十戒」は神様が人間に与えられた根幹のルール、いわば律法中の律法でありますが、その内容は先に見た通り簡にして要を得ていると言いますか、決して煩雑なものではありません。またその命じていることは、人間の常識からしてももっともなことであり、特に難題だとも思えません。人によっては、自分は平生からそんなことはちゃんと守っているよ、とおっしゃるかも知れません。

「殺してはならない」――自分は虫だってなるべく殺さないようにしている、まして殺人などもってのほかだ。

「姦淫してはならない」――若い時から自分は身を正しくして生きてきた。他の異性と、言われるような関係を持ったことはない。

「盗んではならない」――お腹が空いてつまみ食いしたことくらいあるかも知れないが、泥棒を働いたことはない。

「偽証をしてはならない」――そんなことをした覚えはない。

「父と母を敬え」――はい、そうしているつもりです。

「あなたの隣人の家を欲しがってはならない」――滅相もない、そんな大それた望みは持ちません。

と、このようにおっしゃって、まあ完璧にとは言わないまでも大体のところ自分は戒めをよく守っているよ、と言われるのです。事実今から二千年前にもそのように言った人がいました。この話は有名だったようで、ヨハネ伝を除く三福音書に記事がありますが、今日はマタイ伝から見てみましょう。

すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」彼は、「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」（マタイの福音書　十九・十六～二〇）

二千年前にもこのように公言して憚らなかった人がいました。しかしイエスさまは別の機会に、そのような人の誤った考えを次のように指摘し諭してくださっています。

昔の人々に、「人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって「能なし。」と

いうような者は、最高議会に引き渡されます。また、「ばか者。」と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

（マタイの福音書　五・二一～二二）

「姦淫してはならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

（同　五・二七～二八）

「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

（同　五・四三～四四）

さあいかがでしょう。こうなってくると、それでも自分はいつもちゃんと守っている、と言える人はいるのでしょうか。

「モーセの十戒」と較べてイエスさまがおっしゃる戒めの方が、一見するとより厳しいように見受けられます。しかしこれはイエスさまが神様の戒めをことさらに厳しくお定め直しになったとみるべきでしょうか。

そうではなくて、神様がモーセを通してイスラエルの民にこれらの戒めをお与えになった当初から、神様の御心はイエスさまがおっしゃる通りの趣旨だったのではないでしょうか。「モーセの十戒」を

お立てになった時の神様の真意、言い換えると「立法の精神」は、人間としてのあり方や心の問題を念頭に置かれたのに対して、その後人間が勝手に自分たちに都合のいいように、表面的・形式的なものに問題をすり替えてしまったのではないでしょうか。

神様が意図された「人間としての心のあり方」という重要問題を、単に人間のとるべき個々の行為についての規則ということに、問題を矮小化し神様の「立法の精神」を置き去りにしてしまったのではないでしょうか。

律法の目的

そういう目で改めて十戒を見直してみるとどういうことになるでしょう。

「殺してはならない」というのは単に殺人を禁じているだけではなく、他人に対し憎しみや軽蔑の念を持つこと、すなわち他人に対する敵意や敵対心を禁止している。

「姦淫してはならない」というのは単に姦淫の行為だけではなく、そのような欲望を心に抱くそのこと自体が罪である。

「盗んではならない」「あなたの隣人の家を欲しがってはならない」というのは、自己の欲望の際限のない追求を戒めているのはもちろんのこと、他人を妬み他人に嫉妬心を抱くことが人間の罪であることを指摘している……。

「モーセの十戒」の一つひとつを改めて見直してみると、その言わんとするところは深くかつ厳し

いものであることがわかります。

さてここで人は困難な事態に直面するのではないでしょうか。というのはこれらの戒めを人間は守り行うことができないからです。何とかしてこれらの戒めの一つずつでも守り行おうと人は努力するのですが、そうしようと思えば思うほど、自分の心の中にはそれに反発するものがあって、どうしてもそれを実行することができない。

使徒パウロはそのような人間の思いを代弁して次のように言っています。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。

（ローマ人への手紙　七・十八～十九）

それでは、このように人間が守り行うことができない律法は一体何のためにあるのでしょうか。人間にはこれらを守り行う力がないことをご存知でありながら、どうして神様はこのような律法を人間にお与えになったのでしょうか。

ベック兄はそれをあるメッセージで「人間が自分のまことの姿を見るための鏡として神様は律法をお与えになった」と言われています。人間の生まれながらの性質は罪である。律法はこの罪の性質が

暴かれ露わにされるために、神様によって与えられたものであるとされています。

なぜなら、律法を行うことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。（ローマ人への手紙　三・二〇）

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。（同　七・七）

信仰への道

律法を守ろうと努める人は、結局はこれを守り切ることができない自分というものを悟ります。その結果、人は自分の真の姿を見るのです。それは傲慢で自己中心でしかも無力な自分です。神に対しても人に対しても「愛」のない自分です。そのように徹底的に罪にまみれ汚れはて、このままではどうしても聖い神の御心に従うことができない自分です。

自分は律法を守り行うことができない、律法を破ることしかできない。こうして人は自分の無力さを徹底的に知らされるのです。徹底的に自分の無力さを知らされたとき初めて、人は頼るべき方に目

を開かれるのです。

逆に言えば、律法の役目は人間にその無力さを徹底的に知らしめることにあるのであって、そのことを人間に悟らせ人間の目を救い主に仰がせた時、律法の役目は完了すると言うことができます。言い換えれば、律法は人をキリストに導く養育係であります。

では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。

（ガラテヤ人への手紙　三・十九）

こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。

（同　三・二四）

人が自分の罪を認め、しかもその罪は自分の力をもっては償えないことを知って自分の無力さに絶望した時、救いの手を差し伸ばして下さったのがイエスさまです。天地宇宙の創造主である唯一の神様は、御子イエスさまを今から約二千年前この世界にお送りくださり、人間が自力ではどうすることもできない全人類の罪をイエスさまの一身に負わせ、十字架の死におつけになりました。それによってどうしようもなかった人間の罪は贖われました。

イエスさまが自分の罪のために自分の身代りとなって死んでくださった——この事実を信じた瞬間、

人は何の代価をも払うことなくその罪は赦されたのです。人が罪を赦され神様の前に義と認められるのは、自ら律法を守り行うことによるのではなくて、このイエス・キリストの福音を信じる信仰によると聖書は言っています。

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉をうけることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行いの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。

人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

（ローマ人への手紙　三・二一～二八）

三つの愛

神様がモーセによって立てられた契約、すなわちイスラエル建国の根本になった神聖な律法は、その後時代を経るにしたがい数々の形式や習慣がこれに纏わりつき、煩雑化し儀式化し、そもそもの立法の精神が段々となおざりにされるようになってきました。この過去の伝統の権威を否定して、「新しい契約によらなければ国民は救われない。その新しい契約というのは心に記されるものであって石の上に記されるものではない」と、敢然として立ち上がったのが預言者エレミヤでした。しかしこのエレミヤの言う新しい契約が成就するにはなお六百年の歳月と、イエスさまの十字架のみわざを待たなければなりませんでした。

わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。（マタイの福音書　五・一七）

廃棄されるべき律法は形式的な律法であり、成就されるべき律法は、この律法が立てられた精神でした。この律法の精神とは何でしょうか。それは一言で言うと「愛」に他なりません。イエスさまは「マタイ伝」の中でおっしゃっています。

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力をつくして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

（マタイの福音書　二二・三六～四〇）

律法が立てられた精神は、この「神への愛」と「人への愛」に尽きるとイエスさまは教えておられます。言い換えれば、律法を完成する道は「愛する」ことであることがわかります。神様が人を愛される愛と、人が神様に対してお応えする愛と、その愛に基づいて人々がお互いに愛し合う愛、この三つの愛がイエス・キリストによって一つに結ばれること――ここに真の意味での律法の精神があるのではないでしょうか。

イエスさまは、十字架に釘づけされただけではなく、これも神様のご意志で三日後に甦られました。この事実を心に信じた人は、イエスさまの犠牲の死によって罪の赦しを頂くだけではなしに、この復活により甦られたイエス・キリストの御霊がその人の内に宿ってくださる、と聖書は言っています。その人の内に宿りその人と共に住んでくださるイエスさまの御霊は、生きて働いてくださいます。

この「生きて働いてくださる」とは、具体的にはどういうことでしょうか。それは人間が悪い思いに取り付かれた時、御霊が「ストップ」を掛けてくださることではないでしょうか。

他人を憎んだり軽蔑する、異性を見て情欲を抱く、他人のものを欲しがる、他人に嫉妬する……このような悪い思いが頭の中にひらめくのは、これは残念ながら人間には避けられないことでありましょう。問題は、私たちがそれに対して「No」と言い、それを抑止するためにイエスさまの御霊により頼むことができるかどうかであります。

「イエスさま、どうかこのような悪い思いから私を解放してください」と祈るとき、私たちの内に住んでくださるイエスさまの御霊が、その悪い思いの誘惑に打ち勝つ力を私たちに与えてくださるのではないでしょうか。

「鳥があなたの頭にとまるのを阻止することはできないが、あなたの髪の中で巣を作るのは阻止できる」という古いことわざがあるそうですので、ご紹介しておきます。

むすび

律法の命令を自分の力ではどんなに努力しても守り行うことができない私たち人間ではあるけれど、イエスさまが私たちのうちに住んで、生きて働いてくださることにより、私たち自身ではできなかったことを可能にしてくださいます。私たちの中に住んでくださるイエスさまが働いて、私たちが神様のために実を結ぶことができるように、私たちを導いてくださるのです。

私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対し

ては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。

（ローマ人への手紙　七・四）

主イエスさまのお導きに心から信頼して、そのご愛に日々感謝し、兄弟姉妹と主にある交わりを深め、そして常に「霊とまこと」によって神様を仰いでいれば、この罪深い私たちでも律法の真の精神である「愛の生活」に、たとえ少しずつでも近づいて行くことができるのではないか。

このことを信じてこれからも祈っていきたいと念じております。

あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神はそのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。

（コロサイ人への手紙　二・十二～十四）

（二〇〇一年九月）

キリスト者の戦い

「目には目で、歯には歯で。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい。

（マタイの福音書　5・38～42）

はじめに

表記の聖句は、聖書の中でもよく知られた聖句です。私が聖書を手にしたのはまだそんなに古いことではありませんが、そんな私でもずっと以前から、この聖句だけは断片的ながら耳にしていました。殊に「右の頬を打つ者に、左の頬をも向けよ」というくだりは私の中に強烈な印象を残し、「クリスチャンってすごいな」と感心すると同時に、「しかし自分にはできないな」と思ったことを覚えています。

その後自分で聖書を読むようになってからも、この記事のところはあまり深く考えることもなく、日本の古い諺にある「ならぬ堪忍するが堪忍」と同じで、要するに世の中を生きていく上には忍耐と我慢が肝心で、たとえ相手が無理難題を言ってきてもいちいち抵抗しない、という精神をイエスさまはおっしゃっているのだと思っていました。

しかし、最近このみ言葉を改めて考えさせられたのは、ニューヨークのワールドトレードセンタービルを初めとする、米国の同時多発テロがきっかけでした。

犯罪はすべてよいものがないのは当然ですが、なかんずく、自己の目的達成のために無関係な人々を巻き込む、ハイジャックや無差別テロほど卑劣で残酷なものはないと、私はかねがね考えておりましたが、今回はその両方が同時に起こされました。しかもその一方であるハイジャックした航空機を

攻撃の武器としてテロのターゲットを襲わせたこと、言い換えれば、無辜の民をして無辜の民を襲わせ、そしてその双方共の破滅をもたらした今回の事件ほど卑劣で悲惨なものはありません。私はこの事件を見聞きして怒りと悲しみに胸が打ち震えるのを覚えました。

「それでもなお左の頬を向けよとおっしゃるのですか?」と私は分からぬままに何度もイエスさまに問い返しました。

イエスさまは無抵抗主義?

ところで一体にイエスさまは「無抵抗主義者」であったのでしょうか。

聖書から知られるイエスさまの生涯を振り返ってみても、イエスさまの生き方は「無抵抗主義者」のそれとは大分様子が異なるように思われます。

イエスさまが居られた当時のユダヤはローマ帝国の属国であり、ローマ総督とその軍隊により支配されていました。取税人を用いて人民を搾取し、その圧政にユダヤ国民はあえいでいました。一方国内の支配階級としてパリサイ派が牛耳っており、厳しい戒律を人々に強要していました。他方これら外国と国内双方からの圧制に対する反抗運動として、諸地方に人民の暴動がありました。しかしイエスさまはこれらのいずれの勢力とも妥協や宥和をせず、独自の道を貫かれました。

力強いみ教えとそのみわざによってイエスさまの名声が高まるにつれ、イエスさまは国内で無視しえない存在となってきました。しかもイエスさまは誰憚ることなく、この世での繁栄しか求めないこ

れら各勢力に対し手厳しい批判をもってその誤りを指摘されました。特に、パリサイ人に対するイエスさまの批判は痛烈なものがありました。「マタイの福音書」二三章からそのいくつかを見てみましょう。

しかし、忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはいらず、はいろうとしている人々をもはいらせないのです。（十三節）

忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にするからです。（十五節）

忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。（二三節）

忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。（二五節）

忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾って、「私たちが、先祖の時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかっただろう。」と言います。こうして、預言者を殺した者たちの子孫だと、自分で証言しています。

（二九～三一節）

当時のユダヤの支配階級、社会的にも宗教的にも国内を押さえ込んでいた体制派、パリサイ人に対しこれだけのことが言えるのは、「長いものには巻かれろ」的な事なかれ主義者には到底なしえない技であろうと思われます。「無抵抗主義者」どころかイエスさまは、不正・不義に対しては何者をも怖れず断固として立ち向かわれました。

イエスさまが批判の矢を向けられたのは、パリサイ人だけではありません。時のローマ帝国がかつて例を見ない世界的繁栄をバックに、ややもするとローマ皇帝を神格化し、皇帝と神を同一視しようとする風潮に対して「カイザルのものはカイザルへ、神のものは神に」と、カイザルと神は違うとはっきり指摘されました。またそのローマ政権下で、私腹を肥やし安逸をむさぼるだけの国主ヘロデのことを「狐」と呼んで憚りませんでした。

他方民衆に対しても毅然たる態度をおとりになりました。民衆は、この世の改革者としてイエスさまを王として担ぎ上げ、自分たちの国づくりをしようと企みましたが、イエスさまは民衆のことを「牧者のいない迷える羊」と憐れまれながらも、同調しようとはなさいませんでした。

このようにこの世の勢力のいずれとも結ばず、この世の悪と不正と偽善を徹底的に批判し、また人間の持つわがままを厳しく指摘されたイエスさまは、結局官憲にもパリサイ人にも民衆にも憎まれ、終には弟子にまで裏切られて十字架の死を遂げられたのであります。このような生き方をなさったイエスさまをかりにも「無抵抗主義者」と呼ぶことができるのでしょうか。

イエスさまの真の目的

イエスさまの関心事は、人間がこの世における幸福や繁栄を求めることにはなく、人間が本来的に持つところの罪から人間を解放し、これに永遠のいのちを与えることによって、人類の根本的救済を成し遂げることにありました。したがってそのことの実現を阻むこの世の欲望や偽善に対し、徹底抗戦をもってこれらを排除しようとなさいました。このように、この世の悪や不正に対し敵対し攻撃すればするほど、世の中の反撥は激しいものがあったと思われます。

「そのような反撥は気に留めるな」というのがイエスさまの教えだったのではないでしょうか。人が自分の信念を持って信じる道に突き進むときは、必ずそれを阻害しようとする者が現れる。彼らはいろんな手段を用いて、抵抗し邪魔をしまた危害を加えてくるのが普通だ。しかしそんなものは気にするな。危害を加えると言うのなら受けてやれ。正しいこと、自分の信ずることを貫き実現するためには、それぐらいの反撥を受けるのは覚悟してかかれ——というのが、冒頭のイエスさまのみ教えの真の意味するところではないでしょうか。

イエスさまは、そのように反撥し敵対する人たちのことは気にも留められませんでした。そのような人たち一人ひとりを憎むことなどはおろか、むしろそういうことをせざるをえない彼ら一人ひとりを、深い憐れみと愛の眼差しでご覧になったのでしょう。

イエスさまが攻撃の的となさったのは、これら「悪い者」すなわち人間ではなくて、彼らの裏に潜んで彼らをそのように仕向けている「悪」そのものでした。そしてイエスさまが目的とされたことは、人間をこの「悪」から救い出し解放することでした。言い換えればそれは、悪いことをする人間に向けられたものではなく、人間を唆し誘惑し、そのようなことをさせている「悪の支配者」すなわちサタンに向けられた攻撃でした。イエスさまは、「この世を支配する者」という表現でサタンのことをたびたび言及なさっています（ヨハネの福音書十二・三一、十四・三〇、十六・十一等）。

またパウロは後に、イエスさまに倣うキリスト者の心構えとして次のように言っています。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。（エペソ人への手紙　六・十二）

私たちの戦いの相手は、血肉すなわち人間ではなくて、この世と人間の弱い性質（これを肉の性質とも言いますが）を利用し支配する者すなわちサタンである、とパウロは言っています。

この世の制度あらゆるものの背後には、欺瞞の達人であるサタンが潜んでおり、それらを利用して

私たち人間を神から引き離そうと謀っています。この世の制度とはなんでしょうか。それは、文化芸術、学問知識、科学、政治、産業、宗教等々さまざまのものがあります。これらの制度は、それ自体としては何も悪いものではありません。問題は、これらの一つひとつの中にサタンがその策略を巧みに織り込んでいることです。

サタンの目的は一つ、それは人間の心を神様との真の関係から引き離し、人間の心をこの世的、物質的な事柄に集中させようとすることです。人間がこれらのことに専念し自己実現をはかる過程で、サタンは人間の自己満足心を刺激し人間を高慢にし、その結果神の真理が拒否され、そして暴力が浸透していくこと、これがサタンの目的とするところです。

サタンの企み

サタンはこの世の制度の中で特に宗教を好みます。宗教は、「真理」に対して人間を盲目にするのに最も有効な手段だからです。人間というものは、悲しいことですがいつも邪悪な思いに曝されています。また置かれている環境になにかと不満を持つものです。怖れ、臆病、敵意、思い煩い、高慢、情欲、妬み、あるいは貧困、苦痛、病気……そういった人間の持つ弱みにつけ込んで、サタンはきわめて巧妙に人間を宗教に誘い込みます。

いったんここに引き込まれると人間は「真理」に対して盲目となり、貪欲となります。多くを得れば得るほど、さらに多くのものを望むようになり、決して満足は無く、人間は泥沼に陥ります。そし

て何とかしてその泥沼から抜け出そうとして、そのためには手段を選びません。他人の迷惑など省みる暇はなく、目的追求のために暴力がはびこります。

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょう。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです。貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

（ヤコブの手紙　四・一～四）

今回の米国での一連の事件は、こうしたサタンの策略に陥って、「真理」から外れた宗教の虜となった人たちによって起こされた、不幸な出来事ではないかと考えられます。その真の根源はこの世の悪を操るサタンにあります。したがって私たちキリスト者の戦いは、人に対するものではなく、悪そのもの、またその悪を支配するサタンに対するものでなければなりません。

しかし、サタンは欺瞞の天才であり、底無しの悪知恵と強力な悪の軍勢を持っていると言われています。そんなサタンにわれわれ弱い人間が対抗し、戦いを挑むことができるのでしょうか。

サタンとの戦い

それは心配ない、と聖書は言っています。何故なら敵と戦うのは自分たちではなく、主が戦ってくださるからです。しかも、主はこのサタンとの戦いにすでに勝利をおさめておられるのです。そしてイエスさまを神の子と信じて従っているわれわれキリスト者は、主とともに勝利者の側に立つことを許されている、と聖書は伝えています。このあたりのところを少し聖書から学んでみましょう。

最初は、主がモーセを通してイスラエルの民におっしゃったお言葉です。

彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。共に行って、あなたがたのために、あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。」

（申命記　二〇・三～四）

次は、イエスさまのお言葉です。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはす

でに世に勝ったのです。　（ヨハネの福音書　十六・三三）

次は、パウロが確信して言っています。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。　（ローマ人への手紙　八・三七）

最後に、使徒ヨハネの手紙からです。

なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。　（ヨハネの手紙　第一　五・四～五）

イエスさまは勝利者であります。イエスさまが十字架の死から三日目に甦られたことによって、サタンはすでに敗北しているのです。そして私たちがイエスさまのうちにとどまり、イエスさまの御力により頼み、イエスさまの得られた勝利に自分も預かることができることを信じているかぎり、私たちは勝利者の側に立つことを許されています。

しかしだからといって安心はしておられません。というのは、サタンは絶えず隙をうかがって、わ

れわれキリスト者の信仰を破壊し、われわれの心をキリストから離れさせようとしているからです。神様が、イエス・キリストを通してわれわれに与えておられる赦しと愛から何とかして引き離そうと、サタンはすでに主を信じているわれわれキリスト者に、日夜攻撃を加えているからです。

キリスト者として

そこでわれわれキリスト者が心すべきこととして、以下の二つを挙げなければならないと思います。一つは、サタンに対抗するために自らの力に頼るのではなく、神の武具をいつも身に着けることです。勇気や決心、知力や善良さ、勤勉や努力――たとえそれらがいかにすぐれたものであったとしても、そういった人間の力をもってしては、強力で悪賢いサタンの前にはひとたまりもありません。サタンに対抗するには、父なる神と御子イエスさまへの信仰に堅く立ち、み言葉に聞き従い、絶えず祈ることしかないと聖書は言っています。

悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音

の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾をとりなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊のあたえる剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

（エペソ人への手紙　六・十一～十八）

キリスト者の心構えのいま一つは、一人でも多くの人にイエスさまの福音を伝えることです。今年の年頭のメッセージでベック兄は、今年のわれわれの課題はイエスさまに用いられることである、とおっしゃっています。

「収穫は多いが、刈り取る人は少ない」という比喩を用いて、一人でも多くの人が暗やみから救われてイエスさまの光の中に入れられること、そのためにわれわれキリスト者の務めは、イエスさまの器として用いられることである、と言っておられます。何故なら、神様の御心は「テモテ第一の手紙」にあるように、「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられ」るからです。神様はその深いご愛によって、一人でも多くの魂が救われるのを待って、再臨を一日延ばしにしておられます。しかしそれには定まった日があり、そうそう悠長なことは言っておられません。

来るべき再臨の日までに、一人でも多くが悔い改めに導かれて、罪赦され神様の御前に立つことができるよう、私たちキリスト者は神の通りよき管として、イエスさまを証しするものでなければならないと、ベック兄はおっしゃっています。

終わりの日に

なおいささか余談めきますが、この年頭のメッセージでベック兄は「戦争」について言及なさっています。お正月を迎えて皆は「おめでとう」と言うが、本当にめでたいのか。今年何が起こるか誰も分からない、大戦争が起こるかも分からない。それでも「おめでとう」と言うのか、というくだりです。

ベック兄が年頭に預言された通り戦争が始まりました。これは世界的な戦争に発展する危険があります。凡人たる私自身としてはそうならないことを願うのですが、そんな願いにかかわりなく聖書の預言は確実に実現されているのが実感されます。そのことはマタイの福音書二四章に詳しく記されていますが、その一部だけ拝読します。

また、戦争のことや、戦争の噂を聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。（六～八節）

今回米国は南北戦争以来の危機を迎えている、と言われます。南北戦争が出した犠牲者は六十万人

を超えました。これは独立戦争から第二次世界大戦に至る、米国が経験した他の戦争で出た戦死者の合計より多い犠牲者の数でした。もちろん、テロに発する今回の一連の出来事と南北戦争とは多くの面で異なります。

しかし「憎しみ」という点ではどうでしょうか。愛する夫や息子あるいは父親を奪われた人たちの心情はどのようなものだったのでしょうか。しかもこの場合、彼らを殺した相手が遠くの異国人ではなくて、自分たちの同胞であったわけです。「近親憎悪」といわれるくらい、人間の憎しみは自分の身内や身近な者に対して、それがいったん燃え上がるとより激しいものとなるのが普通です。

この南北戦争終了時も同様で、勝った北部の人の中には、南部諸州に対し懲罰的態度をもって臨み、極刑に処すべきであると主張する者が多くありました。しかしこのような意見には、時のリンカーン大統領は耳を傾けませんでした。

南軍が降伏した直後、一八六五年四月十四日の午前中に開かれた閣議の席で、リンカーンは次のように語ったといわれます。

《若し我々が賢明に且つ思慮深くやれば、秩序を維持し、且つ合衆国の結合を再建すると共に、南部諸州に再び活気を与え、その政府をば善く活動させ得るであろう。（中略）

私が叛徒たちを絞めたり殺したりすることに同意すると、誰も期待してはいけない。彼等の中の最悪の者に対しても、私はそんな事は考えない。我々が若し調和と一致とを欲するならば、我々の怨恨を絶たねばならぬ。我々の友人たちの中には、南部諸州に対して主人となり、之に干渉し指導するこ

とを欲し、その人民をば兄弟として取り扱いたくないという者が多くある。南部諸州の権利に対する尊敬があまりに欠けている。私はかかる感情には同意しない。》（矢内原忠雄訳）

その生涯を通じての最高の愛読書が聖書であったといわれるアブラハム・リンカーンは、閣議を終えた後この同じ日の夜、首都ワシントンのフォード劇場で観劇中に凶弾に倒れました。

むすび

何度も申しますが、今回の事件は南北戦争とは異なります。しかしその処理の仕方が難しい点では同じであります。今回の事件の処理に当っても、何が問題の本質であるかを冷静に見極める必要があります。南北戦争でリンカーンが見据えたように、問題の本質を誤りなく把握し、それに対して感情に流されることなく、最適の処置をとる事が肝要です。

そのために必要な智慧と勇気と敬虔さが、われわれ人間に備えられるよう祈りつつ主の導きに従うことが、今われわれに求められているのではないでしょうか。

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂きに堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみお

しえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの国々の民に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。

来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。（イザヤ書　二・二～五）

神様は、終わりの日のことをこのように約束してくださっています。このみ約束を胸に希望を持って、主の導きに従って日々の歩みが続けられますよう、皆さまとともに祈っていきたいと存じます。

（二〇〇一年十月）

終わりの日に

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂きに堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。

来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。

（イザヤ書　2・2〜5）

地球の扶養能力

新しい世紀になってはや最初の一年が終わろうとしていますが、過ぎ去った二〇世紀をいま改めて振り返って見ると、二〇世紀とはどんな世紀であったのでしょうか。

それは、「世界戦争の世紀」であった、また「科学技術が長足の進歩を遂げた世紀」であった、とはよく言われます。しかし二〇世紀でもう一つ見逃せない特徴があります。それは、「世界人口が爆発的に増加した世紀」であったことです。

西暦一年の世界人口は三億人であったといわれます。十九世紀最後の年、西暦一九〇〇年のそれは十六億人でした。それが二〇世紀末の世界人口はなんと六一億人を超えたと推計されています。過去一九〇〇年を要してやっと十三億人増加したのに対して、二〇世紀だけの百年間で地球はなんと四五億人の人口増加を見たことになります。この結果どういうことが起こっているか。それは慢性的な食料不足とエネルギーをはじめ資源の乱獲・乱開発であり、それらは地球の自然環境の破壊に繋がっています。

もう少し言いますと、現在の世界人口六一億人のうち、「先進国」人口は約二〇%・十三億人に過ぎず、残り約八〇%・四八億人の人口をいわゆる「発展途上国」が抱えています。彼ら八〇%が恒常的な飢餓・飢饉と貧困にあえいでいる一方で、残り二〇%の人間は、より高い生活水準を貪欲なまでに追求する結果、世界のエネルギー資源の大半を急速な勢いで消費しており、遠からず資源の枯渇も

予測されている。またこの貧富の差の拡大が、人間同士の妬みと憎しみを呼び、世界戦争の大きな要因になっていることはご承知のとおりです。

こういった発展途上国を中心とした人口の爆発的増加と、先進国の経済水準維持のためのエネルギー消費の増大は、地球的規模での自然環境の破壊をまねき、地球はそろそろその扶養能力の限界域にまで達してきていると言われます。こういう現実を見ておりますと、人間が今後も続けて地球に生存していく可能性については、悲観的にならざるをえません。人類の破滅の危機が着実に、しかも間近に迫って来ていることがうかがわれます。

終末の預言

すでに二千年前、聖書はこの日のあることを預言しています。

この世に来られたイエス・キリストは、「この天地が滅び去る」ことを明言しておられます（マタイの福音書　二四・三五）。そしてその前兆がどんなものかを、弟子たちに次のように教えておられます。

イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう。」

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」

（同二四・三～八）

聖書は、人類の歴史が終わることを預言しています。その経過は、十字架にかかって人間の罪を一身に背負ってその贖いの死を遂げ、三日後に復活して天に昇られたイエス・キリストが、今度は審き主としての権威をもって、再びこの世に現われてくださる。それによって人類の歴史の終わりが来る。これが「イエス・キリストの再臨」です。

イエスさまは自ら次のようにおっしゃっています。捕らえられたイエスさまが、大祭司カヤバの訊問に答えて言われたところです。

大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」

イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見る

ことになります。」

（同二六・六三～六四）

次は、イエスさまが最後の晩餐の席で弟子たちに話されたみことばです。

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

（ヨハネの福音書　十四・一～三）

再臨はあるのか

正直に告白いたしますと私は、人間の罪を贖うためのイエスさまの十字架の死、イエスさまの復活、それとこのイエスさまの再臨、この三つのうち「再臨」だけが一番最後までなかなか信じられませんでした。思い返して見ると、私の信仰は次のようなステップを踏んできたようです。

初めに、イエスさまを知りそして信じて、その十字架上の死によって、私自身自分ではどうしようにも処理のしようがない、自分の本質的な罪が赦されていることを自覚しました。その時与えられた

心の平安は、「ああもうこれでよい、これで充分だ」と自分に思わせるものがありました。この心の安らぎをもって自分の一生を送ることができれば、何も言うことはない、そんな思いでした。「イエスさまの復活」ということは、知識としては知っていましたが、まだどうもピッタリとは来ず、そのために「永遠のいのち」も、自分のものとしては考えることができませんでした。

ところが親しい友人の突然の死などを通して、私は初めて「死」を身近なこととして受け取るようになり、またこの世に続く永遠の世界についても、本気で考えるようになりました。そんな過程を経て、イエスさまの復活が、私という人間のためにも「永遠のいのち」を備えてくださるみわざであった、そのことを覚えることができました。おかげで、「喜び」と「感謝」に加えて、私の人生に「希望」が芽生えました。

しかし「再臨」となると、申し訳ないが話が少し荒唐無稽に過ぎるように感じられて、あからさまに反論はしないまでも、なるべくこのテーマからは身を避けるようにしていました。ところが、冒頭に申し上げたような地球環境の大変動は、地球上における人類生存の継続が楽観視できないことを、肌で感じさせてくるようになりました。さらに、米国の同時多発テロ事件に発する現下の混乱する世界情勢と、憎悪に渦巻く人間同士の争いを見るにつけ、聖書が言う「その日」が身近に迫りつつあることを、否が応でも思い知らされるようになってきました。

キリストの再臨

「キリストの再臨」について聖書が言っていることを、もう少し見てみたいと思います。

「その日」キリストはご自身天から下って来られ、人々を空中に引き上げられる。そこで人々は主イエス・キリストと出会い、その後は主と共に「神の国」に永遠に生きる、と言うのです。ただここで空中に引き上げられ救われるのは、「キリストに属している者」（コリント人への手紙　第一　十五・二三）、言い換えれば、イエス・キリストを自分の救い主として信じている者に限られる、と聖書は言っています。

私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（テサロニケ人への手紙　第一　四・十四～十七）

ここでは、眠った人すなわち死者と生き残っている人間、これら二つについて同時に述べていて、ちょっと分かり難いところがありますが、少し整理をしますと次のようになります。

イエス・キリストを信じて先にこの世を去った人の霊は、その死と同時に天国に引き上げられますが、その肉体は墓の中なり骨箱の中に眠っています。再臨の日、イエスさまはこれら死者の霊を伴なって、天から下って来られます。そのとき眠っていた肉体がよみがえり、霊と体が一体となって、永遠に朽ちないものとなります。その次に地上でまだ生き残っている信者が、空中に一挙に引き上げられると同時に、永遠に朽ちないものに変えられます。こうして死者も生者も共に、いつまでも主イエス・キリストといっしょにいることになる、というのが聖書のおしえです。

人間は霊と肉体が一体となってはじめて完全なものとなるわけですが、人間の肉体は、時が経つと必ず滅びてしまいます。これはキリスト者であってもなくても、人間ならみな同様です。ですから再臨の日に空中に引き上げられた人間の肉体は、死者であれ生者であれ、元の肉体ではありません。旧い肉体はいずれ滅び去るものですから、そのままでは永遠に生きることはできません。この旧い肉体が再臨のとき、永遠に滅びないもの、すなわち朽ちないものに、引き上げられた瞬間変えられてしまうのです。このことについても聖書は言っています。

私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるの

です。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

（コリント人への手紙　第一　十五・四九～五三）

LEFT BEHIND（残される人たち）

こうして、イエスさまを信じた者は、救い上げられイエスさまとともに神の国にいつまでも棲むことができ、まことにハッピーなことですが、ところで、そうでなかった人たちは一体どういうことになるのでしょうか。

イエス・キリストを信じない人、すなわち、自分の罪を認め、それを悔い改め告白し、その赦しを求めて、十字架上のイエスさまにより頼むことをしない人――この人たちは残念ながら再臨の日、地上に取り残されざるをえないのです。その後、地上ではどのようなことが起こるか。それは、神の正義を否定する「不法の者」が現われ、イエス・キリストとの間に最後の決戦が行われる。その決戦のあいだ地上は大惨事に見舞われ、多くの人たちがそれによって殺される。しかし最終的にはイエスさまの勝利によってこの決戦は終わります。

しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配

と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。

（コリント人への手紙　第一　十五・二三～二六）

この決戦に伴なって地上に次々と引き起こされる大惨事によって、地上に残された多くの人が死にますが、それでも何とか生き延びて終戦を迎える人たちもいます。しかしこの人たちを待ち受けている次なる運命は、イエス・キリストの厳しい審判の座に引き出され、これまでの罪に応じてそれぞれが罰をうけることです。このあたりの経過については、新約聖書末尾の「ヨハネの黙示録」に詳しく述べられており、ぜひご一読をお勧めしますが、イエスさまは「マタイ伝」の中でも、羊飼いが羊と山羊をより分けるたとえ話を用いて、結論として次のようにおっしゃっています。

こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。

（マタイの福音書　二五・四六）

一日もはやく、一人でも多く

では「その日」はいつ来るのでしょうか。それは天の父なる神だけが知っておられ、ほかの者は誰

も知りません。

約束されたものが期待している内に実現しないと、人間は文句を言い、その約束をした相手に不信感を抱き勝ちです。しかし相手が信頼に足る人である場合、それは往々にして、相手の思惑をこちらで自分流に勝手に解釈した誤解によることが多いものです。自分の物差しで相手を測ろうにも相手の尺度とこちらのそれが違う、そのギャップからくるものです。

ましてや相手が神様であるとなると、その思し召しとご配慮はとても人間の推し量れるものではありません。神様が「その日」を一日延ばしにしておられるのは、一人でも多くの人が滅びないよう、そのときまでに救いにあずかることができるよう、忍耐強く待っていてくださるのだ、と聖書は言っています。この神様のご愛に対して、人は知らん顔をしていてよいものでしょうか。

まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日

は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

（ペテロの手紙　第二　三・三～九）

「その日」に備えて

私たちは、「再臨の日」を前にどのような生活をおくるべきでしょうか。

それは、「その日」を待ち望み、いつなんどき「その日」が来てもよいように、常に「その日」に備えて、一日一日をおくることではないでしょうか。

「その日天国に導き入れられる」という待望はなんという恵みでしょう。「天国」の生活は、花園で竪琴を弾きながら美味しいものを食べて毎日遊んで暮らす、というような安逸と無為の日々ではないことは確かです。もし天国が、毎日同じ生活が永遠に繰り返される、単調で無味なものであるならば、そこにはなんの希望もあり得ないことでしょう。そうではなくて天国は、この世での「未完成・不完全」を持ち越して、それを「完成・完全」に導く生活、言い換えれば、日々進歩する永遠に発展する生活であるはずです。

そうであるとすれば、私たちのこの世で残された毎日は、そのための備えの一日一日でなければな

りません。今日行うことが明日どのような実を結ぶのか、いちいち思い煩うことなく為すべきことをなす。そして今日の一日を、主に喜ばれる最善の日とするように心がけることだと思います。

風を警戒している人は種を蒔かない。雲を見ている者は刈り入れをしない。

（伝道者の書　十一・四）

朝のうちにあなたの種を蒔け。夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいくかもわからない。

（同十一・六）

明日は風が止み雨も上がるかも知れない、そうしたら種を蒔こうなどと言っていると、今日「その日」が来て、種を蒔く機会が永遠に閉ざされ、天でそれを刈りとることもできなくなる。また、実がなるかどうか、結果のいかんに気を遣うことなく、明日のことを思い煩わないで、朝にも夕方にもいつも種を蒔かないといけない。

イエスさまもおっしゃっています。「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。だから、神の国とその義をまず第一に求めなさい」と。

むすび

今日の一日、自分のなすべき務めを誠実に果たすことの大切さを、種蒔きのたとえをもって聖書は言っています。なかんずく大切なことは、「愛」をもって神様に対し、「愛」をもって人に接することだ、とイエスさまは言われます（マタイの福音書　二二・三六～四〇）。

「愛の生活」とは、具体的にどのようなものでしょうか。

王は、その右にいる者たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渇いているとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。」すると、その正しい人たちは、答えて言います。「主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渇いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。」すると、王は彼らに答えて言います。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」

（マタイの福音書　二五・三四～四〇）

主は今日来られるかもしれない、という待望をもって今日の一日をおくることは、なんという恵みでしょうか。

その日には、神様がお約束してくださったように、冒頭の聖句にある、平和な世界に住むことを許されるのです。その希望を日々新たにしながら、この世に残されたこれからの毎日を「愛の日々」とすることができますよう、皆さまとともに祈ってまいりたいと存じます。

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

（ヨハネの黙示録　二一・一）

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。」

（同二二・二〇～二一）

（二〇〇一年十二月）

you?"

On the very evening of this phone call, his condition took a sudden turn for the worse. He was taken back to the hospital and died about two weeks later on May 14th. What kind of thoughts occurred to him during those two weeks? This question has repeatedly come to me these days. A great pain attacked him, but thanks to good medicine he seemed to have at least once in a while peaceful times to enjoy conversations with his family or to read books or listen to the music. Sensing that death was approaching much faster than expected, what did he think and what did he wish? I imagine, under unbearable pains, he might have sent a signal to me from his heart or call out the name of Jesus. Although there is no way to confirm it now, I pray and wish it were true! Alone or together with my family I have been praying for him to God every morning and evening these past twelve months since he fell ill. It must have been the bitterest and the most miserable period of time for him. During these difficult days, what have I done for him except to pray? He might have been, not outwardly but inwardly, sending a desperate call of "Help me!" under great anguish and agony. I cannot be too repentant at the lack of my love and friendship. Being unaware of his heartfelt call I did nothing to assist him when he needed help desperately. After his death, I pray every day and will keep praying from now on for his salvation and that of his remaining family. When I arrive where he is (it may not be too long), I will find him there and revive our friendship of those good old days. And this time, as true brothers in Jesus Christ, he and I together will really live with Faith and true Fellowship in God. This is my dream and earnest hope right now. I will keep praying for it to be fulfilled for the rest of my life while in this world.

Our citizenship is in heaven. (PHILIPPIANS 3: 20)

Thank you.

(August 2000)

fulfilling the duties ordered by Christ. By the same token, death is gain because death means the beginning of life in Heaven together with Christ and in peace beside Christ. For Paul, it is highly worthwhile living in this world in order to carry out the duties assigned by God, however painful they may be. But he will not cling to this world as long as he can. He would be more than happy if the Lord would call him up to Heaven when God's time had come. Paul thought it not only just gain but better by far to depart this world and be with Christ in Heaven. In other words, Paul's philosophy of life and death is, as you see, just look on the bright side of life. He is saying "To live is good but to die is better."

In my friend's case, he might have had joy in living; but how did he take death? I regret to say that he did not in the least find joy or the like in death because he must have taken death as the end of life. Therefore, in his mind there was no hope for the Next World. But he wished, I speculate, he had had such kind of hope. At my last meeting with him, which I spoke of at the beginning of this message, he was nodding perhaps in half consent to my explanation of Heaven. His refusal came right after I moved the subject as to how we could go to Heaven. He would never listen to that. Why did he refuse to listen so persistently? In the process of preparing his funeral service, perhaps a possible reason became clear. A long time ago his grandfather, or great grandfather, donated a Buddhist temple in his hometown. Since then, his family's tomb was established therein and all successive heirs of the family are destined to enter in it given a posthumous Buddhist name of the highest rank. I suspect this kind of family bondage may have kept him from having the true Faith.

But I am glad to confess that I now have in mind some feelings of hope and consolation although they are still quite weak. About a week after our last meeting, I received a telephone call from him. After telling me that he had been released from hospital and home for a short while, he said rather casually, "I'm afraid I offended you last time. I do not make excuses or gloss over my earlier comment, but may I repeat it this way? While not in need just yet, if and when I really need God's help, I will send you a signal of my need. Then you will please take care of it. Will that be all right with

will die after having fully completed the Callings assigned to them in this world? Aren't there too many cases when, for personal reasons, such as economic problems or ill health, they depart this world contrary to their original intentions leaving their Callings unfinished? People also have a variety of plans to fulfill in this world other than jobs. Whatever plans they may want to do or have to do in this world may be left uncompleted at the time of their death due to other obstacles. However, we can have joyful hope when we realize that death is not the end of our life but that there is another life to be continued in the eternal world. Is it not true we carry over incomplete tasks to the Next World because it is where these tasks are to be completed?

> Being confident of this, that he who began a good work in you will carry it on to completion until the day of Christ Jesus.
>
> (PHILIPPIANS 1: 6)

The Next World, that is Heaven, where we are going after leaving this world, is a place where our tears will be wiped away, a place where reunion with our beloved people is promised, a place where justice is carried out, a place where the completion of all is expected. On the other hand, the world on earth where we now live is a place full of suffering and grief, a place of partiality and absurdity, a place of incompletion. If this is so, is it also true that life in this world is meaningless? Does it lead you to the conclusion that this world is not worth living in and that you had better just kill (waste) time and look forward to the Next World? Furthermore, is it true you should shorten your own life by yourself in order to leave for the Next World as soon as possible? Paul denied that idea:

> For to me, to live is Christ and to die is gain. (PHILLIPIANS 1: 21)

> I have been crucified with Christ and I no longer live, but Christ lives in me. The life I live in the body, I live by faith in the Son of God, who loved me and gave himself for me. (GALATIANS 2: 20)

The life in this world is important for one who lives with Christ

him, "I tell you the truth, today you will be with me in paradise."
(LUKE 23: 39-43)

No.3.....Justice is carried out in the Next World. As you know in this world there are many cases in which honesty does not always pay. On one hand you see that an honest person lived in misfortune all his life suffering from various kinds of disasters. On the other hand, it is true that an evil man seems to have enjoyed and lived happily his whole life without having any particular punishment, although he did whatever wrong he wanted. How unfair it is in the world! Sometimes people grumble. But it matters little after all, because in the Next World, God's absolutely impartial justice shall be demonstrated through his strict Judgment. God will accept warmly and give eternal life to a person of righteousness but a harsh punishment to an evil man through all eternity. Keeping this in mind, people are happily given a thought and a desire to live in the righteous way of life of God. That is why they shall become neither badly shaken by an absurdity prevailing more or less in this world, nor too much annoyed by an evil man's wrong doings.

Do not fret because of evil men or be envious of those who do wrong; for like the grass they will soon wither, like green plants they will soon die away. Trust in the Lord and do good; dwell in the land and enjoy safe pasture. Delight yourself in the Lord and he will give you the desires of your heart. Commit your way to the Lord; trust in him and he will do this: He will make your righteousness shine like the dawn, the justice of your cause like the noonday sun. Be still before the Lord and wait patiently for him; do not fret when men succeed in their ways, when they carry out their wicked schemes. Refrain from anger and turn from wrath; do not fret—it leads only to evil. For evil men will be cut off, but those who hope in the Lord will inherit the land. (PSALM 37: 1-9)

No.4.....The Next World is a place for Completion. As a duty in this world, God gives to every person a Calling, one for each—work in the field of business, scholarship, art or others. But how many (few) are there who

longing for the eternal world to come, the Next World. What is the Next World like then?

No.1..... In the Next World, God will wipe our tears from our eyes. This world is overflowing with hardship and distress. In other words, it could be called the valley of tears or the valley of the shadow of death. In this world it is true on one hand that we enjoy encountering happiness or good luck, but on the other hand, we are so sad that we become blinded with tears when an unexpected misfortune seizes us even though we know it a discipline from God. However, we will not lose our hope or joy even then because we know that in the Next World, God will surely wipe away the tears if they are not already dried up in this world.

> Now the dwelling of God is with men, and he will live with them. They will be his people, and God himself will be with them and be their God. He will wipe every tear from their eyes. There will be no more death or mourning or crying or pain, for the old order of things has passed away. (REVELATION 21: 3-4)

No.2.....The Next World is a place of reunion. It is promised that there you will enjoy a reunion with the people you have missed in this world, such as your beloved parents, husband, wife, children, brothers or sisters in Christ who passed away before you. In case you passed away and arrived there first, in a little while it will become a place of joy for you to meet and live together again with your beloved people. This belief always consoles us and strengthens our faith in the Next World. Jesus Christ immediately forgave and promised Paradise to the wicked person on the cross when that person revered God and repented his sins.

> One of the criminals who hung there hurled insults at him: "Aren't you the Christ? Save yourself and us!" But the other criminal rebuked him. "Don't you fear God," he said, "since you are under the same sentence? We are punished justly, for we are getting what our deeds deserve. But this man has done nothing wrong." Then he said, "Jesus, remember me when you come into your kingdom." Jesus answered

> I get up?' The night drags on, and I toss till dawn. (JOB 7: 3-4)

As time went by he seemed to have put his state of mind in order, at least to a certain extent. Our get-togethers going out for a drink resumed around last Fall. He looked to me little changed from before, but he talked less and less about the condition of his health, except saying briefly that he was all right. How did he manage to find a way out of his troubles like those he had? I presume it to be a kind of 'resignation' or a reluctant 'acceptance'. It may be impossible for mankind to fight against fate, however hard he works, he must have thought. If so, there would be no choice but to accept the cold facts of a situation. "I have lived my whole life in my own way, counting just on my own power—so I must keep going my way for the rest of my life no matter how long (short) it may last." I have a guess that he might have come to some such conclusion. Surely, you could say this is a way of life for SAMURAI in the long-established Bushido tradition. A manly attitude of resignation! Of course, you can call it a courageous life to which you may show sympathy and even pay respect. To my great regrets for him, however, there you cannot find any peace, hope or joy. It was probably his thought that death is the end of life. Therefore, he could not have hope or belief in everlasting life after death. Consequently, he had neither a peaceful state of mind nor the expectation of eternal life which I really regret.

To the contrary, this is not the case for we Christians who believe in Jesus Christ, the Son of God. We are, in fact, very confident that death is not the end of the whole life but the beginning of eternal life in Paradise.

> Jesus said to her, "I am the resurrection and the life. He who believes in me will live, even though he dies; and whoever lives and believes in me will never die." (JOHN 11: 25-26)

> I give them eternal life, and they shall never perish; no one can snatch them out of my hand. (JOHN 10: 28)

These promises by Jesus Christ will surely lead us to a strong faith and

check indicated the cancer had spread to other parts of his body and that it was too late and impossible to perform surgery. It was to my great regret that it was not until one year later, or one month before his death, that I was first told these facts. This 'news' was told to me by him personally and without his showing any emotion.

> For sighing comes to me instead of food; my groans pour out like water. What I feared has come upon me; what I dreaded has happened to me. I have no peace, no quietness; I have no rest, but only turmoil. (JOB 3: 24-26)

He was a SAMURAI born and bred. Born the heir of an old samurai family, he had lived his whole life as a typical SAMURAI. I never heard him tell either a tale of woe or slander another person. He was too proud to reveal a weakness, ugliness, misery or suffering that a man would usually carry with him. In other words, I felt he was a man of great self-control and natural modesty. However, he was indeed a warm and sensitive-hearted person. His heart must have been badly shaken by what had happened to him. What kind of thoughts had he been suffering all the days since he had been told by the doctor of his fatal disease? In the 1960's when the Japanese economy had just started growing at an exceptionally high speed, he entered the business world after having graduated from Tokyo University. Since then, as most front-line Japanese business warrior he worked hard and gradually became well known in international financial circles. As a natural outcome, he acquired a certain social status and sufficient wealth. He was beginning to look forward to life after retirement which he expected was not too far off. This fatal illness occurred right in the middle of such plans. "Why did this kind of cruel doom come? Why to me? Why? Why? Why?" I presume such a feeling must have attacked him persistently and repeatedly—sorrow, disappointment, frustration, regrets, helplessness and, above all, his attachment to family—surely, he was surrounded by all of these and writhed in agony.

> —so I have been allotted months of futility, and nights of misery have been assigned to me. When I lie down I think, 'How long before

We first met about 40 years ago when we both joined the Bank of Tokyo after graduating from college. We became great friends, not only in business but in our private lives as well, and were closely associated for many years. It was not long ago when a cloud began shadowing our pleasant relationship. Our conversations gradually became rather dull and not as cheerful as before. This coincided, I believe, with the beginning of my faith in Jesus Christ when I was led, through the mercy of God, to this Kichijoji Christian Ecclesia. Of course, it was to my friend I first confessed that I believed in God and Jesus Christ. In great surprise, he was silent for a while and then finally spoke—" May we still keep on going out for a 'sake' drink together from now on as before?" Since then, from time to time, he made some short but sincere comments to me after having listened to some of my 'message' tapes. I was very sure then and still am that he understood my faith in God and Jesus Christ with sympathy and respect albeit sometimes pretending to make fun of me for it. As far as he was concerned, however, it appeared he would rather remain an outsider and not commit to believing in Christianity. Whenever I brought this subject up at our meetings, he avoided showing any interest and changed the subject. As this happened repeatedly, some discordance seemed to occur in conversations between us.

> The man without the Spirit does not accept the things that come from the Spirit of God, for they are foolishness to him, and he cannot understand them, because they are spiritually discerned.
>
> (1 CORINTHIANS 2: 14)

One evening in May last year my friend telephoned me and said, "I'm telling you the truth. I have cancer of the stomach." He said this with his usual air of calm casualness. After a brief conversation, I hung up telling him I would pray for him. On May 25th, the day before his scheduled operation, I visited him in the hospital and found him looking unusually nervous and absentminded. Of course, I sympathized and understood his attitude. However, I was somewhat surprised at him because he was known as a man of great composure under all circumstances. It became clear later, however, that he had just been told by the doctor that the latest medical

LIFE and DEATH—To My Late Friend Y

> What is more, I consider everything a loss compared to the surpassing greatness of knowing Christ Jesus my Lord, for whose sake I have lost all things. I consider them rubbish, that I may gain Christ and be found in him, not having a righteousness of my own that comes from the law, but that which is through faith in Christ-the righteousness that comes from God and is by faith. I want to know Christ and the power of his resurrection and the fellowship of sharing in his sufferings, becoming like him in his death, and so, somehow, to attain to the resurrection from the dead. (PHILIPPIANS 3: 8-11)

Recently I lost one of my closest friends from disease. At our last meeting, held about a month and a half before his death, we parted rather uncomfortably from one another. We were discussing life after death. We came to the subject because he disclosed, rather matter-of-factly, that his departure from the world was not far off due to an incurable disease.

"Life in this world is a mere instant compared to eternal life after death." I said to him, "Man will continue his life in heaven, carrying with him that which was left undone in his too short life on earth. In other words, this world is much like a ladder to heaven." He nodded his head in what seemed to be agreement and said "You may be right." However, he suddenly refused to listen to me when I changed the subject to having faith in Our Lord Jesus Christ. "Stop it !" he said, "I have no such intention." I had to leave his office with great regret because it was not yet time for God in spite of my strong desire for his salvation.

> All a man's ways seem innocent to him, but motives are weighed by the Lord. Commit to the Lord whatever you do, and your plans will succeed. (PROVERBS 16: 2-3)

あとがき

本書は、「キリスト集会」でさせていただいたメッセージ等の一部を収録したものです。

本文でも明らかなように、私の信仰生活はそんなに長いものではありません。ただ主イエス・キリストと出会ってからの私の人生は、それ以前とくらべて根本から変えられました。なぜもっと早くからイエスさまを知らなかったのか、そんな悔いの思いとともに、イエスさまに出会ってから豊かに頂戴した、心の平安と感謝と希望を、まだイエスさまを知らない方、とくに若いひとりでも多くの方々と分かち合いたいと思うようになりました。生きた信仰をもつことは、決して余生が残り少ない老人たちだけの独占物にしてはいけない、そう思ったからです。

本書の刊行にあたりご尽力いただいた学生時代からの海の仲間、技術経済研究所の尾崎典彦博士、編集の労をとってくださった弓削悦子さんにお礼を申し上げます。また主にあって表紙のデザインをいただいた石黒郁彦兄弟に感謝します。さらに私の拙い英文

に筆を入れてくれた、ニューヨーク勤務時代のセクレタリー Vivienne Silva 夫人にもお礼を申し上げたいと思います。最後に、この本に花の絵を添え、終始協力し祈ってくれた妻登子に感謝します。

主イエス・キリストの光の中に一日も早く一人でも多くの方が導き入れられますよう心から祈りつつ。

二〇〇二年一月

青柳　惇

著者略歴

青柳惇　一九三八年京都に生まれる。一九六二年京都大学法学部卒業、同年東京銀行入行。一九九四年同行取締役退任後、ソデックスコーポレーション社長・会長を経て、二〇〇一年六月顧問に就任。一九九七年「キリスト集会」ゴットホルド・ベック兄弟により受洗。

＊本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳聖書」ならびに International Bible Society, The Holy Bible, New International Version, から引用しています。

＊「キリスト集会」

国内約一五〇か所、海外一〇か所で定期的に集会が持たれています。

連絡先　〒一八〇-〇〇〇四　東京都武蔵野市吉祥寺本町四-九-一一

電話　〇四二二-二一-八四五〇または〇四二二-二二-二〇一六

若い日に創造者を覚えよ

二〇〇二年三月二十三日　初版発行
二〇〇二年九月十二日　三刷発行

著　者　青柳　惇
発行人　尾崎典彦
発行所　技術経済研究所
〒一〇六-〇〇四二　東京都港区麻布狸穴町四一-二-一
電話　〇三-三五六八-八二-六一
ファックス　〇三-三五六八-八二六五
印刷所　（株）シナノ

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
本書の一部または全部を無断で転載、複製、翻訳することを禁じます。
ISBN4-906445-12-8 C0016
©2002 Makoto Aoyagi